兵庫県文化財調査報告書　第87冊

有年原・田中遺跡

発掘調査報告

赤穂市立原小学校新築工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1991年

兵庫県教育委員会

千種川より調査区を望む（西より）

調査区より矢野川流域を望む（西より）

調査区より千種川方面を望む（東より）

石列遺構（正面：南東より）

例　　言

1　本報告書は、赤穂市有年原字田中に所在する「有年原・田中遺跡」の発掘調査報告書である。

2　「有年原・田中遺跡」は赤穂市立原小学校の新築工事に伴い、同市教育委員会から調査の委託を受け、昭和62年７月から同年９月にかけて兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した。

3　発掘調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課森内秀造（現兵庫県立歴史博物館）、平田博幸・西口圭介（現兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）が行った。

4　遺物の接合・復元、作図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町）において、平田・西口を中心として広戸紀子、森本貴子、宮田麻子等で行った。

5　調査現場での遺構写真・遺物出土状況の写真撮影は調査員が行い、整理後の遺物写真の撮影は㈱吉田カメラ商会に委託して行った。

6　「周辺遺跡」には国土地理院発刊25000 分の１図「二木」「相生」「上郡」「三石」を使用し、遺跡周辺の地形図は赤穂市作成のものを使用した。

7　同一地区の調査であるため、「原小学校校庭内遺跡第３次調査」主要遺構の配置図を赤穂市教育委員会より借用し、調査結果の概要に関する教授を頂いた。

8　現地においては、奈良国立文化財研究所の山中敏史氏に御教授と御指導を頂いた。

9　本書の執筆・編集は平田と西口が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の概要

1．調査に至る経過 …… 1

2．調査の体制 …… 2

3．調査日誌 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の調査

1．遺跡の歴史的環境 …… 5

2．遺跡の概要 …… 11

第Ⅲ章　遺　　構

1．弥生時代の遺構
　A．竪穴住居址 …… 15

　B．土壙 …… 17

2．古墳時代の遺構
　A．溝 …… 17

3．飛鳥・藤原時代から奈良時代前半の遺構
　A．掘立柱建物址 …… 18

B．建物址にならない柱列 ……24

C．土壙 ……24

D．溝 ……25

E．石列遺構 ……26

4．中世の遺構
A．掘立柱建物址 ……27

B．火葬墓 ……29

C．土壙 ……30

第Ⅳ章　遺　　物

1．各遺構出土の土器
A．溝－1出土の土器 ……31

B．溝－2出土の土器 ……32

C．土壙－3出土の土器 ……34

D．各土壙出土の土器 ……35

E．掘立柱建物址に関する土器 ……37

F．石列遺構に関する土器 ……41

G．ピット内出土の土器 ……44

2．中世遺構出土の土器
A．火葬墓に伴う土器 ……46

B．ピット内出土の土器 …… 46

3．包含層出土の土器
A．弥生時代の土器 …… 46

B．飛鳥・藤原時代の土器 ……47

C．奈良時代の土器 …… 48

D．平安時代、中世の土器 ……49

4．包含層出土のその他の遺物
A．石器 …… 50

B．金属器 …… 50

C．土製品 …… 51

5．処理槽地区出土の土器
A．須恵器 …… 52

6．ポンプ場地区出土の土器
A．須恵器 …… 52

第Ⅴ章　まとめにかえて

1．掘立柱建物址に関して ……53

2．本遺跡出土の土器に関して ……56

結　　語 …… 59

挿　図　目　次

第１図　調査対象区位置図 …… 1
第２図　調査区地区割図 …… 4
第３図　赤穂市位置図 …… 5
第４図　赤穂市北部地域遺跡分布図 …… 6
第５図　有年・牟礼地区遺跡分布図 …… 9
第６図　遺跡周辺地形概略図 ……11
第７図　調査区内等高線図 ……11
第８図　処理槽地区土層断面図 ……13
第９図　ポンプ場地区土層断面図 ……13
第10図　遺跡周辺等高線図 ……14
第11図　竪穴住居址（ＳＢ－１）遺構図 ……15
第12図　Ｂ－１区弥生時代後期遺構図 ……16
第13図　Ｂ－１区最終遺構図 ……16
第14図　土壙－２内土器出土状況 ……17
第15図　溝－１断面図 ……17
第16図　掘立柱建物址（ＳＢ－14）柱穴断面図 ……19
第17図　掘立柱建物址（ＳＢ－19）柱穴断面図 ……20
第18図　掘立柱建物址（ＳＢ－20）柱穴断面図 ……20
第19図　掘立柱建物址（ＳＢ－21）柱穴断面図 ……20
第20図　掘立柱建物址（ＳＢ－26）柱穴断面図 ……21
第21図　建物址にならない柱列（ＳＢ－13）断面図 ……24
第22図　土壙－３遺構図 ……24
第23図　溝－１・溝－２断面図 ……25
第24図　溝－５断面図 ……26
第25図　石列南溝断面図 ……26
第26図　中世面遺構図 ……28
第27図　火葬墓遺構図 ……29
第28図　土壙－７遺構図 ……30
第29図　出土円面硯 ……42
第30図　石列整地層内出土土器 ……43
第31図　ピット内出土御歯黒壷 ……46

第32図　処理槽地区出土土器 ……52
第33図　ポンプ場地区出土土器 ……52
第34図　Ⅰ期遺構概略図 ……54
第35図　Ⅱ期遺構概略図 ……54
第36図　Ⅲ期遺構概略図 ……55
第37図　Ⅳ期遺構概略図 ……55
第38図　器種構成図 ……56
第39図　器種別指数図 ……57

表　目　次

表１　周辺遺跡地名表 …… 7
表２　有年・牟礼地域遺跡地名表 …… 9
表３　掘立柱建物址規模一覧 ……23
表４　土垂一覧 ……51
表５　溝関連出土土器一覧 ……60
表６　土壙出土土器一覧 ……62
表７　掘立柱建物址関連土器一覧 ……64
表８　石列南溝内出土土器一覧 ……66
表９　石列遺構関連土器一覧 ……67
表10　ピット内出土飛鳥・藤原時代土器一覧 ……68
表11　ピット内出土奈良時代土器一覧 ……69
表12　火葬墓出土土器一覧 ……69
表13　包含層出土弥生土器一覧 ……70
表14　包含層出土飛鳥・藤原時代土器一覧 ……70
表15　包含層出土奈良時代土器一覧 ……71
表16　包含層出土平安時代・中世土器一覧 ……73
表17　処理槽地区およびポンプ場地区出土土器一覧 ……73

カラー写真図版目次

カラー写真図版１　上：千種川より調査区を望む（西より）
下：調査区より矢野川流域を望む（西より）

カラー写真図版２　上：調査区より千種川方面を望む（東より）
下：石列遺構（正面：南東より）

図版目次

図版１　遺跡周辺図
図版２　調査区西半土層断面図
図版３　調査区東半土層断面図
図版４　遺構全図
図版５　石列関連遺構図
図版６　溝－１出土土器
図版７　溝－２出土須恵器
図版８　溝－２出土土師器
図版９　土壙－３出土土器
図版10　各土壙出土土器
図版11　掘立柱建物址（ＳＢ）関連土器－１
図版12　掘立柱建物址（ＳＢ）関連土器－２
図版13　掘立柱建物址（ＳＢ）関連土器－３
図版14　石列関連土器
図版15　石列南溝出土土器
図版16　ピット内出土飛鳥・藤原時代土器
図版17　ピット内出土奈良時代土器
図版18　弥生土器

図版19　包含層出土飛鳥・藤原時代土器
図版20　包含層出土奈良時代須恵器
図版21　包含層出土奈良時代土師器
図版22　火葬墓および包含層出土平安時代・中世土器
図版23　包含層出土石器
図版24　包含層出土金属製品
図版25　包含層出土土製品
図版26　遺跡周辺空中写真
図版27　上：遺跡空中写真（南より）
　　下：同　上（北より）
図版28　上：第２遺構面空中写真（垂直）
　　下：第３遺構空中写真（垂直）
図版29　上：Ｂ－１区弥生時代後期遺構面（西より）
　　下：Ｂ－１区最終遺構面全景（西より）
図版30　上：竪穴住居址［ＳＢ－１］と掘立柱建物址［ＳＢ－30］（南より）
　　下：土壙－２内弥生土器出土状況
図版31　上：掘立柱建物址［ＳＢ－14］（南より）
　　下：掘立柱建物址［ＳＢ－18］（南より）
図版32　上：掘立柱建物址［ＳＢ－19］（北より）
　　下：掘立柱建物址［ＳＢ－20］（北より）
図版33　上：平安時代掘立柱建物址［ＳＢ－37］（南より）
　　下：中世掘立柱建物址［ＳＢ－39・40］（南より）
図版34　上：土壙－３全景（南より）
　　下：火葬墓全景（南より）
図版35　上：上層遺構面北半部分（西より）
　　下：上層遺構面南半部分（西より）
図版36　上：石列遺構全景（南より）
　　下：石列遺構および南溝全景（東より）
図版37　上：溝－１出土土器
　　下：溝－２出土須恵器
図版38　上：溝－２出土土師器
　　下：土壙－４出土土器

図版39　上：ＳＢ－14雨落溝内出土土器
　　中：ＳＢ－21雨落溝内出土土器
　　下：ＳＢ－18柱穴内出土土器
図版40　土壙－３出土土器
図版41　石列南溝内出土土器
図版42　石列関連土器
図版43　上：ピット内出土飛鳥・藤原時代土器
　　下：ピット内出土奈良時代土器
図版44　上：土壙－１出土土器
　　中：土壙－２出土土器
　　下：包含層出土弥生土器
図版45　包含層出土飛鳥・藤原時代土器
図版46　包含層出土奈良時代土器
図版47　上：火葬墓出土土器
　　中：ピット内御歯黒壷
　　下：包含層出土中世土器
図版48　出土金属製品

第Ⅰ章　調査の概要

1．調査に至る経過

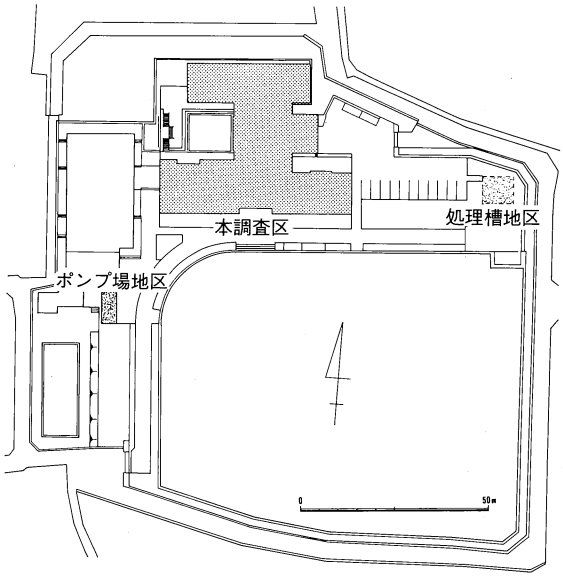
赤穂市立原小学校の敷地は、昭和32（1957）年の校舎建設時に遺跡である事が確認されて以来、「原小学校校庭遺跡」として周知されているため、同校の施設改修工事等に際しは、同市教育委員会により既に3次にわたる調査が実施されている。このうち、第3次の発掘調査は本校舎の改築工事（今回の発掘調査と同一の工事）に先行するものであり、調査区域は新校舎予定地の南西箇所にあたる。この調査では弥生時代後期・奈良時代・平安時代と少なくとも3時期の生活層が確認できたと言うことである。

この第3次の調査では約300㎡にわたって全面調査を実施したが、本来発掘調査の対象となる校舎の敷地面積は約1500㎡であり、全面にわたって3時期の遺構面の存在が想定できる事に加え、校舎建設工事の開始期限が既に迫っている状況の中で、同市教育委員会ではこの調査に対応できない状況に陥っていた。ただ市教育委員会は本遺跡の重要性を十分考慮され、埋蔵文化財保護とその有効利用の見地から、県教育委員会に調査の協力を依頼された。

県教育委員会としても第3次調査の成果を検討した結果、期間的に十分な調査を遂行する事は不可能であるため、校舎建設位置の変更、工事開始時期の延長等に関して市教育委員会と協議・調整を行ったが、いずれとも変更することは不可能であるとの結論に終始した。

そこで、県教育委員会としても学校教育と埋蔵文化財保護を両立させるために、可能な限りの手段をこうじて発掘調査に対応すると共に、市教育委員会からも十分なる協力をいただき、昭和62年7月から同年9月にかけて第4次にあたる調査を実施した。

また、本遺跡は上記したように「原小学校校庭遺跡」として周知されている遺跡であるが、隣接する「原校裏山遺跡」とも本質的には一連の遺跡であり、さらに遺跡範囲の拡大・その性格等を含め、今後の同遺跡の占める歴史的・考古学的価値の重要性を考慮して、その名称を所在する字名に因んで「有年原・田中遺跡」として報告する。



第1図　調査対象区位置図

2．調査の体制

現地での発掘調査、その後の兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所での出土品の整理に関する兵庫県教育委員会の調査・整理および事務体制は次のとおりである。

発掘調査（昭和62年度）

＊兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課　　長：北村幸久／参　　事：森崎理一／副課長：黒田賢一朗

課長補佐：福田至宏／課長補佐兼管理係長：山口幸作

課長補佐兼埋蔵文化財係長：大村敬通／主　　査：小川良太／主　　任：岡田章一

整理作業（昭和63年度）

＊兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

課　　長：中根孝司／参　　事：森崎理一・日野和広／副 課 長：高坂　隆

課長補佐：松下　勝／課長補佐兼管理係長：山口幸作

課長補佐兼埋蔵文化財係長：大村敬通／主　　査：小川良太／主　　任：岡田章一

整理担当：平田博幸・西口圭介

整理作業（昭和64・平成元年度）

＊兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所　　長：大江　剛

副所長兼調査第２課長：村上紘揚／総務課長：小池英隆

整理普及課長：松下　勝／主　　任：加古千恵子／技術職員：別府洋二・岸本一宏

整理担当：平田博幸・西口圭介

整理作業（平成２年度）

＊兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所　　長：内田隆義／副 所 長：村上紘揚／総務課長：小池英隆

整理普及課長：松下　勝／主　　任：加古千恵子／技術職員：別府洋二・岸本一宏

整理担当：平田博幸・西口圭介

調査期間に大きな制約があり、十分な調査が遂行できなかった事は非常に残念であるが、新校舎で卒業生を送り出したいという教育的配慮と文化財保護の間にありながら、今回の調査に惜しみない御協力と御助力を賜りました赤穂市教育委員会、および地元の方々に深く感謝申し上げたいと思います。また、公務の間をぬって数々の御指導と御教授を下さいました奈良国立文化財研究所の山中敏史氏をはじめ、関連諸機関の方々にもこの紙面を借りて御礼申し上げたいと思います。

3．調査日誌

全面調査（昭和62年７月10日～同年９月21日）

７月８日	赤穂市教育委員会と現地立合。
７月10日	重機掘削開始。浄化槽部分東半分を掘削。校舎部分南西の一部を掘削。
７月11日	校舎部分の重機掘削。
７月12日	休日。
７月13日	浄化槽部：全域の機械掘削。校舎部：市教委調査区境を堀上げる。
７月14～18日	校舎部：重機掘削。（７月15日：浄化槽部分調査終了）
７月19日	休日。
７月20～28日	第１面包含層人力掘削。（７月23日：機械掘削終了、７月26日休日） 第１遺構面は南西に向かって下がる。Ｄ・Ｅ－３～５区は包含層直下に地山が現れる。
７月29～	
８月１日	Ｄ・Ｅ－３～５区の遺構検出と遺構掘削。
８月２・３日	休日。
８月４日	中央セクションの実測・撤去。Ａ～Ｄ－１区人力掘削。
８月５・６日	Ｂ・Ｃ－１区遺構検出と遺構掘削。
８月７日	Ａ・Ｂ－１区更に一層下げる。Ｂ・Ｃ－１区平板測量、遺物の取り上げ。
８月８・10日	Ａ・Ｂ－１区遺構検出、遺構掘削。Ｂ・Ｃ－２区第１遺構の検出、遺構掘削。（８月９日：休日）
８月11日	Ｃ－３区の遺構検出。Ａ・Ｂ・Ｃ－１・２・３区の遺構実測。
８月12日	Ａ・Ｂ－４区遺構の堀上げ。遺構実測。Ｄ－３・４区の平板測量。
８月13日	市教委と今後の工程に関して打ち合わせ。Ｃ－２・３区平面実測。
８月14～16日	盆休み。
８月17日	Ａ・Ｂ－１・２区写真撮影。エレベーション終了。Ｃ－１区を最終面まで人力掘削。
８月18日	Ｂ・Ｃ－１区第２面まで下げる。Ｃ－２区南半分の人力掘削。
８月19日	Ａ・Ｂ－１区を第２面まで掘削。Ｂ・Ｃ－１区第２面遺構検出。
８月20・21日	Ａ・Ｂ－１区の遺構検出。Ｂ・Ｃ－１区溝－１を掘削。
８月22・23日	休日。
８月24日	Ａ・Ｂ－１区の溝－１掘削。
８月25日	Ａ・Ｂ－１区溝－１の掘削終了。
８月26日	Ｂ・Ｃ－２区遺構検出。Ｃ－３・４区の遺構検出と遺構掘削。
８月27日	Ｃ－３・４区遺構検出、遺構掘削。
８月28日	写真に備えて調査区全域の清掃。
８月29日	ヘリコプターによる写真撮影。南西部から第３面の人力掘削。

8月30日　休日。

8月31日　C－2区土壙－7の実測。

9月1日　D－4区、E－3・4区最終遺構の検出、遺構掘削。

9月2日　D・E－3区の遺構検出、遺構掘削。D－4区遺構掘削。

9月3日　C－3・4区を最終面まで人力掘削。

9月4日　A・B－1・2区を最終面まで人力掘削。B－2区最終遺構の検出。

9月5・6日　B・C－3・4区の遺構検出、遺構掘削。

9月7日　航空写真撮影に備えて全域の清掃。

9月8日　降雨のため写真撮影中止。奈良国立文化財研究所山中敏史氏来跡。

9月9日　航空写真撮影のため全域の清掃。午後写真撮影。

A－1・2区の弥生包含層の人力掘削。

A－2区西拡張部の遺構検出、遺構掘削。

9月10日　個別遺構の写真撮影。A－2区西拡張区の第1遺構面写真撮影。A－1・2区最終遺構面まで人力掘削。

9月11・12日　降雨のため屋外作業中止。

9月13日　休日。

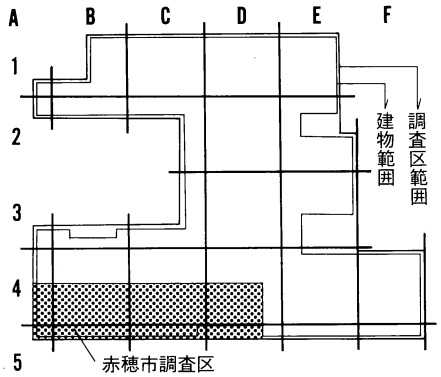
9月14・15日　東側よりピット・柱穴の立ち割り。

9月16日　A－2西拡張区最終遺構掘削、平面実測。A－1・2区最終遺構掘削。

9月17日　B・C－4・5区柱穴立ち割り。A－1・2区最終遺構面の写真撮影、平面実測。

9月18～20日　掘立柱建物址に関する柱穴の立ち割り、断面実測。

9月21日　調査区壁面の断面実測。現場事務所の引き上げ。



第2図　調査区地区割図

第Ⅱ章　遺跡の調査

1．遺跡の歴史的環境

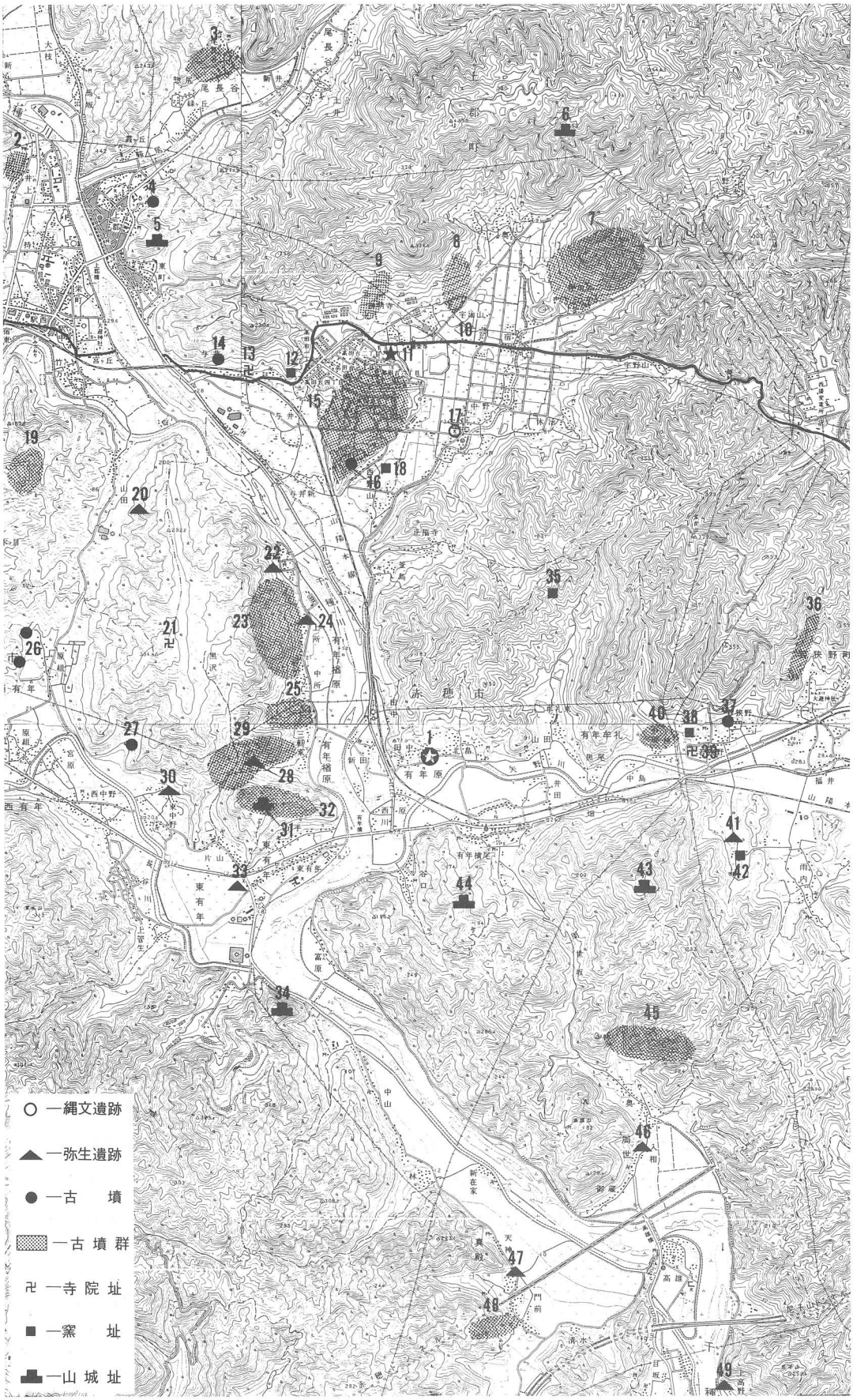
赤穂市は兵庫県の南西部に位置し、西側は岡山県備前市・日生町と県境をなしている。同市は東の相生市・北の上郡町と共に旧赤穂郡を形成していたが、1951年9月に市政を施行した後、1955年4月に今回報告する「有年原・田中遺跡」の所在する有年村を編入し、市域の北辺が形成された。市域の大部分は中生代の「相生層群」を母岩とした山地で占められ、その間を千種川が有年・真殿・周世・高野の各地域を経て南流し、河口に現市街地の広がる沖積地が発達している。近世以降この沖積地の周囲が大規模に干拓・埋め立てされ、現在見るような広範囲の平野部が形成された。この河口部以外には顕著な平野部の発達はなく、千種川沿い及びその支流である矢野川・長谷川の流れに沿ってわずかに谷底平野が形成されている。こうした状況は旧郡内における全般的な傾向であるが、各河川から派生する多くの谷部は深く、そこに良好な扇状地が多く発達している。

第3図　赤穂市位置図

旧郡内における遺跡の集中箇所は、その南部と北部の二極に大別できる。南部地域の遺跡は海岸部もしくは河口平野部に接した丘陵部に位置している。これは、縄文海進により臨海部に平野部が無く、千種川沿いも高野地域まで海岸線が入り込んでいた結果によるものである。ここには、旧郡内の半数近くの縄文遺跡が集中している反面、弥生時代以降の遺跡が極端に少なくなっている。

南部地域の遺跡分布の中心は大津川河口域であり、特にその左岸に所在する塩屋堂山遺跡が基幹的集落遺跡となってる。縄文時代についてみると、塩屋堂山遺跡の東に位置する塩屋築田遺跡・赤穂大橋下遺跡・御崎に所在する猪壷谷遺跡等、同地区の他の遺跡がいずれも後期のみの遺跡であるのに対し、塩屋堂山遺跡では中期からその存在を確認する事ができる。ただ、猪壷谷遺跡では中部地域の馬路池遺跡と並ぶ数少ない旧石器（小型尖頭器）と共に、塩屋堂山遺跡では見られない豊富な石器群が出土している。

弥生時代では赤穂大橋下遺跡・南野中遺跡で弥生土器が発見されているが摩滅が著しく、千種川によって上流から運ばれてきたものと思われるため、南部地域の弥生遺跡は未発見の状態にあるというよりは、基本的にほとんど存在しなかったものと思われる。塩屋堂山遺跡においても、弥生時代末と古墳時代後期に一時的に存在が見られるのみであり、さらに平安時代後期に塩田関係の遺構が築かれている程度で、遺跡の存在期間は比較的短い。ただ高野



第４図　赤穂市北部地域遺跡分布図

表１　赤穂市北部地域遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時代	備考
1	有年原・田中遺跡	赤穂市有年原字田中	弥生～中世	旧原小学校校庭遺跡等
2	井上古墳群	上郡町井の上字西山	古墳時代後期	4基確認
3	尾長谷古墳群	尾長谷字惣尻	古墳時代後期	5基確認
4	丸尾古墳	上丸字尾の上	古墳時代中期	
5	柏原城	上郡字柏原	中世	
6	高田城	奥	中世	
7	佐用谷古墳群	佐用谷字上の山	古墳時代後期	6基確認
8	宇治山古墳群	宇治山字殿垣内	古墳時代後期	3基確認
9	神明寺古墳群	神明寺字長安	古墳時代後期	2基確認
10	古代山陽道	相生市若狭野町上土井から上郡町船坂峠(旧赤穂郡内)		
11	高田駅家	上郡町神明寺	奈良時代	旧神明寺廃寺
12	与井瓦窯址		奈良時代	
13	与井廃寺跡	与井字寺の前	奈良時代	
14	与井西山古墳	与井	古墳時代後期	
15	西野山・中山古墳群	西野山	古墳時代後期	西野山16基、中山15基
16	西野山古墳	同　上	古墳時代前期	
17	梨ノ木遺跡	中野字梨ノ木	縄文時代前期	
18	中山瓦窯跡	西野山字中山	奈良時代	
19	大谷古墳群	山野里字大谷	古墳時代後期	3基確認
20	山田遺跡	竹万字山田	弥生時代中期	
21	光明寺廃寺	黒沢山	中世	
22	野田遺跡	赤穂市有年楢原野田桐谷	弥生時代中期	
23	野田古墳群	同　上	古墳時代後期	5基確認
24	上所山田遺跡	有年楢原字上所山田	弥生時代中期	
25	中所古墳群	有年楢原中所字谷奥	古墳時代後期	4基確認
26	北山古墳群	西有年字北山	古墳時代後期	3基確認
27	谷口古墳群	字谷口	古墳時代後期	
28	三軒家遺跡	有年楢原字三軒家	弥生時代中期	
29	三軒家古墳群	同　上	古墳時代後期	11基確認
30	東中野遺跡	西有年東中野	弥生時代中期	
31	有年山城	有年楢原片山	中世	
32	有年中裏古墳群	中原	古墳時代後期	9基確認
33	沖田遺跡	東有年沖田	弥生後期	
34	鍋子城	豊原	中世	
35	山田奥窯跡	有年牟礼東字山田奥	6世紀末以降	
36	下土井宮裏古墳群	下土井字宮裏山	古墳時代後期	4基確認
37	若狭野古墳	相生市若狭野町若狭野	古墳時代末	
38	若狭野瓦窯址	寺の本	奈良時代	
39	若狭野廃寺	同　上	奈良時代	
40	荒神山古墳	赤穂市有年牟礼黒尾	古墳時代後期	
41	芋谷遺跡	若狭野字芋谷	弥生時代中期	
42	松崎瓦窯址	字松崎	奈良時代	
43	高野須城	赤穂市有年原横尾	中世	
44	鵜ヶ堂城	同　上	中世	
45	宮裏山古墳群	赤穂市高雄周世字宮裏山	古墳時代後期	28基確認
46	周世・入相遺跡	字入相	弥生時代中後期	
47	門前遺跡	真殿字門前	弥生時代中期	
48	門前古墳群		古墳時代後期	5基確認
49	高野遺跡	高野上高野	石製銅鐸鋳型	

の上高野遺跡で、県下では姫路市の名古山遺跡とならぶ銅鐸の石製鋳型（扁平鈕式）が発見されており、未発見の銅鐸生産遺跡が同地区内に存在しているものと思われる。

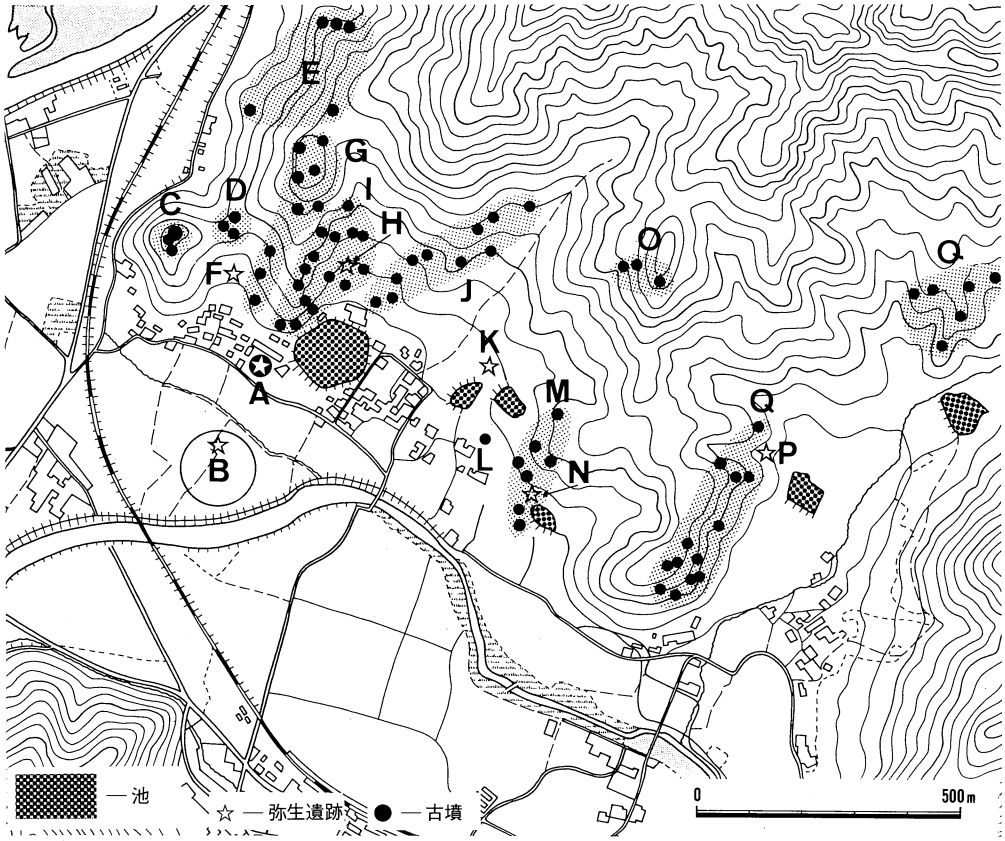
古墳も大林と大塚の２箇所のみであり、奈良時代の遺跡は皆無である事からすれば、南部地域の今日みるような発達の礎は、千種川河口に三角洲が形成されて加里屋古城が築かれ、経済活動が活発化する中世代に始まるようである。

中近世の南部地域の発展に対し、北部地域は古代における赤穂郡の中心地域である。中世筑紫大道とも重複する現国道２号線が通る、若狭野・有年地区には特に多くの遺跡の集中が見られる。この地域は千種川とその支流の矢野川・長谷川三河川が合流する地点でもあり、千種川による南北交通と、内陸部における東西陸上交通の交差点となっている。ただ、奈良時代から平安時代に整備された古代山陽道は、それより北側の矢野・高田・上郡地区を通過しているが、その周辺でも高田の与井西山・中山・西野山に古墳群が、上郡では井上・丸尾の両古墳が存在するだけであり、有年地域との勢力差は歴然としている。

遺跡の集中が著しい矢野川・長谷川流域の内、西有年字北山に所在する馬路池遺跡は、縄文草創期から早期に属する優れた石器群が大量に出土しており、播磨地域を代表する縄文遺跡の一つである。上郡町内ではこの他に、大池遺跡・梨ノ木遺跡の縄文遺跡が確認されているが、同期の遺跡の多くは南部地域に集中しているため相対的に数が少ない。

弥生時代になると、谷内およびそこから派生する扇状地上に多くの遺跡が出現する。相生市・上郡町域でも少数の遺跡が確認されているが、その多くは有年地区に集まる。千種川右岸では、光明寺廃寺の位置する黒沢山の東斜面に、野田遺跡・上所遺跡・三家屋遺跡等中期後半の遺跡が存在する。特に祇園山遺跡は高地性の集落址と考えられており、上記の遺跡の中にはそれに近い性格のものもあるかと思われる。東岸では、「有年原・田中遺跡」の裏山にあたる奥山付近に多くが見られる。このうち上郡町の六ツ岩遺跡をはじめとして、北原遺跡・奥山遺跡等は後期に属する高地所在の遺跡であり、特に奥山遺跡からは、直径8.5cmの小型仿製内行花文鏡が出土している。周囲にも木虎谷遺跡・北畠遺跡・ハトカ遺跡・山田遺跡と中期後半から後期の遺跡が集中しており、さらに「有年原・田中遺跡」の南側、矢野川が千種川と合流する付近の平野部微高地上には、後期の竪穴住居址を埋めて特殊器台状土器を伴った墳丘墓が確認されており、同地区の勢力の伸張を伺うことができる。

古墳時代には相生市の佐方裏山古墳・上郡町の西野山古墳など、各地区に４世紀末から５世紀初頭の前期古墳が出現するように、有年地区においても千種川左岸の蟻無山に同時代の蟻無山古墳群と奥山古墳群が存在する。蟻無山１号墳は径約50ｍの帆立貝形を呈しており、上記二基の前期古墳同様、赤穂市域を統地した首長的勢力の存在を示す古墳といえる。蟻無山周辺には弥生遺跡と重複するように、北原・木虎谷・惣計谷・奥山田・塚山の各古墳群が点在している。これらはいずれも、後期に属する群集墳である。有年に隣接する相生市若狭野の若狭野古墳は前・後室を持つ７世紀中葉の方墳であるが、牟礼東所在の塚山１～３号墳も同様の内部主体を持つ方墳群である。千種川右岸には黒沢山を中心として、野田・中所・番ヶ瀬・三軒家・与井谷口の各群集墳が見られる。このうち野田２号墳は、塚山古墳群に類似した仕切りを伴う石室を内部主体としているため、この時期に矢野川流域を中心として異質の系統を有する勢力が進出したことが伺える。さらに、与井谷口古墳群は高取山古墳群と



第5図　有年・牟礼地区遺跡分布図

表2　有年・牟礼地区遺跡地名表

No.	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備　　考
A	有年原・田中遺跡	赤穂市有年原字田中	弥生中期～中世	旧原小学校遺跡
B	有年原・田中墳丘墓	同　　上	弥生時代末	
C	蟻無山古墳群	字北原	古墳時代前期	3基確認
D	玉掘古墳群	字玉掘	古墳時代後期	3基確認
E	北原古墳群	字北原	古墳時代後期	5基確認
F	奥山遺跡	字奥山	弥生時代中後期	小型仿製鏡出土
G	奥山古墳群	同　　上	古墳時代後期	3基確認
H	木虎谷遺跡	木虎谷	弥生時代中期	
I	木虎谷古墳群	同　　上	古墳時代後期	15基確認
J	惣計谷古墳群	北畠惣計谷	古墳時代後期	10基確認
K	北畠遺跡	北畠惣計谷	弥生時代中期	
L	津村古墳	字津村	前期古墳か	明確な時期不明
M	ハトカ古墳群	有年牟礼東山田	古墳時代後期	3基確認
N	ハトカ遺跡	同　　上	弥生時代中期	
O	奥山田古墳群	奥山田	古墳時代後期	3基確認
P	山田遺跡	山田	弥生時代中期	
Q	塚山古墳群	同　　上	古墳時代後期	19基確認

並ぶ積石塚古墳群であり、県内においても著しく異質な存在である。

奈良・平安時代には政治的要因のもとに古代山陽道が、北側の高田・上郡地域に設けられ、郡衙および高田駅家等官衙遺跡が山陽道に面する高田郷＝現高田・与井地区に置かれたようである。ただ、この時期にも有年原・田中遺跡、若狭野廃寺等が存在するように、矢野川・長谷川ラインが在地的性格の強い基幹ルートであったと思われる。これ以降、中・近世においては赤穂城の築城からも分かるように、政治・経済の中心は完全に南部地域の平野部に移る。塩田経営、千種川を利用して内陸部から集積した物資等の瀬戸内海を利用しての海船輸送は、現赤穂市街地形成の必要条件であるが、その母体を支えてきたのは、古代における北部地域の在地エネルギーに他ならない。

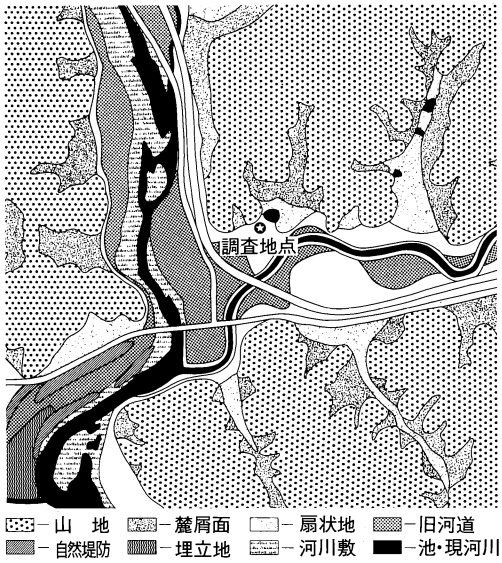
最近同市内でも市教育委員会による圃場整備事業に関連した発掘調査によって、多くの遺跡が発見され、また全容が明らかになりつつある。特に矢野川・長谷川流域におけるその成果は著しく、東有年の沖田遺跡では、単位集団を抽出出来る古墳時代中葉の竪穴住居址が数多く発見され、その内の１棟からは土馬が出土したと報じられている。同遺跡は弥生時代の祭祀遺跡とも考えられていた遺跡であるが、今回の発見により同遺跡の性格がより幅広く、多彩なものとなってきたようである。

さらに、有年原・田中遺跡の東側に所在する牟礼・山田遺跡は、矢野川の谷平野部を望む谷口部の扇状地上に所在している。奈良時代を中心とする柱穴群が多数確認されており、８棟以上の掘立柱建物址が存在していた事が明らかとなってきた。掘立柱建物址の規模も大きく、概観的には有年原・田中遺跡に非常に類似した遺跡である。特に、「秦」とヘラ書きされた須恵器が出土しており、矢野郷の有力氏族である“秦氏”との関連が大いに注目される遺跡であるが、時期的には「有年原・田中遺跡」と若干並存するもののその中心は、奈良時代の後半に属すものであり、背後の谷部に前記した塚山古墳群をひかえている点を考えあわせると、両遺跡の関係は矢野川流域ひいては旧赤穂郡域の古代史とも関連するものであり、今後の検討が期待される。

2．遺跡の概要

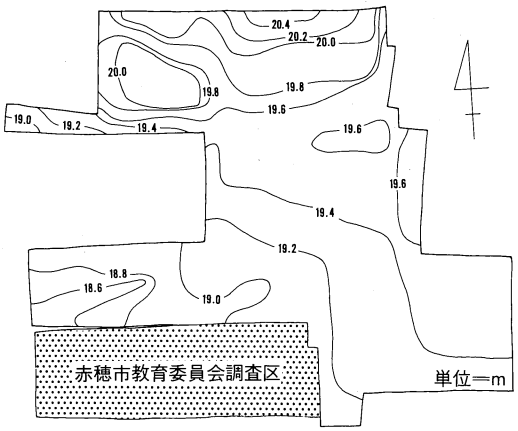
有年原・田中遺跡は、千種川とその支流矢野川の合流地域の北にあり、北の宝台山から伸びてきた山塊が、矢野川によって形成された平野部に面する南向きの緩やかな扇状地上に位置している。海抜で約19～20ｍを計る。本遺跡の位置している扇状地は基本的には、奥山・木虎谷の両古墳群のある支脈から伸びてくるものである。小学校校庭南辺を通る市道はその南に広がる現水田との間に明確な段差があり、旧河道が流れていることが分かる。そこから南に広がる谷内平野部の微高地上には、弥生時代後期の集落と特殊器台様の土器を伴う弥生時代終末の墳丘墓が構築されている。

本遺跡については、前記したように３次にわたる調査が実施されている。第１次調査は昭和54（1979）年の校庭拡張に伴うものであり、第２次調査は昭和56（1981）年の体育館建設に関連した調査であるが、円面硯・朱塗椀等多くの遺物が出土している。今回の調査と一連の校舎改築に伴う第３次調査では、弥生時代中期から平安時代の多くの遺物と共に、奈良時代の墨書土器・円面硯等が出土し、遺構では大型の方形堀方を持つ掘立柱建物址等が確認されている。これに先立つ昭和42（1967）年には、校舎裏山裾の開墾中に須恵質の鞍持ち形態の土馬が出土していること、さらに北側の山間に蟻無山古墳群をはじめとして多くの古墳群が存在している事から、古くから有年地域の中核的遺跡として注目されていた。



第６図　遺跡周辺地形概略図
（赤穂市史を基にして作製）

第４次にあたる今回の調査は、市教育委員会の実施した第３次調査の延長部分であり、新校舎の建て上げ範囲を調査対象とした。この調査によって、遺跡の性格がかなり明確となってきた。遺跡の基盤土層となる灰黄色土層が南西に向かって下がっているため、この部分（Ａ～Ｄ－４区）には少なくとも弥生時代から中世の４時期の遺構面が確認でき、各遺構面間には水田と思われる土壌層が存在している。ただ各時期の遺構面の土質と遺構内埋土が類似している



第７図　調査区内等高線図

ため、平面的に遺構を確認することが非常に困難であり、結果的に平安時代・中世、奈良時代、弥生時代・飛鳥時代の３遺構面で調査を実施した。調査区の東側（Ｅ・Ｆ－３～５区）は旧耕土直下でこの灰黄色土が現れるため、全時期の遺構を同一面で検出する結果となった（実際には弥生時代の遺構はなかった）。

弥生時代の包含層から旧石器時代に含まれる翼状剥片も出土しているが、検出し得た遺構の中で最も古いものは弥生時代中期の円形竪穴住居址である。調査区の中央南辺に所在し、南半は調査区外となり、北半の西側は市教育委員会がすでに調査を終了していた。北側の山中および谷内扇状地には数箇所の弥生時代中期の遺跡が確認されているため、そうした遺跡と一群を成していたものと思われる。さらに調査区の北西隅、削平古墳の墳丘部分には竪穴住居址の壁溝の痕跡と思われる溝があり、内部に後期の土器が少量含まれていた。

古墳時代の生活遺構は存在していないが、調査区の北西隅（Ａ・Ｂ－１・２区）に古墳の周溝の痕跡と思われる溝（溝－１）がある。溝内からは、後世の遺物と共に６世紀初頭の須恵器や埴輪片が出土しており、北に接する山間には同時期の古墳も含まれる木虎谷古墳群が位置しているため、その群内の１基であったものと思われる。

飛鳥時代後半から奈良時代前半には、多数の掘立柱建物址が出現する。飛鳥・藤原時代の内で最も古いⅠ期の建物址はＣ・Ｄ－１～３区に４棟あり、いずれも真北方向を示す東西棟である。ただＡ・Ｂ－４区で見られる石列状遺構とそれに伴う建物址（１棟）は、その方位が大きく異なり、建物址群内でも先行するものと考えられる。この石列状遺構の南溝からは、大量の土器と共に円面硯も出土している。Ⅱ期になると、調査区の南東部を中心として７棟の建物が設けられる。すべては東西棟であり、その方位は磁北方向を取る。建物址の内、ＳＢ－８は比較的大型の方形掘方を持つ総柱建物址であり、その内部には根固石を据付けたものも見られるが、その南梁間は市教育委員会の調査時に確認されていた。ただ東西方向を予定していたと思われるＳＢ－13は、西半分の掘方のみを掘削した時点で建設を中断している。

Ⅲ期には、東側に庇を伴う２棟の建物址（ＳＢ－34・４）を初めとして９棟の南北棟建物址が、かなり整然とした配置基準に沿って建てられており、一連の建物址群としてのまとまりを示している。さらに総柱建物址が多くなる事も特徴的である。この内、ＳＢ－14・20の掘方は一辺約60㎝前後の方形であり、他の建物址との異質性を示している。ＳＢ－20の南梁間とＳＢ－30の西桁行は市教育委員会の調査区となる。ＳＢ－23と34、ＳＢ－26と35はほぼ同規模であり、その配置に一段と強い規則正しさを読み取る事ができる。最終段階であるⅣ期には建物数が11棟と多くなり、その占地範囲も調査区のほぼ全域となる。東西棟であるＳＢ－29が配置の中心と思われる。東にあるＳＢ－24・27は同規模の建物址であり、２棟が溝によって区画されている事から、倉庫等の性格を持つものかとも思われる。

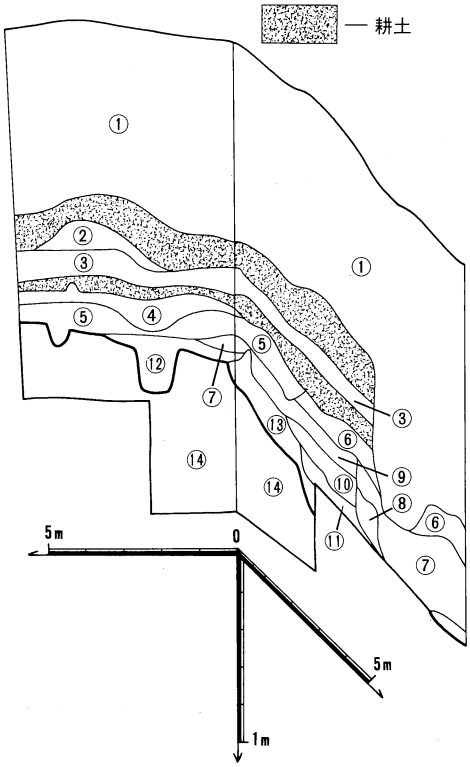
掘立柱建物址以外には、Ａ－２区で奈良時代前半に属する土壙が１基確認できたのみで、その他には顕著な遺構は確認できなかった。地形の状態に合わせ、遺構は南西に粗く東に密となり、さらに広がる傾向を見せている。

明確な平安時代・中世の遺構は少なく、Ｄ－２区とＣ－３区で11～12世紀頃の火葬墓と思われる遺構を２基確認できた。掘立柱建物址はＤ－３区とＡ・Ｂ－３・４区で若干を検出した。この時期当地域は水田等生産域として利用されている場合が多く、火葬墓などの存在か

ら集落の周辺部にあたっていたことが分かる。

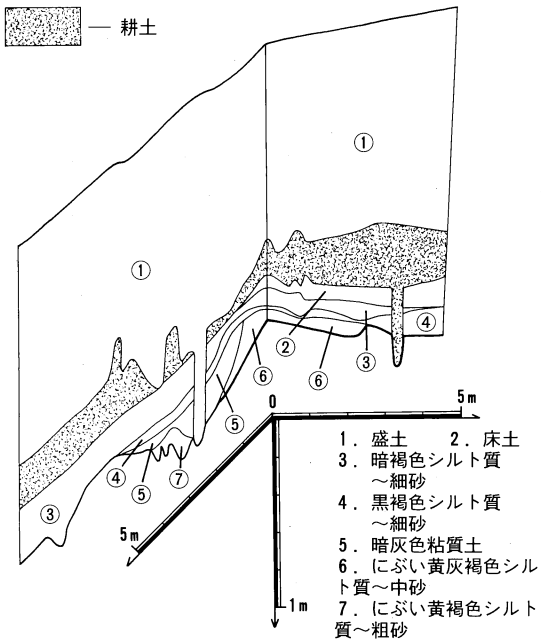
新校舎部分の調査と平行して、東側の浄化槽と南側のポンプ室（Ⅲ地区）建設予定地区も調査を行った。浄化槽地区では西側の校舎地区東側で見られたような灰黄色のしっかりとした遺構面はなく、暗青灰色のシルト質の土層の下が厚い水性堆積の砂層となっており、調査地区が旧河道内である事が判明した。また、ポンプ室地区（Ⅲ地区）も同様の旧河道内の土層堆積を示しており、出土土器もごくわずかであった。この2箇所の調査によって、本遺跡の東西の範囲がほぼ原小学校の敷地内にある事が明らかとなった。

以上が各時代毎の遺構の概要であるが、このうち注目したいのは、以前出土している土馬・円面硯・墨書土器等と時期を同じくする飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物址群である。建物の規模・その棟数さらに上記した遺物等からみても、決して一般的集落遺跡ではない。

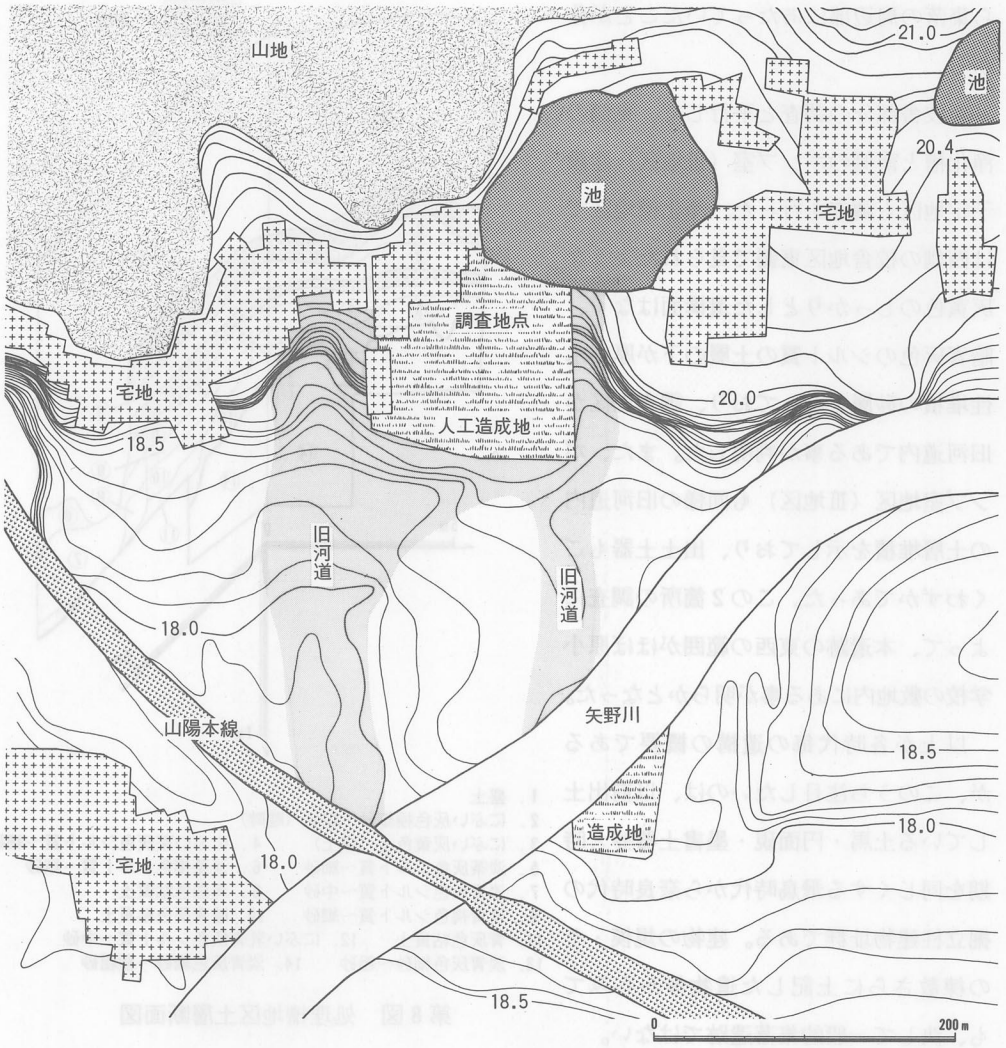


1．盛土
2．にぶい灰色極細砂～粗砂（畦畔）
3．にぶい灰黄色土（床土）　4．にぶい茶灰色シルト質～細砂
5．淡茶灰色シルト質～細砂　6．淡茶褐色シルト質～細砂
7．淡青灰色シルト質～中砂　8．青白色粘質土
9．淡青褐色シルト質～細砂　10．暗青灰色粘質土
11．青灰色粘質土　12．にぶい乳青灰色シルト質～中砂
13．淡青灰色細砂～粗砂　14．淡青灰色細砂～極粗砂

第8図　処理槽地区土層断面図



第9図　ポンプ場地区土層断面図



第10図　遺跡周辺等高線図

遺跡周辺の等高線図からも、同小学校のグラウンドの南側三分の二近くが旧河道内であり、その両側にも南北に走る埋没谷が在る事が分かる。調査においても、処理層地区・ポンプ場地区には遺構面はなく旧河道内にあたっているため、等高線図の状況がほぼ一致している。よって本遺跡の範囲は比較的狭く、奥山・木虎谷両古墳群の所在する尾根筋から張り出した狭い扇状地上に立地している事となる。ただ調査区の西端（A・B区）は谷内にもかかわらず、7世紀の後半には石列遺構が構築されているため、扇状地の範囲を越えて遺跡が西側に広がっていた可能性はある。これは西側の谷が小さく、この時期にはほぼ埋没していた事の傍証でもある。

遺跡の東西に入り込んだ谷部から流れ出た旧河道は、そのまま南流して現矢野川に流れ込んでいる。この両旧河道を東西に繋いでいるのが、前記したグラウンド南側の旧河道である。この三河道と現矢野川に挟まれた微高地上に、「有年原・田中墳丘墓遺跡」が所在している。墳丘墓下層の竪穴住居址、旧河道内出土土器等からみて、本遺跡周囲の基本地形は弥生時代後期には形成されていたものと思われる。

調 査 結 果

第Ⅲ章　遺　　構

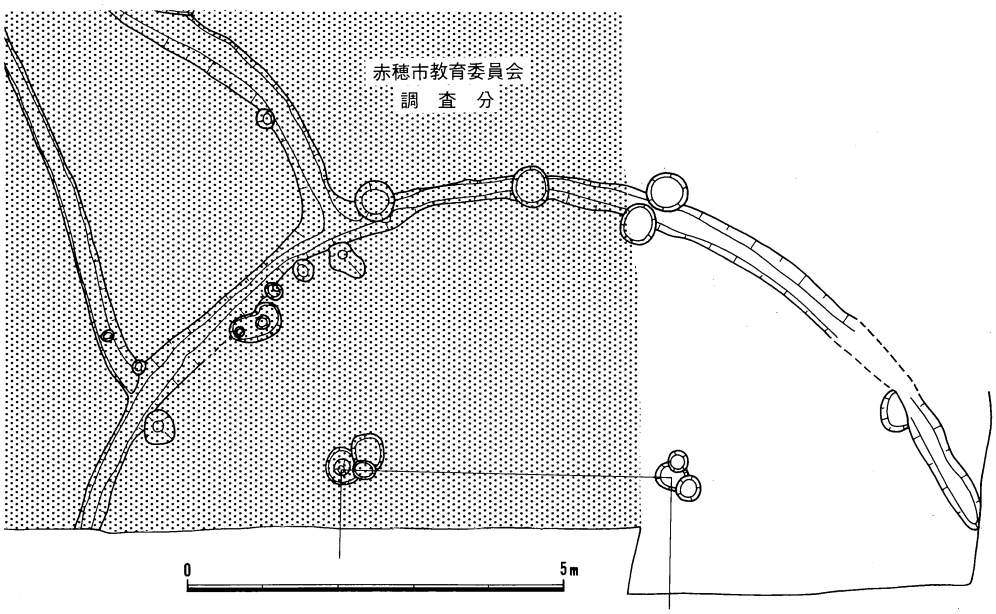
遺跡の概要で述べたように、今回の発掘調査においては弥生時代から中世に至る各時代の遺構が確認された。よって、ここでは各時代毎の各遺構に関して説明・記述する。

1．弥生時代の遺構

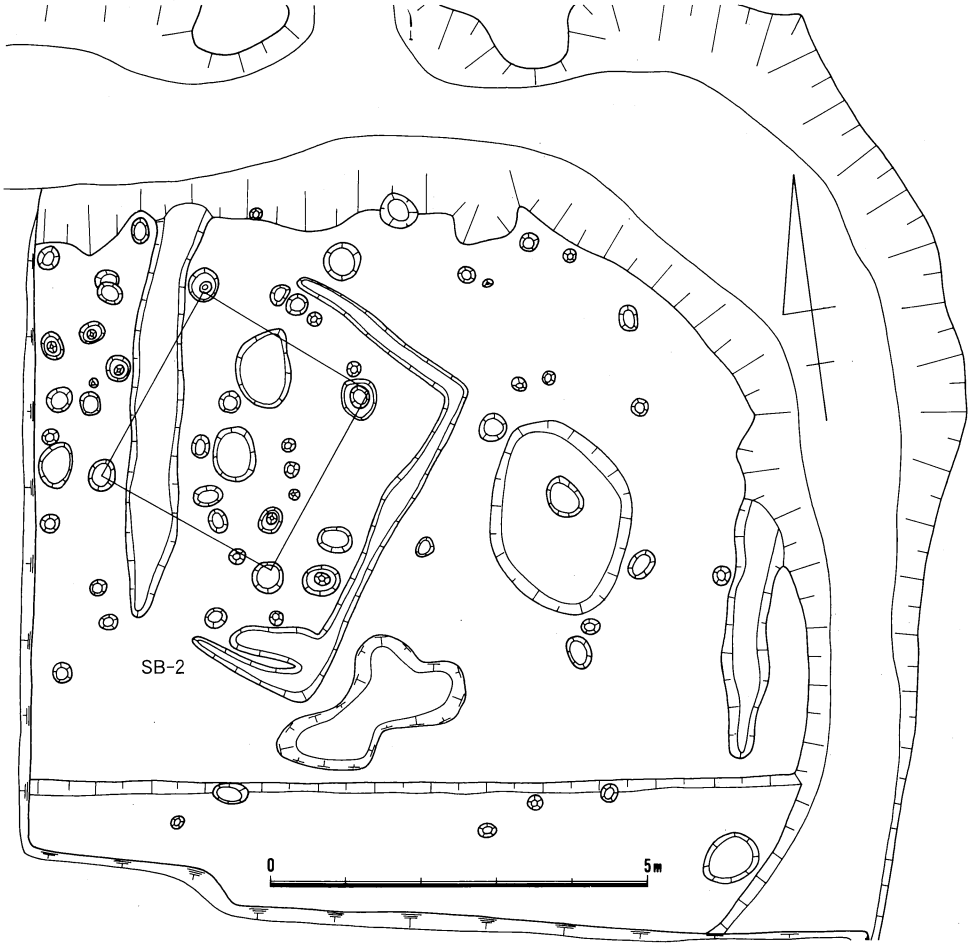
A．竪穴住居址

SB－1

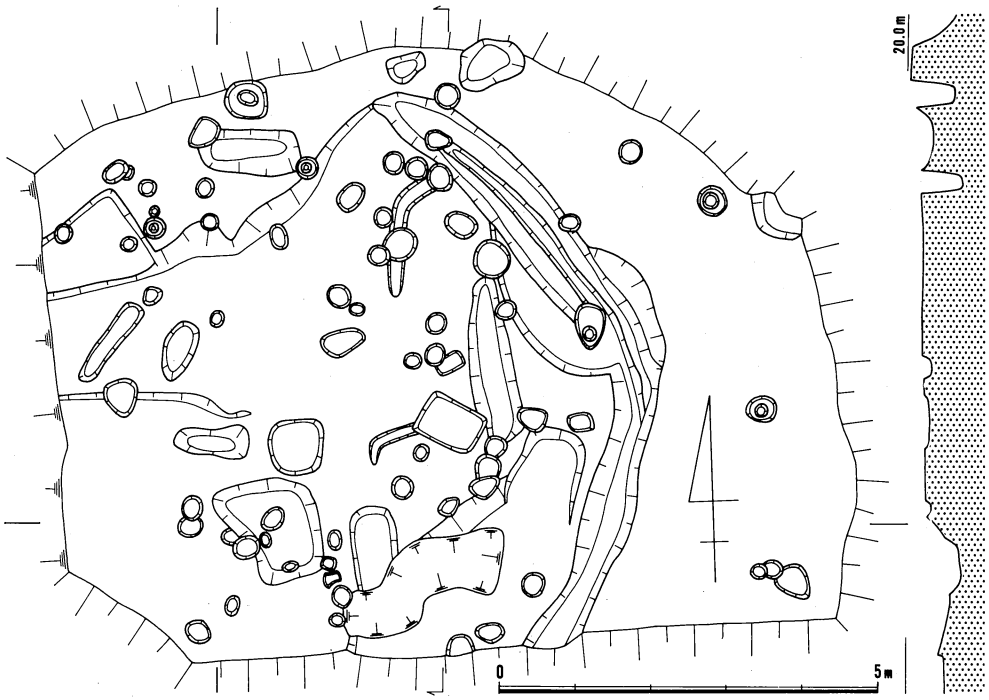
D－4・5区にあり南半分は調査区外に伸びているが、市教育委員会の調査した西側部分を復元すると、径約12m前後の円形竪穴住居址になると思われる。壁部はなく、幅約40cm・深さ約30cmの壁溝のみである。市教育委員会の調査結果をみると、2本の排水溝が北西に向かって伸び、途中で1本となっている。溝内からは、弥生時代中期の土器小片がごく少量出土している。壁溝の東端が調査区際で終結しており、この部分に出入り口等があったものかと思われる。



第11図　竪穴住居址（SB－1）遺構図



第12図　B－１区弥生時代後期遺構図



第13図　B－１区最終遺構図

ＳＢ－２

Ｂ－１区の、調査区内高所に位置している。幅約20cm、深さ約10cm、全長約9.5ｍを計る。西に向かって「コ」の字形に屈曲しており、方形竪穴住居址の壁溝と思われる。溝内および竪穴住居址内部にあたる遺構面上で弥生時代後期の土器が少量出土している。

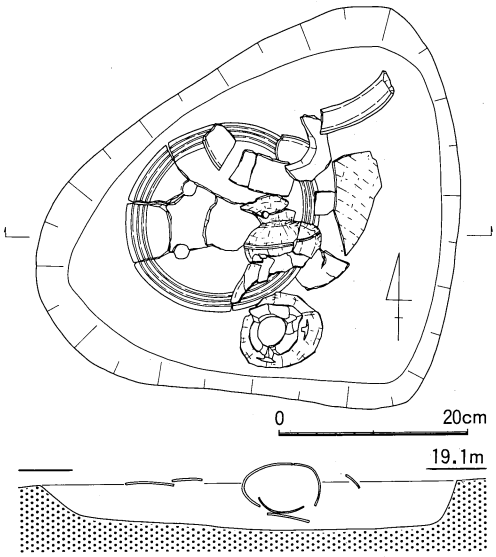
Ｂ．土壙

土壙－１

長径1.5ｍ、短径１ｍの楕円形平面を呈する底部は浅い船底状を成し、内部には高杯・甕・鉢等の弥生時代後期の土器を少量包含している。微高地が西に落ちる肩口にある。

土壙－２

平面形は長軸約45cm、短軸約40cmの三角形状を呈する。深さは約５cmで、底部は浅い船底形を成す。壙内には弥生時代後期に属する高杯・器台・台付き壺等が一括で包含されている。周囲には同時代の遺構はほとんど無く、10ｍ程南に弥生時代中期の竪穴住居址（ＳＢ－１）がある。



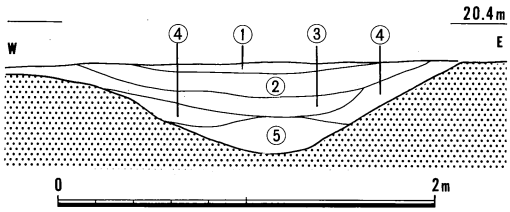
第14図　土壙－２内土器出土状況

２．古墳時代の遺構

Ａ．溝

溝－１

調査区北西の、調査区内で最高所に位置する。幅約1.2～3.3ｍ、深さ約30～70cmを計り、推定約14～16ｍの環状に巡るものと思われる。溝内より６世紀代の須恵器・埴輪片等が出土しているため円墳の周溝かと思われる。ただ埋土の上層では、飛鳥・藤原時代の土器片も出土しているため、この時期までは溝状に残っていたようである。



１．にぶい灰褐色シルト質～細砂　２．にぶい茶灰色シルト質～細砂　３．暗灰褐色シルト質～細砂　４．暗灰褐色シルト質～細砂＋地山土　５．暗灰褐色シルト質～中砂＋地山土

第15図　溝－１断面図

3．飛鳥期後半から奈良時代前半の遺構

A．掘立柱建物址

掘立柱建物址（ＳＢ－３）

梁間２間の南北棟である。桁行は１間分を検出しているが北側が調査区の外へ出てしまう。柱の掘方は径約40cm前後の不定円形であり、梁間柱の心々間距離は約2.2ｍ、桁行は約2.0ｍである。桁行の柱列はほぼ真北方向を示す。

掘立柱建物址（ＳＢ－４）

梁間は２間、桁行は１間分を検出するが、北側が調査区外へ出てしまう。ＳＢ－３と重複する南北棟であるが、掘方の切り合い関係は見られない。掘方は径約30cm前後の円形であり、心々間は1.9ｍを計る。真北方向をとる。

掘立柱建物址（ＳＢ－５）

梁間は２間、桁行は２間分を確認するが、北の梁間は調査区の外となる南北棟である。梁間の心々間距離は２個の柱穴が消失しているため実長は不明であるが、約2.0ｍ前後と思われる。桁行は2.5ｍと2.2ｍが見られる。北が真北より東へ振る。

掘立柱建物址（ＳＢ－６）

梁間２間、桁行は２間を確認するが北梁側は調査区外となる。円形の掘方であり、心々間の距離は約1.9ｍである。南梁柱列の２柱穴を欠如する。ほぼ真北を向く南北棟建物である。

掘立柱建物址（ＳＢ－７）

梁間２間、桁行３間の南北棟である。かなりの傾斜地に立地しており、心々間の距離にはばらつきが見られる。ＳＢ－６と桁行柱筋が通っており、真北方向を取る。

掘立柱建物址（ＳＢ－８）

桁行４間の南北棟である。梁間は１間分を確認するが、西桁行柱列は調査区外となる。心々間の距離は1.6ｍから2.0ｍを計る。掘方は円形である。真北より若干北が東を向く。

掘立柱建物址（ＳＢ－９）

梁間２間、桁行５間の南北棟であり、北梁側と東桁側の二方に庇が取り付いている。北梁柱列の柱穴が未確認のため桁行が６間かとも思われるが、最北端の柱間の距離が約1.0ｍで他の柱間距離の約半分であるため、庇として考えた。梁間の心々間は約1.8ｍ、桁行は約1.5ｍである。掘方は円形に近い方形を呈する。ほぼ真北方向を取る。ＳＢ－８・10と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－10）

梁間２間、桁行６間の南北棟である。西側柱列の多くが土壙－７等で消失している。梁間の心々間距離は約2.2ｍと思われる。桁行心々間は約1.5ｍ前後である。東桁行柱列の東側に雨落溝と思われる溝を伴う。方位は真北方向を示す。ＳＢ－９・11・12と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－11）

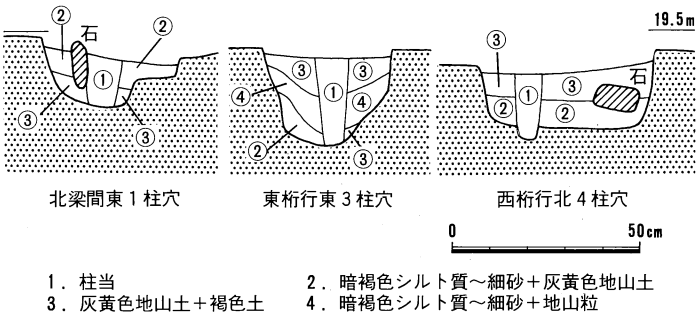
梁間２間、桁行４間の南北棟建物址である。掘方は径約40cm前後の円形であり、柱間は心々間で約2.5ｍから1.5ｍと不揃いである。方位は磁北方向を示し、ＳＢ－10・12と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－12）

梁間２間、桁行４間の南北棟建物址である。梁間柱列の柱穴の多くを欠損する。柱穴間距離は約2.0ｍ前後であり、北が真北より東を向く。ＳＢ－10･11と重複している。

掘立柱建物址（ＳＢ－14）

梁間２間、桁行３間の南北棟である。掘方は一辺約80cmの方形を意識しており、柱間の心々間距離は桁行が約2.0ｍ、梁間が約1.6ｍ前後である。東側に約1.6ｍ幅庇が付き、西側には雨落溝と思われる溝－４を伴う。ＳＢ－13と重複する。真北方向を示す。



第16図　掘立柱建物址（SB－14）柱穴断面図

掘立柱建物址（ＳＢ－15）

桁行は３間であり、東桁行が調査区外へ出るため梁間数は不明であるが、おそらく２間になるものと思われる。掘方は径約40～50cmあり、心々間約1.5ｍから約1.8ｍである。方位はほぼ磁北方向を示している。

掘立柱建物址（ＳＢ－16）

梁間は２間、桁行は２間分を確認しているが、桁行の北半分は調査区外となる。掘方は径約60cm前後の円形であり、ＳＢ－17と重複する。石垣の段上に位置するが、方位は磁北であり石垣の方向と大きく異なる。

掘立柱建物址（ＳＢ－17）

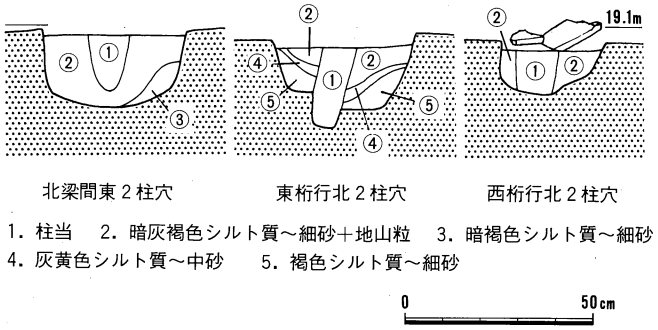
梁間は２間、桁行は２間分を確認する。方位が石垣の方位と一致しており、建物址の北西側は調査区外へ出てしまう。梁間心々間距離は約1.8ｍ、桁行は約1.0～1.5ｍである。南西側の桁行には幅約1.6ｍの庇が取り付いている。ＳＢ－16と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－18）

梁間は２間、桁行を現状で３間分確認する総柱の南北棟建物址であるが、北梁間柱列が調査区外へ出てしまう。側柱掘方は不揃いながら、一辺80cm前後の方形を意識している。掘方内には根固めの石を据えたものもあり、その心々間距離は梁間で約2.0ｍ、桁行で約1.5ｍを計る。方位は北が真北より東に傾く。東桁行柱列の東側に雨落溝と思われる溝－９を伴う。

掘立柱建物址（ＳＢ－19）

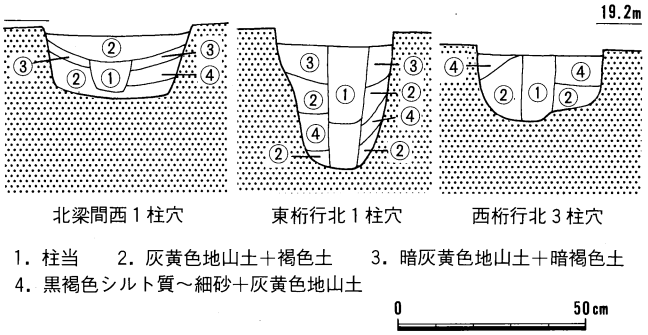
梁間３間、桁行５間の南北棟建物址である。掘方は一辺60cm前後の方形を意識している。半数近くの掘方内に根固めのための根石が据えられている。桁行の南側の２間分と南の梁間柱列は、市教育委員会の調査区内にはいる。心々間約1.5ｍを計る。東側に雨落溝の痕跡がみられ、方位は真北より北が若干東を向く。ＳＢ－20と重複する。根固め用の角礫が残存している。



第17図　掘立柱建物址（SB－19）柱穴断面図

掘立柱建物址（ＳＢ－20）

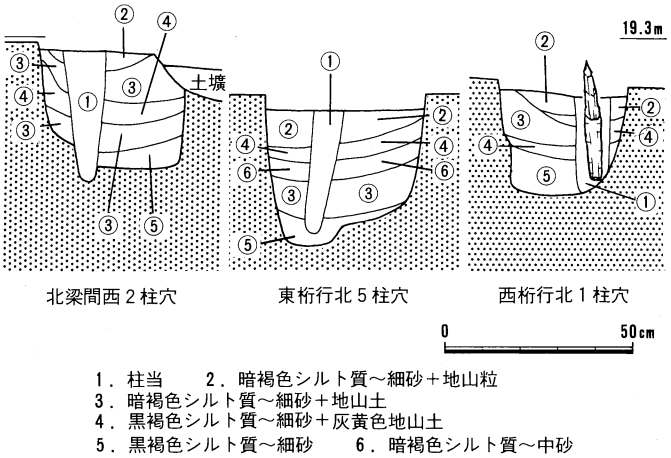
梁間２間、桁行５間の南北棟建物址であり、南梁間柱列は赤穂市教育委員会調査区域に入る。掘方は不定形ながら方形を意識しており、一辺約70cm前後と思われる。心々間の距離は梁間で約1.9ｍ、桁行は約1.5ｍとなる。東桁行柱列の東側に雨落溝と思われる溝－６が平行する。ＳＢ－19と重複し、真北方向を取る。



第18図　掘立柱建物址（SB－20）柱穴断面図

掘立柱建物址（ＳＢ－21）

梁間３間、桁行５間の南北棟建物址である。掘方は大型で、方形を意識している。梁間の心々間距離は1.5ｍ前後、桁行は1.5～



第19図　掘立柱建物址（SB－21）柱穴断面図

2.0ｍである。西桁行柱列側に雨落溝と思われる溝－５を伴う。ＳＢ－22と重なり、磁北方向を示す。掘方内埋土は良く互層となっており、一部には柱痕の残存するものもある。

掘立柱建物址（ＳＢ－22）

梁間２間、桁行４間の南北棟建物址である。梁間心々間距離は約1.8ｍ、桁行は約2.0ｍを計る。北が真北より東に振れている。ＳＢ－21と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－23）

梁間２間、桁行３間の総柱南北棟である。掘方は円形で、径約30cm～50cmを計る。北東隅の掘方が調査区側溝内となり消失する。柱間心々間の距離は梁間で約1.9ｍ、桁行で約2.4ｍと異なる。ほぼ真北方向を取り、ＳＢ－24・25と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－24）

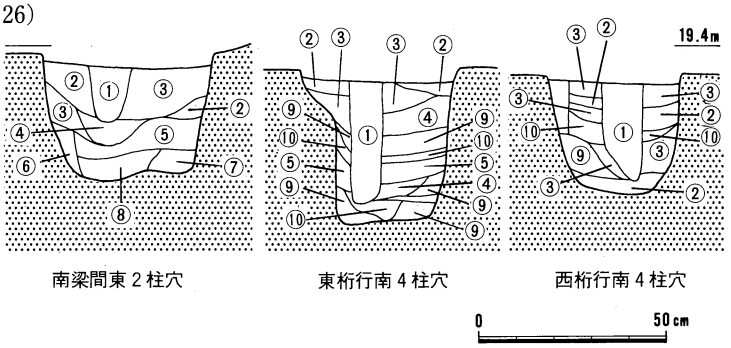
梁間２間、桁行３間の南北棟である。心々間の距離は梁間で約2.0ｍ強、桁行で約2.5ｍを見る。北が真北より東に傾いており、ＳＢ－23・25と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－25）

梁間は２間、桁行は北梁間行が調査区外のため、現状で４間を数える南北棟建物址である。西桁行柱列の西側に幅約1.0ｍの庇が付く。心々間の距離は約1.8ｍであるが、両桁行の南１間分のみが約1.5ｍとなる。掘方は径約40cm前後の円形である。ＳＢ－23・24・26と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－26）

梁間は２間、桁行は現状で３間を見る南北棟建物址である。北梁間柱列は調査区外となる。掘方は一辺約50cm前後の方形であり、心々間の距離は梁間で約1.8ｍ、桁行で約1.5ｍとなる。方位はほぼ真北方向を取り、ＳＢ－25・27と重複する。掘方内埋土は著しく互層状態であり、丁寧に埋め戻されている。



第20図　掘立柱建物址（SB－26）柱穴断面図

掘立柱建物址（ＳＢ－27）

建物址の北と東側が調査区の外となっているため、現状では南梁間１間分、西桁行４間分を確認している。梁間の心々間距離は約2.5ｍ、桁行で約2.0ｍを計る。方位は北が東に振っており、ＳＢ－26と重複している。

掘立柱建物址（ＳＢ－28）

梁間２間の南北棟建物址であるが、桁行は東西共１間分であり、南は調査区外となる。梁間の柱間距離は1.5～1.8ｍであるが、桁行は明確でない。他の建物址との重複関係はなく、反磁北方向を取る。市教育委員会調査分である。

掘立柱建物址（ＳＢ－29）

梁間1.8ｍの２間、桁行2.0ｍ強の３間を計る、本遺跡中唯一の東西棟建物址である。掘方は小型ながら方形を意識している。反磁北方向に直交する方向を取る。市教育委員会調査分。

掘立柱建物址（ＳＢ－30）

梁間は２間、桁行は南梁間が調査区の外へ出てしまうため、現状で３間を見る南北棟総柱建物址である。梁間柱間の心々間距離は約1.6ｍ、桁行は北側１間分約1.2ｍで以南は2.0ｍとなっている。方位はほぼ真北を示しており、ＳＢ－31と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－31）

梁間２間、桁行は現状で２間分をみる南北棟建物址であるが、南側は調査区外に伸びる。掘方は径約50㎝前後の円形であり、心々間の距離は約2.0ｍである。西桁行柱列は赤穂市教育委員会調査区域となる。方位は磁北方向を取り、ＳＢ－30・32さらに弥生時代中期の竪穴住居址（ＳＢ－１）と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－32）

建物址の南側と東側が調査区外となり、梁間・桁行ともに１間ずつしか検出していないが、総柱建物址になるものと思われる。掘方は径約30㎝前後の円形であり、心々間の距離は約1.8ｍである。方位は北が東に振っており、ＳＢ－31・33と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－33）

梁間２間、桁行は現状で３間分の南北棟建物址である。梁間の柱心々間距離は約1.8ｍ、桁行は北側１間分が約1.5ｍで以南は約2.0ｍとなる。磁北方向を示し、ＳＢ－32・34と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－34）

梁間２間、桁行は２間分を確認するが、南梁間柱列が調査区外となる南北棟総柱建物址である。心々間の距離は約2.0ｍ前後であり、方位はほぼ真北方向を指す。ＳＢ－33と重複する。

掘立柱建物址（ＳＢ－35）

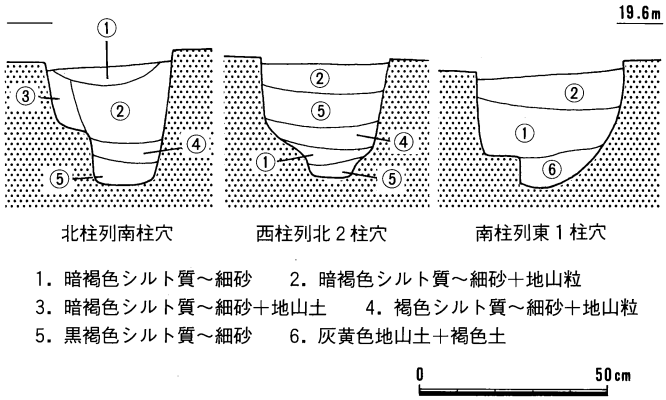
梁間は２間。南梁間柱列が調査区の外となるため、桁行は現状で２間分を確認する南北棟総柱建物址である。心々間の距離は約1.5ｍを計り、方位は真北方向を示す。

表3　掘立柱建物址規模一覧

SB－No.	梁間			桁行			方位	備考
	間数	長さ(cm)	尺数	間数	長さ(cm)	尺数		
Ⅰ期掘立柱建物址								
SB－17	2	70	12	1＋	300＋	—	南北棟	
SB－18	2	430	14	1＋	260＋	—	〃	
SB－32	2	420	14	3	640	21	〃	
SB－35	2	420	14	3＋	620	20	〃	
SB－38	3	520	17	2＋	380＋	—	〃	総柱建物址
Ⅱ期掘立柱建物址								
SB－3	2	390	14	4	790	28	南北棟	
SB－5	2	390	14	2＋	—	—	東西棟	建設途中で放棄
SB－19	1＋	280＋	—	3	550	20	南北棟	
SB－6	3	500	18	5	840	30	〃	
SB－12	2＋1	530	19	4＋	770	—	〃	西面に庇
SB－21	2	420	15	2＋	460	—	〃	
SB－43	2	420	15	3＋	740	—	〃	
SB－39	2	390	14	2＋	370	—	〃	
Ⅲ期掘立柱建物址								
SB－30	2	450	15	1＋	270＋	—	南北棟	
SB－34	3＋1	600	20	5＋1	960	32	〃	北面と東面に庇
SB－4	2＋1	540	18	3	660	22	〃	東面に庇
SB－7	2	420	14	5	750	25	〃	束柱を持つ
SB－11	2	390	13	3	660	22	〃	総柱建物址
SB－13	2	390	13	3＋	470＋	—	〃	
SB－44	2	390	13	3＋	570＋	—	〃	〃
SB－15	2	390	13	2＋	520＋	—	〃	〃
SB－42	2	390	13	3＋	550＋	—	〃	総柱建物址
Ⅳ期掘立柱建物址								
SB－31	2	410	14	2＋	610＋	—	南北棟	
SB－33	1＋	260＋	—	4	740	25	〃	
SB－36	2	390	13	4	770	26	〃	
SB－9	2	460	16	2＋	460＋	—	南北棟	総柱建物址
SB－8	3	420	14	5	780	26	南北棟	
SB－47	2	380	13	4	800	27	〃	
SB－40	2	430	15	3	690	24	〃	
SB－41	1＋	280＋	—	4	720	25	〃	
SB－45	2	340	15	4	860	30	東西棟	
SB－46	2	340	15	1＋	280＋	—	南北棟	
SB－16	1＋	220＋	—	1＋	260＋	—	不明	総柱建物址

B．建物址にならない柱列（ＳＢ－13）

掘方は方形を意識したかなりの大型である。東西棟の建物の建築を予定したようであり、北桁行は２間分、南は１間分を、２間の梁間は西側のみである。当初東側梁間列を未検出と思っていたが、柱穴を立ち割った結果、柱当たりの痕跡がいずれの柱穴からも確認できなかったため、建築を途中で放棄した建物址と考える。ＳＢ－４・36と重複する。

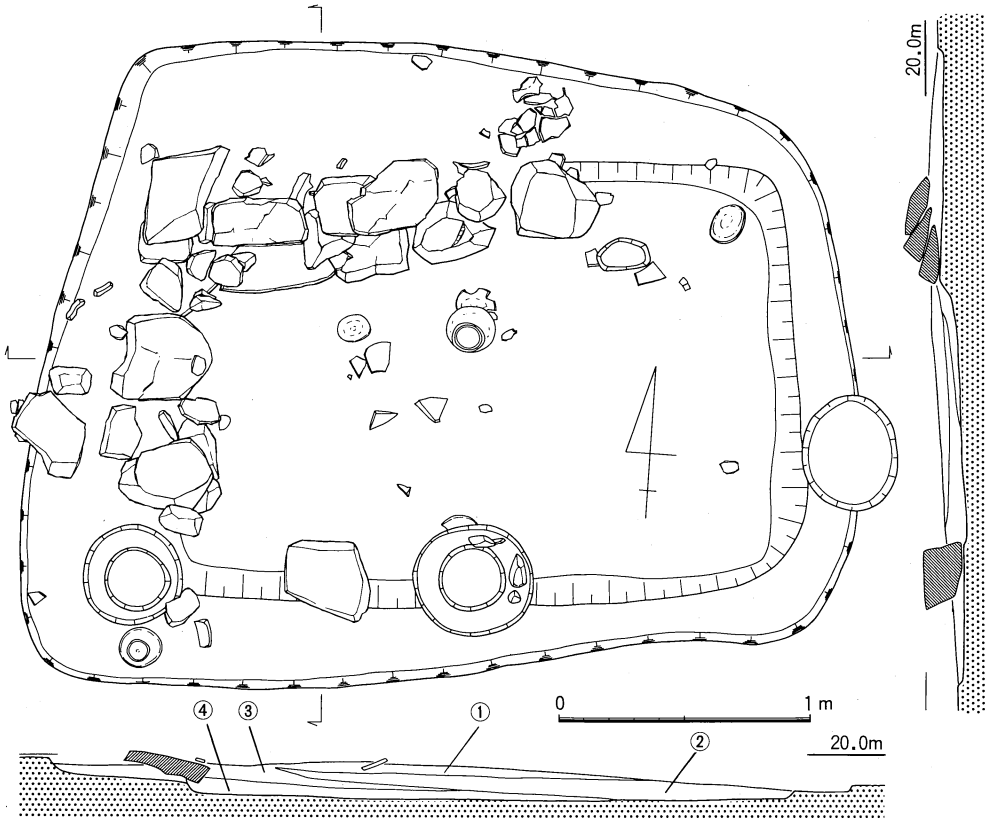


第21図　建物址にならない柱列（SB－13）断面図

C．土壙

土壙－３

調査区の中央北側にあり、溝－２と重複する。内部に石室状の構造を持った土壙であったと思われる。扁平な河原石が面を揃えて、現状で二段まで積まれている。平面形は東西方向



1．暗灰褐色シルト質～中砂　2．にぶい灰褐色シルト質～中砂(炭を微量含む)
3．にぶい茶褐色シルト質～中砂(炭を微量含む)　4．暗灰褐色シルト質～中砂

第22図　土壙－３遺構図

の長方形を呈していたものと思われるが、西辺と北辺の一部しか残存していない。内部には奈良時代前半の土器が包含されている。

土壙－4

掘立柱建物址（ＳＢ－11・20）の間にあり、南北方向に長く、長軸約1.2ｍ、短軸約0.6ｍの楕円形平面を呈する。深さは約40cmと深く、底部は丸みを持つ。内部からは奈良時代前半の土器が多く出土している。

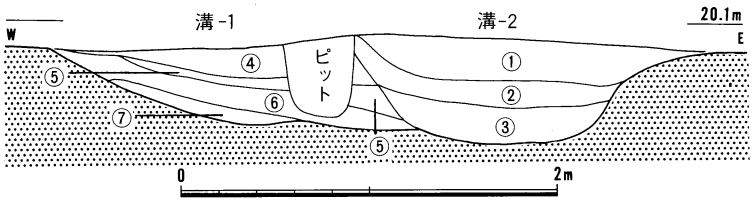
土壙－6

ＳＢ－18とＳＢ－19の間にあり、長軸で約1.7ｍ、短軸で約1.0ｍの平面楕円形をなす。深さは約40cmと深く、船底形を呈する。埋土に炭・灰等が含まれているため、壙内から出土する奈良時代前半の土器はこの土壙内に投棄されたものと思われる。

Ｄ．溝

溝－2

調査区北の山間部から発する溝であり、ＳＢ－17の西を通って東西溝と切り合い、土壙－3・ＳＢ－1と重複して調査区外に流れる東西方向の溝である。本来は2本の溝であり、土壙－3の北で合流し、その後は1本のままとなる。幅1.0～1.5ｍで、断面はゆるやかな「U」字形を呈する。深さ15～30cm。内部に土器を大量に包含する。



1．暗茶褐色シルト質～細砂　2．にぶい茶灰色シルト質～中砂
3．にぶい明茶灰色シルト質～細砂　4．暗灰褐色シルト質～極細砂
5．暗灰褐色シルト質～細砂　6．黒褐色シルト質土
7．暗灰褐色シルト質～細砂＋地山粒

第23図　溝－1・溝－2断面図

溝－3

ＳＢ－3東側に東西に伸び、溝－4に切られる。幅100～60cm、深さ10～20cm。全長がＳＢ－3よりも若干長いが、同建物址の雨落溝と思われる。

溝－4

溝－3を切る状態にある。幅約50～70cm、深さ約20～30cmを計る。ＳＢ－14の1間分西側にあり、長さも桁行長とほぼ等しい事から同建物址の雨落溝と思われる。

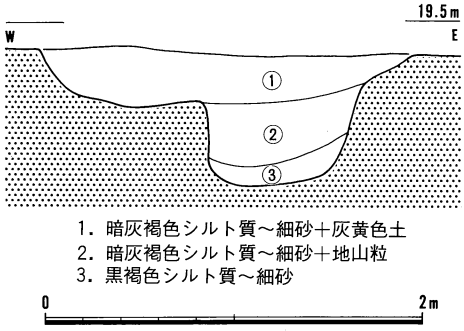
溝－5

溝－3の南に位置し、ＳＢ－20の柱穴に切られている。幅は約70cm前後であり、深さは西側が約20cm、東側が約40cmと深くなり、二段堀状になっている。ＳＢ－21の西桁行柱列の半

間西にあり、長さも桁行長とほぼ同じことから同建物址の雨落溝と思われる。

溝－6

ＳＢ－21の柱穴を切る状態にあり、幅約40cm前後、深さ約10cm前後をみる。ＳＢ－20の東桁行柱列の東１間分の所にあり、長さ・方位とも柱列と一致するため、同建物址の雨落溝と思われる。



第24図　溝－５断面図

溝－7

調査区の東南にあたるＦ区にあり、東西方向に走る幅約40～60cm、深さ約5cm程度の浅い溝である。現長は9.6ｍあり、東側は調査区外へ続いている。ＳＢ－25の柱穴を切る。

溝－8

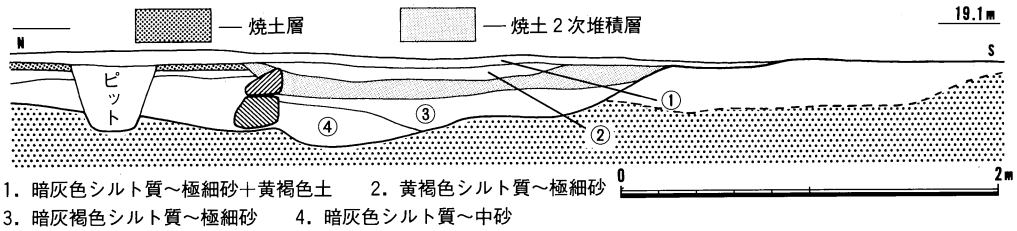
溝－７の南にあり、幅約40～60cm、深さ約５cm前後、現長約11ｍと溝７と同程度の規模を持つ。東端はさらに調査区の外に伸びていく。溝－７と共に占地を区画する溝と思われる。反磁北方向を指しているため、これと同方向を示す建物址群と同一時期と思われる。

溝－9

掘立柱建物址（ＳＢ－18）の東側にあり、幅約30cm、長さ約7.5ｍを計る。ＳＢ－18の東桁行から約1.3ｍ離れ、方向がＳＢ－18と一致しているため、同建物址の雨落溝と思われる。この溝－９の北端から推測して、ＳＢ－18の桁行柱間は４間かと思われる。

Ｅ．石列遺構

調査区の西南端で検出された、盛土によって谷部を埋める基壇状の整地部分とその南面に施された石列、石列を北肩とする溝（石列南溝）より成る遺構である。整地部分は検出できた範囲で南北８ｍ・東西10ｍ・約50㎡。更に調査区外の西南・北側へ広がっている。石列および溝はＮ54°Ｅに走行をもつ。石列は幅約30cm～80cmの自然石を１・２段横積みにしており、割り石面か節理による平滑面を溝側に向けている。崩壊したと思われる石が南溝内に多数転がり込んでおり、本来は２段以上積まれていた可能性がある。石列南溝の幅は約2.1ｍ、



第25図　石列南溝断面図

南側の肩からの深さは約25cm、石列の高さを含む基壇側からの深さは約35cm、断面形状は浅い弓形である。石列および溝は現長で約12ｍ弱であるが、調査区の西側、体育館との間にグリッドを設定したところ、石列・溝は更に延伸していることが確認された。体育館建設の際の調査では石列・溝は確認されていないことから体育館東端部分で終結すると思われる。石列遺構が構築されている部分には北・東側で遺構面となる灰黄色の地山層は出現しておらず、A−B−３．４区の北及び西側のサブトレンチ・周辺の地形の観察からも石列遺構の周辺は南西方向に開く谷地形であったことが判明している。石列の背後（北側）には掘り方が無く、谷部分に溜まる弥生時代後半の堆積土を削り込み、石列を設けた後その内側（石列北側）に黄色の地山土を大量に投入し、整地を行ったと考えられる。整地土の中には灰黄色の地山粒・少量の炭・焼土とともに、６世紀中葉頃の須恵器が含まれている。基壇状遺構の北側にある溝-1を伴う古墳など周辺の古墳を破壊し、整地土とした可能性が高い。石列遺構は火災にあったと考えられ、石列南溝及び整地面上に、厚く炭・焼土を含んだ茶褐色土が堆積している。石列南溝の上層を占め、埋没させた茶褐色土中からは円面硯とともに７世紀前半代の多量の須恵器・土師器が出土している。円面硯（５）の破片は、整地面上の茶褐色土中からも出土している。整地面上の施設が焼失した後、火事面の清掃を行い、焼土・炭・土器を含む土を石列南溝へ放り込み埋没させたと考えられる。整地面上からは２棟の掘立柱建物址が検出されているが、石列遺構に伴う建物址は、方位を同じくするＳＢ−17である。ＳＢ−17の柱穴は茶褐色土下より切り込まれている。これに対して西側のＳＢ−16の柱穴掘り込み面は茶褐色土より上層にあり、火事後に建てられ、石列の方位とは無関係な方位・地割りをとっている。石列遺構の構築・存続時期は、石列南溝の下層・遺物と遺構を埋没させた茶褐色土内の遺物からみて、６世紀末から７世紀初頭に構築され、７世紀中葉には火事によって建物が倒壊、石列・石列南溝は埋没し、石列を伴う施設としての機能を失ったものと考えられる。

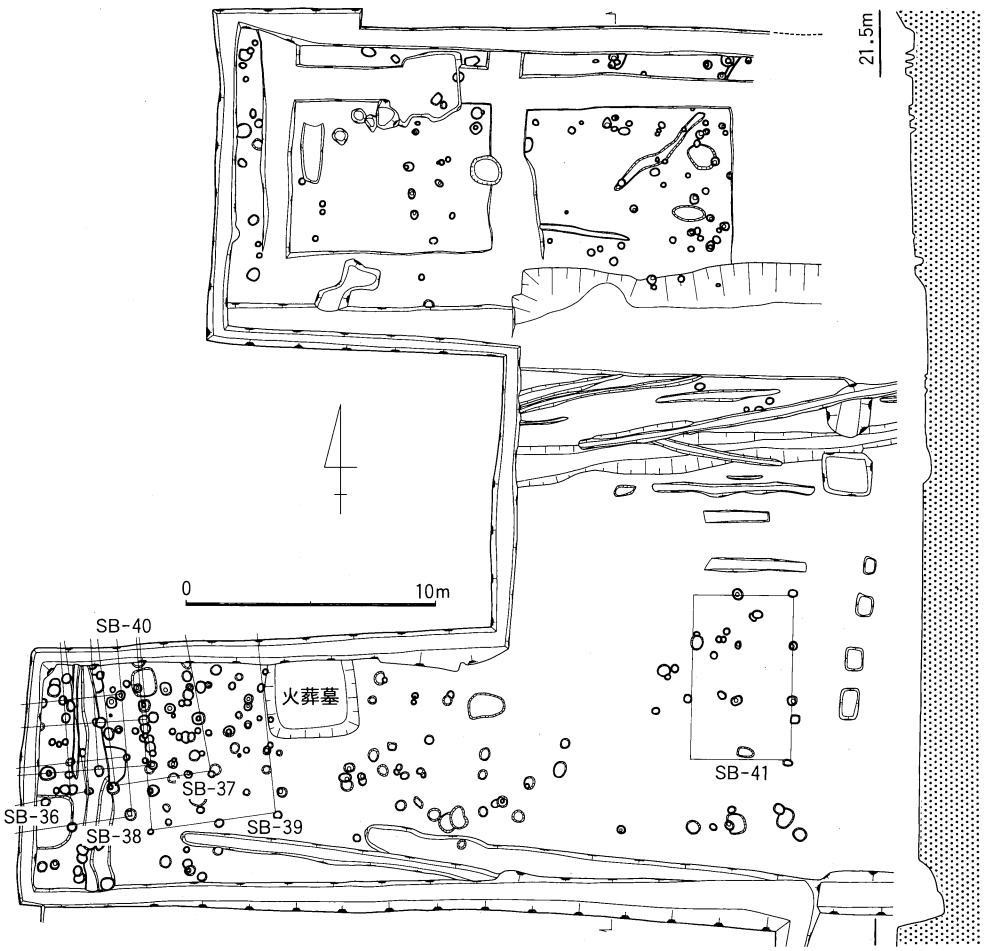
４．中世の遺構

調査区西南半を主に、希薄ではあるが全域で検出された。調査区の中央に東西に走る溝、その南には遺構の存在しない空白部がある。溝・空白部の北側・東南側・西南側には建物址・柱穴群が存在する。西南部では建物址５棟（ＳＢ−36〜40）と柱穴群、また西南端には南北方向に走る溝がある。柱穴は西南部に多いが、東南部・北半部でも検出され、１棟（ＳＢ−41）が復元できた。火葬墓と考えられる方形土壙２基は西南部の建物に近接して位置する。建物址の方位は中央部の１棟（ＳＢ−41）を除き、北より若干西に振っており、調査区北西部においても同様の方位を示す柵状のピットの並びがある。北西部を南北方向に走る溝の方位はこれに近く、中央を東西に走る溝は建物址・溝と直交に近い。２本の溝は建物や墓地・柵あるいは何もない作業空間を取り込んで巡る屋敷地の区画もしくは小区画を行う溝の可能性がある。遺構の時期は切り合うものの建物址の方位・遺物から鎌倉時代に収まるものと考えられる。

A．掘立柱建物址

調査区西南部の掘立柱建物址（ＳＢ－36～40）

ＳＢ－36は東西梁行１間・南北桁行２間を検出した。北側柱列と西側柱列が調査区外となるが、桁行方位をN15°Wに取る南北棟側柱建物址と考えられる。柱心々間は梁行で約2.0ｍ弱、桁行で約1.7ｍ。ＳＢ－38・40と重複する。ＳＢ－37は東西梁行２間・南北桁行２間を検出した。北側柱列が調査区外となるが、桁行方位をN16°Wに取る南北棟側柱建物址と考えられる。柱心々間は梁行、桁行とも約2.0ｍ。ＳＢ－36の南梁行と通りを同じくし、ＳＢ－38・39・40と重複する。ＳＢ－38は東西梁行１間・南北桁行２間を検出した。北側と西側の柱列が調査区外となるが、桁行方位をN11°Wに取る南北棟総柱建物址と考えられる。柱心々間は梁行、桁行とも約2.2ｍ。ＳＢ－36・37・40と重複する。ＳＢ－39は東西梁行２間・南北桁行２間を検出した。北梁行柱列が調査区外となり、桁行の規模は不明であるが、桁行方位をN12°Wに取る南北棟側柱建物址と考えられる。柱心々間は梁行、桁行とも約2.4ｍ。ＳＢ－37と重複し、ＳＢ－40と柱穴が切り合い先行する。建物址ＳＢ－40は東西梁行２間・南北桁行２間を検出した。北側と西側の柱列が調査区外となるが、桁行方位をN12°Wに取る南北棟総柱建物址と考えられる。柱心々間は梁行桁行とも約2.0ｍ。ＳＢ－39と柱穴が切



第26図　中世面遺構図

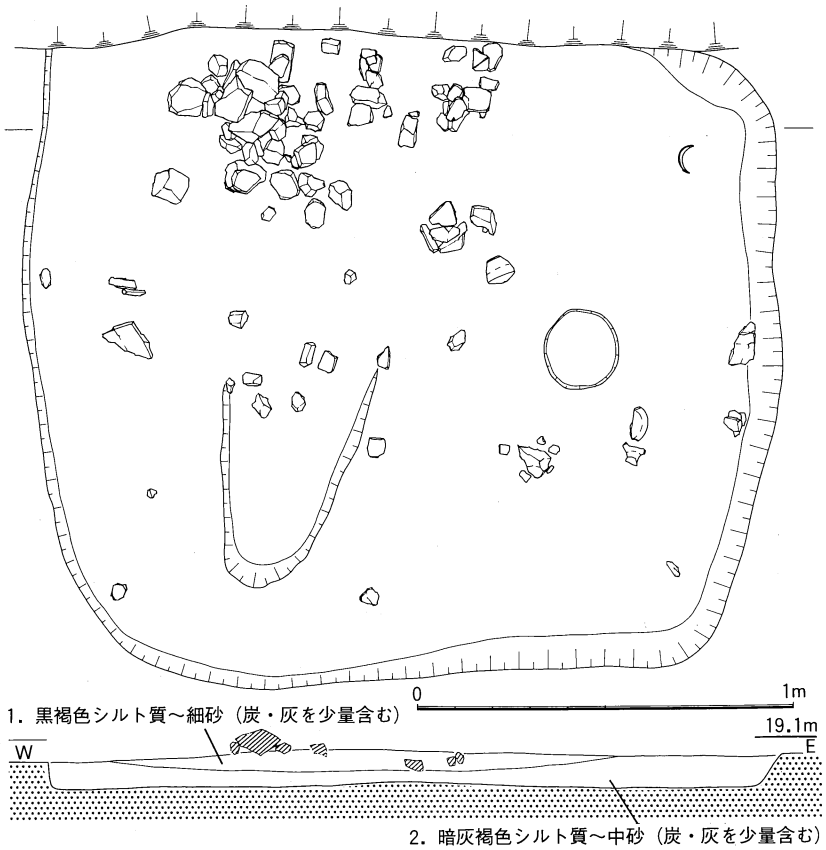
り合い、ＳＢ－36・37・38と重複する。

調査区中央南側の掘立柱建物址（ＳＢ－41）

東西梁行２間・南北桁行３間、桁行方位をほぼ磁北に取る南北棟側柱建物址。柱心々間は梁行約2.2ｍ、桁行約2.1ｍ。ＳＢ－36～40と位置する地点が異なり、扇状地上に立地する。

Ｂ．火葬墓

調査区西南半に位置する。一辺約10ｍの隅丸方形状の土壙と考えられるが、北辺を調査区側溝によって失っている。断面形状は浅い箱形。深さ約15cm。土壙内には、炭・灰・焼成を受けた骨片を含む土が上下２層に堆積している。土壙の北半を中心に径10～20cmの礫が散在しているが、土壙底に据えられたものはなく、上層の堆積土中に含まれるものである。遺物は鎌倉時代前半の須恵器小皿・椀片が土壙内に散在して検出されている。土壙は幾つかの柱穴によって切られており、西側の建物群よりも若干先行するであろう。遺構の性格は、炭・灰・焼成を受けた骨片を含む土が上下２層に堆積している点、土壙内の礫が小区画を持たず浮いて散在する点、遺物に完形品がなくまとまらず散在する点から火葬骨の埋置場所ではな



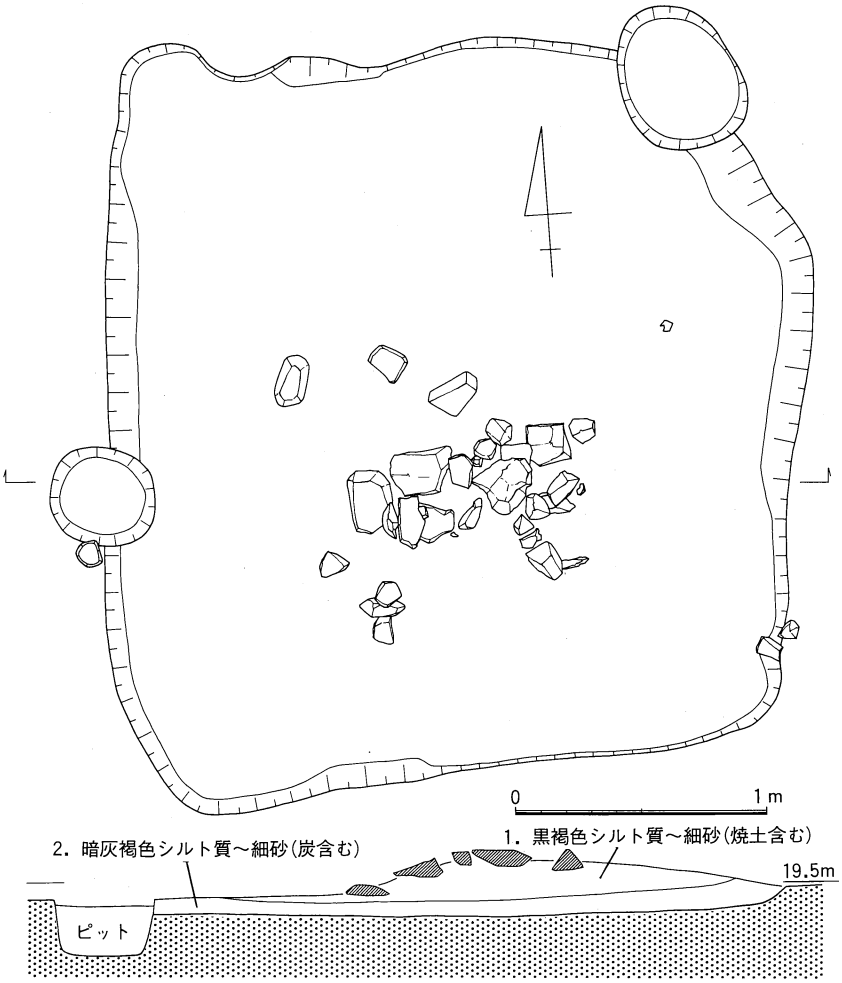
第27図　火葬墓遺構図

く火葬場の可能性が高い。但し土壙内で焼成が行われた痕跡は確認できず、火葬した骨灰や炭・土器をランダムに投入した土壙であった可能性もある。

C．土壙

土壙－7

長辺約4.5ｍ、短辺約2.2ｍと南北に長い台形平面をしている。深さは浅く約20cm前後であり、周囲の壁は緩やかに傾斜する。底はほぼ平らで、中央部付近に角礫が少量集中するが、多くは底部から若干浮いてしまう。遺物の出土は非常に少ないが、火葬墓の可能性が強い。



第28図　土壙－7遺構図

第Ⅳ章　遺　　物

1．各遺構出土の土器

A．溝－1出土の土器

古墳時代中葉（6世紀初頭）から奈良時代前半の土器が見られる。深さ50cm強の溝ではあるが、層位的な土器の出土状態は示していない。土器は飛鳥・藤原時代後半のものが中心であり、それに奈良時代のものが少量加わる。

a．古墳時代の土器

須恵器

杯H身（28.29）・高杯（30）・甕（31）が出土している。

杯H身はいずれも立ち上がりが高いが、(28) は若干内弯し、口縁端部が水平となり、口径も小さい。(29) は立ち上がりが内傾し、口縁端部も大きく内傾する。

高杯（30）は体部に一対の環状把手が付き、一条の波状文が巡る。口縁部は把手上部より大きく外反し、狭い平面をなす。短く、外反気味に開く脚部には、長方形の四方透を穿つ。

甕（31）は口縁が大きく外反して開き、外面には断面三角形の突帯が一条巡る。口縁端部は丸くおさまる。内面頚部・体部境を斜めに仕上げる。

土師質遺物

埴輪（9.10）はタガが高く、断面台形を呈する。（9）の体部は緩い「S」字型を呈し、(10) は内弯する傾向が見られる。

b．飛鳥・藤原時代の土器

須恵器

杯H蓋（15～17）・杯H身（18～20）・杯G身（21）・杯A身（22）・杯B蓋（23～25）・高杯（27）が出土している。

杯H蓋（15～17）は天井部が丸く、口縁部がわずかに外弯気味に垂下する。

杯H身（18.19）は立ち上がりが受部端部より高く、(18) の体部は逆三角形状となる。(20) は立ち上がり端部が受部端部とほぼ同じ高さとなる。両形態とも立ち上がりは折り返しており、受部外面に大きな屈曲を持つ。

杯G身（21）は杯H蓋を逆転させた形態であり、口縁部がわずかに外反しながら短く垂直に立ちあがる。口径が小さいため杯G身としたが、杯H蓋の可能性もある。

杯B蓋（23.24）は口縁部内面に口縁端部を折り返した返りを残すが、(24) は口縁端部が大きく反り上がっているために、返りが口縁端より垂下している。(24) は口径が大きく、

天井部も平坦気味かと思われる。

高杯（27）の脚部は外弯しながら大きく開き、端部は短く水平に広がるものと思われる。

土師器

椀（3）・無頸壷（4）・鉢（5．6）が出土している。

椀（3）は口縁部が少し外反して立ち上がり、端部を斜め外方に小さく摘み上げる。

無頸壷（4）は口縁部が大きく内傾し、口縁端部が内側に大きく肥厚する。

鉢（6）は体部が直線的に開き、バケツ型になるものと思われる。口縁端部を斜め外方に小さく摘み上げる。

c．奈良時代の土器

須恵器

杯B蓋（25）・杯B身（26）のみが出土している。

杯B蓋（25）は口縁部がB形態であり、端部が断面三角形状に短く垂下する。

杯B身（26）は高台が低く、体部の張り出しもわずかである。

土師器

杯A（2）鍋（5）・甕（7．8）が見られる。

杯A（2）は体部が「S」字状に屈曲しながら大きく立ち上がる。口縁端部は内側に大きく肥厚し、丸くおさまる。底体部境も丸味を持つ。

鍋（5）は口縁部が大きく開き、端部は短い垂直面となり上方にごく小さく摘み上げる。体部は大きく内弯し、器高はあまり高くなく、鉢状の形態となる。

甕（7）は大型で、長胴形態で、口縁部は「く」の字形に外反する。（8）は小型であり、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさまる。

B．溝－2出土の土器

飛鳥・藤原時代後半から奈良時代初頭にかけての土器が出土している。層位的関係は明確ではなく、両時期の土器が混在した状態で出土している。

a．飛鳥・藤原時代の土器

須恵器

杯H蓋（32.33）・杯H身（34.35）・杯G蓋（36.37）・杯G身（38.39）・杯B蓋（44）・杯B身（45）・鉢A（52）・鉢B（56）・高杯（54.55）・台付き壷（59）・広口壷（63）・甕（60）等多器種が出土している。

杯H蓋（32）は口縁部がわずかに外反する。（33）は内弯したまま丸くおさまる。

杯H身の立ち上がりが受部より高い（34）は体部にも丸味を残す。低い（35）は受部を折り返して立ち上がりとしており、受部外面に屈曲を持つ。体部も逆三角形となる。

杯G蓋の（36）は返りが垂下し、口縁端部より長い。天井部は比較的平坦である。（37）は返りが内傾し、口縁端部より内側となる。口縁端部が屈曲し、天井部は丸く高い。

杯G身（38）は杯H蓋を逆転させた形態であるが、器高が深く、口縁部の立ち上がりが高

い。(39) は体部が大きく外反しながら開き、体部に一条の沈線を巡らす。(43) は体部が直線的に大きく開き、口縁端部が小さく内傾して丸くおさまる。

杯B蓋 (44) は返りが口縁端部より短く、折り返しているために、口縁部外面に屈曲を持つ。天井部は低く、扁平な形態を取る。

杯B身 (45) 体部はあまり内弯せず、直線的に開く。高台は高く、外反気味に大きく踏張り、内面接地する。

鉢 (52) は底部が丸く、口縁部がわずかに外反しながら開き、端部は丸くおさまる。

高杯の杯部 (54) は大きく開き、端部が小さく外反する。(55) は脚柱部が外弯気味に開き、裾部は水平に広がった後、端部は大きく外弯して垂下する。

台付き壷 (59) の体部は球形になると思われる。高台は著しく長く、わずかに外弯しながら大きく踏張り、内面接地する。

広口壷 (63) は頸部が短く立ち上がった後、口縁部が大きく外反して開く。肩部はゆるやかながらかなり下方で大きく張る。

甕 (60) の口縁は内弯気味に大きく外反した後、端部が小さく内傾する。その先端はわずかに窪み、内向する。口縁部外面は二条の沈線によって三分割され、その上段と中段に二条と一条の波状文を施している。

土師器

杯A (11) ・片口鉢 (18) ・鉢 (20) ・鍋 (21.22) ・甕 (25.26) ・把手付き甕 (27) が出土している。

杯A (11) は杯Cに近い形態であり、底部から体部にかけて丸身を持つ。

片口鉢 (18) も底部から体部にかけて丸身を持ち、口縁部は内傾してしまう。口縁端部はわずかに窪むが水平面となり、内側に小さく肥厚させる。

鉢 (20) は口縁部が小さく内傾し、端部はわずかに外傾しておさまる。

鍋 (21.22) の体部上半は垂直に近く立ち上がり、口縁部が大きく外反する。端部は斜めに外傾し、先端を上下にわずかに肥厚させる。

甕 (25) は口縁部が大きく開き、端部が内側に小さく肥厚する。(26) は口縁部が外反気味に「く」の字に屈曲し、端部が上下に小さく肥厚する。

把手付き甕 (27) は口縁部が大きく外反し、端部は丸くおさまる。体部の最大径部分より若干上方に、断面円形の把手が一対付いていたものと思われる。

b. 奈良時代の土器

須恵器

杯A (40～42) ・杯B蓋 (46) ・杯B身 (47.50.51) ・皿B蓋 (48) ・皿B身 (49) ・鉢 (53) ・鉢B (56) 壷用蓋 (57) ・短頸壷 (58) ・甕 (61.62) が出土している。

杯Aの内 (40.42) は杯H蓋を逆転させたような、椀に近い形態をとる。(40) は底部から口縁部へと丸く連続し、口縁端部は丸くおさまる。(42) は底・体部に若干の境があり、口縁部がわずかに外反する。(41) は口縁部が外反しながら垂直に立つ。

杯B蓋 (46) は天井部が高く、口縁部にわずかに段を残す。端部は長く垂下する。

杯B身（47）の体部は直線的に大きく開き、口縁部はわずかに外反して丸くおさまる。高台は短いが、内面接地する。

皿B蓋（48）の天井部は丸味を持ち、口縁部には段の痕跡が残る。口縁端部は断面三角形となり、短く垂下する。摘みは中央部が窪む形態となる。

皿B身（49）は体部が内弯しながら大きく立ち上がり、口縁部はわずかに外反して丸くおさまる。高台は高いものの垂直に付き、水平接地する。

鉢B（56）の体部は直線的に開き、端部は丸くおさまる。台部は「八」字形に開き、端部が内側に肥厚して、内面接地する。

壷用蓋（57）の天井部には半球状の把手が付き、口縁部は短く垂下する。

甕（61）は「く」の字に外反した口縁部の先端が内側に肥厚し、小さく外傾する。（62）は口縁部が長く、端部は中央がわずかに窪んで、内外に小さく肥厚する。

土師器

杯A（12）・杯C（13）・皿A（14～16）・皿B身（17）・片口鉢（19）・鍋（23）・甕（24）が出土している。

杯A（12）は口縁部が内弯しながら開き、端部は丸くおさまる。

杯C（13）は底部から口縁部へと丸く連続し、口縁部は大きく浅く開いて、丸くおさまる。

皿Aには口径の大きな（15）と小さな（14.16）がある。（14.15）は口縁部が丸味を持って大きく立ち上がり、端部が外方に肥厚する。（16）は口縁部の開きがやや緩くなり、端部がわずかに外傾する。

皿B身（17）の高台はかなり内側に付き、細高く、端部が大きく外方に広がる。

片口鉢（19）は小さな平底を持ち、口縁部がわずかに開きながら立ち上がる体部へとゆるやかに連続する。口縁端部は小さく内側に肥厚する。

鍋（23）の底部は逆三角形状を呈し、体部は短く垂直に立ち上がる。口縁部は直線的に大きく開き、端部が上方に小さく肥厚する。

甕（24）は口縁部がわずかに外反しながら大きく開き、端部は上方に高く摘み上げられ、先端は垂直面を形成している。胴部は長胴で、口縁部よりは大きく張らない。

C．土壙－3出土の土器

土壙は本来的には奈良時代初頭の遺構であるが、溝－2と重複しているため、溝内の飛鳥・藤原時代の土器が少量混入している。

a．飛鳥・藤原時代の土器

須恵器

杯G蓋（64.65）・杯B蓋（66.67）・杯A（68）が出土している。

杯G蓋（64.65）は共に返りが口縁部より垂下する。返りを折り返しているために、口縁部外面に屈曲を持つ。（65）は宝珠状の摘みを付ける。

杯B蓋（66）には天井部が低いが、返りの痕跡を残す。（67）の天井部は高く、口縁部は大きく屈曲して端部が短く垂下する。

土師器

杯A（29）・鉢（31）・甕（32）・把手付き甕（35）が出土している。

杯A（29）は底部から体部にかけて丸く連続し、口縁部は小さく内反する。杯Cに近い。

鉢（31）は体部が直線状に外反し、口縁部は丸くおさまる。

甕（32）は口縁部がゆるく屈曲し、口縁部がさらに小さく外反する。体部は球形か。

把手付き甕（35）の口縁部は小さく外反する。体部は径が口縁径よりかなり大きく、球形になるものと思われる。胴部最大径の上方に若干扁平な把手が一対付く。

b．奈良時代の土器

須恵器

杯B蓋（69.70）・杯B身（71.72）・長頸壷（73）・広口壷（74.75）が出土している。多くは平城Ⅰ期に属するものであるが、広口壷のみ平城Ⅲ期かと思われる。

杯B蓋（69）は天井部が扁平で、口縁端部が垂下する。（70）は天井部が高く、笠形を示す。口縁端部はやや内傾気味に垂下する。

広口壷（74）は口縁部が直線的に外反し、（75）は外弯しながら開く。いずれも口縁部は水平に近く開き、端部が小さく上方に肥厚する。高台はいずれも低く、（74）は垂下し、（75）は若干踏張る。（75）の胴部はわずかな丸味を持つ。

土師器

杯A（28）・無頸壷（30）・甕（33）・把手付き甕（34）が出土している。

杯A（28）の体部は大きく内弯しながら立ち上がり、口縁端部を外方にわずかに摘み出す。

無頸壷（30）は体部がわずかに内弯しながら内傾する。口縁端部は三角形状となる。

甕（33）は口縁部の屈曲がわずかで、端部は丸くおさまる。

把手付き甕（34）は口縁部がゆるやかに外反する。胴部最大径が比較的高い位置にあり、そこに若干扁平な把手が一対付く。

D．土壙出土の土器

a．土壙－1出土の土器

弥生時代後期の高杯（4）・甕（5）・壷（6．7）・鉢（8．9）が出土している。

高杯（4）の脚部はロート状に外弯しながら広がり、円形透を四方に穿つ。

甕（5）は口縁部がわずかに外反しながら「く」の字に屈曲し、端部は斜め下方に小さく垂下し、狭い平坦面を形成している。胴部は円形になるものと思われる。

壷（6．7）は底部のみであり、（6）は平底状に、（7）は小さな高台状となる。

鉢（8）は体部が大きく開き、口縁部は短く垂直に立ち上がる。（9）はわずかに内弯しながら開く。いずれも底部は小さく、上げ底状となる。

b．土壙－2出土の土器

弥生時代後期の台付き壷（1）・高杯（2）・器台（3）が出土している。

台付き壷（1）は体部が算盤玉形をする。脚部は下半を欠損するが、「八」の字状に大き

く開き、円形透を三孔穿つ。口縁部は大きく直線的に開き、端部外面に沈線を巡らす。

高杯（2）は脚裾部のみであり、水平に近く開いた後端部が大きく内弯する。円形の透が四孔穿たれている。口縁部外面には三条の沈線が巡っている。

器台（3）は若干裾広がりの脚柱部のみであり、三条の沈線を巡らし、「エ」形の透を三孔穿っている。裾部は大きく開き、円形の透を三孔穿っているものと思われる。

c．土壙－4出土の土器

奈良時代初頭を中心とする土器が出土している。

須恵器

杯A（76.77）・杯B身（78.79）・甕（80.81）が見られる。

杯A（76.77）は底部から体部へと丸味を持って連続する。口縁部はわずかに外反する。

杯B身（78）は口径が大きく、（79）は小さい。いずれも口縁部は直線的に外反しながら開き、端部は丸くおさまる。高台は比較的高く踏張っており、内面接地する。

甕（80）は口径が大きく、外面に三条の波状文と一条の山形文を施した口縁部は直線的に開き、端部は狭い水平面をなす。（81）は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部は斜めに外傾する狭い平坦面を成す。体部は球形に近く、歪みが大きい。

土師器

杯A（36.37）・甕（38）・鍋（39）・短頸壷（40）が出土している。鍋・甕は前代に属すべきものと思われる。

杯A（36.37）の口縁部は「S」字状に立ち上がり、端部が内側に肥厚する。

甕（38）の口縁部はわずかに外弯しながら「く」の字形に開く。端部は窪むものの、斜めに外傾する狭い平坦面を形成する。

鍋（39）の口縁部は外弯しながら開き、端部は上方にわずかに肥厚し、斜めに外傾する狭い水平面を形成する。体部は内弯しながら立ち上がる。

短頸壷（40）の口縁部は比較的長く直立し、端部は丸くおさまる。外面と口縁部内面に丹を塗った精製品である。

d．土壙－5出土の土器

奈良時代初頭の甕が2点出土している。

甕（41）は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部を上方に小さく肥厚させ短い垂直面を成している。（42）は口縁部が外弯しながらわずかに開く。胴部の膨らみはほとんどない。

e．土壙－6出土の土器

奈良時代初頭に属する土器群である。

須恵器

杯A（82）・杯B蓋（83.84）・杯B身（85～87）が出土している。

杯A（82）は体部がかなり大きく張り出し、「S」字状に立ち上がる。

杯B蓋（83.84）は天井部があまり高くなく、口縁端部が外反気味に長く垂下する。

杯B身（86）は体部が直線的に開き、高台は比較的内側にあるがほぼ垂下する。(85.87)は体部が外反気味に開き、高台は底体部境に付くが、若干踏張り内面接地する。

土師器

杯A（43.44）が2点出土している。

杯A（43.44）とも底体部境は丸く、口縁部は「S」字状に立ち上がり、端部は内側に巻き込むように肥厚する。

E．掘立柱建物址に関する土器

掘立柱建物址の柱穴内およびその建物址に伴う雨落溝内より出土した土器であるため、奈良時代等新しい時期の建物址関係には古い時期の遺物が若干混入している。

a．掘立柱建物址－10に伴う雨落溝（溝－3）出土の土器

飛鳥・藤原時代後半の土器が出土している。

須恵器

杯H蓋（88～90）・杯H身（91～93）・鉢状（94）が出土している。

杯H蓋（89）は天井部から体部にかけて丸身を持ち、(89.90）は口縁部がわずかに外反し、(88）は大きく外反して丸くおさまる。

杯H身（91）は立ち上がりが受部より低くなる。(92.93）は受部より高い。いずれも返りの折り返しにより、口縁部外面が屈曲する。

鉢状（94）の体部は直線的であり、大きく開かない。口縁端部は内傾する平坦面をなす。

b．掘立柱建物址－14柱穴内出土の土器

飛鳥・藤原時代末から奈良時代前半の土器が出土している。

須恵器

杯B身（98.99）・高杯（100）が出土しているが、いずれも破片である。

杯B身（98.99）は高台が低く、かなり外側に付き、垂下して水平接地する。

高杯（100）はかなり径の大きな脚柱部であり、裾部は外反気味に「八」の字に広がる。裾端部は外反しながら斜め外方に垂下する。

土師器

杯A（47）1点のみであり、体部は外弯しながら大きく開き、端部は小さく外反する。

c．掘立柱建物址－14に伴う雨落溝（溝－14）出土の土器

柱穴内出土土器同様、飛鳥・藤原時代末から奈良時代前半の土器が出土している。

須恵器

杯H身（101.102）・杯G身（103）・椀A（104）が出土している。

杯H（101.102）は立ち上がりが受部端部よりも若干高く、両者とも返りを折り返しているが、(101）のみ受部外面が屈曲する。

杯G身（103）は一条の沈線が巡った口縁部が外反気味に開き、端部が小さく外反する。

土師器

鉢（48）・甕（49）がある。

鉢（48）の体部はわずかに内弯しながら開く。口縁部は大きく内傾し、端部は狭い面を持って小さく内傾する。底部は丸底となる。

甕（49）は口縁部が大きく外弯しながら開き、端部は丸くおさまる。肩部は口縁径ほどにしか張らず、かなり高い位置にある。長胴形になるものと思われる。

d．掘立柱建物址－19柱穴内出土の土器

飛鳥・藤原時代末から奈良時代前半の土器が出土している。

須恵器

杯A（95）・杯B蓋（96）・杯B（97）が見られる。

杯A（95）の体部は内弯しながら開き、口縁部は外反して丸くおさまる。

杯B蓋（96）は扁平な摘みを持つ。

杯B（97）は体部がわずかに外反しながら開き、口縁端部は丸くおさまる。

土師器

深鉢（45）・鍋（46）が出土している。

深鉢（45）の体部はわずかに内弯しながら開くものと思われる。口縁部はわずかに外反し、端部は若干窪むが狭い平坦面となって、斜めに外傾しておさまる。

鍋（46）は体部が内弯しながら開き、上半が垂直に立った後口縁部が「く」の字に外反する。口縁端部はわずかに窪む狭い平坦面となり、斜めに外傾する。

e．掘立柱建物址－21柱穴内出土の土器

飛鳥・藤原時代末から奈良時代前半の土器が出土している。

須恵器

杯A（105）・杯B身（106.107）・壷（108）が見られる。

杯A（105）は口縁部がわずかに外反し、丸くおさまる。

杯B（106）は体部が大きく張り出し、口縁部はわずかに外弯する。（107）とも高台はかなり内側に付き、しっかりと踏張る。

壷（108）の高台は短く、かなり外側に付くが、大きく開き、内面接地する。

土師器

皿（50）・把手付き甕（51）が出土している。

皿（50）の口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさまる。

把手付き甕（51）は若干扁平な球形の体部になると思われる。胴部最大径部分に平面三角形をした把手が一対付く。

f．掘立柱建物址－21に伴う雨落溝（溝－5）内出土の土器

須恵器

杯H身（109）・杯G蓋（110）・杯G身（111）・杯A（112）・杯B蓋（113.114）・杯B身（115～117）・皿（118）・鉢（119）・鉢B（120）・高杯（121.122）・長頸壷（123）・壷（124）等が出土している。

杯H身（109）の立ち上がりは受部端部より低く、返りを折り返したために受部外面が屈曲している。体部は丸身を持ち、杯Aに近い形態を呈する。

杯G蓋（110）は天井部が高く、口縁端部より短い返りを持つ。摘みは宝珠形。

杯G身（111）は体部がわずかに内弯しながら開き、口縁端部は小さく外反する。

杯A（112）は底体部の境が明確で、体部は外反しながら開き、端部は丸くおさまる。

杯B蓋（113）は内面に返りの痕跡を残し、口縁端部は丸くおさまる。比較的扁平な形態である。(114）は天井部が著しく平らで、口縁端部はわずかに外反しながら斜め外方に開く。

杯B身（115）は体部が大きく張り出し、内弯気味に開く。高台は短いが内側にあり、内面接地する。(117）は口縁部が直線的に大きく開き、高台はかなり外側にあって低い。

皿A（118）は体部がごくわずかに外反しながら大きく開き、端部は丸くおさまる。

鉢（119）は体部が若干内弯気味に立ち上がり、口縁部が小さく外反する。

鉢B（120）は体部が直線的に開き、丸くおさまる。高台は低く、わずかに開く。

高杯（121.122）は脚部のみである。(121）は脚柱部が短く、裾部が大きく開く。

（122）は裾部が水平に近く開き、端部はわずかに外弯しながら斜めに開く。

長頸壷（123）は頸部がわずかに外弯しながら口縁部へと大きく開いていく。

土師器

鍋（52）・甕（53）のみ出土している。

鍋（52）は口縁部が大きく開き、端部が狭い平坦面となって垂下する。

甕（53）は口縁部が短いが緩やかに開き、端部は丸くおさまる。胴部径は口縁径より若干大きくなるものと思われる。

g．掘立柱建物址－20柱穴内出土の土器

飛鳥・藤原時代末から奈良時代初頭の土器が出土している。

須恵器

杯H蓋（125）・杯H身（126）・杯G身（127）・杯A（128～130）・杯B蓋（131）・杯B身（132）等杯類のみが出土している。

杯H蓋（125）は天井部が丸く、口縁部がわずかに外反して開く。

杯H身（126）は立ち上がりが受部より高く、体部の開きも直線的となる。

杯G身（127）の底部は比較的小さく、口縁部はわずかに外反して立ち上がる。

杯A（128）は体部が内弯しながら立ち上がり、(130）は直線的に大きく開く。(129）はその中間形態であり、体部は内弯し口縁部が外弯する。

杯B蓋（131）は天井部が落ち込んでいる。口縁端部は斜め外方に垂下する。

杯B身（132）は体部が直線的に開く。高台は低いがわずかに開き、内面接地する。

土師器

椀（54）・杯A（55）・蓋（56）・皿A（57）・甕（58～60）が出土している。

椀（54）は丸底から体部へと丸味を持って連続し、口縁部がわずかに外弯する。

杯A（55）の体部は内弯しながら開くものと思われる。口縁部はわずかに外弯する。

蓋（56）の摘みは逆台形であり、かなり大きい。精製品である。

皿A（57）の口縁部は内弯しながら垂直に近く立ち上がり、端部が外側に肥厚する。

甕（59）の口縁部は外弯しながら大きく開く。（60）は「く」の字に外反する。（59）は胴部最大径が口縁径より小さく、（60）は若干大きくなる。

h．掘立柱建物址－20に伴う雨落溝（溝－6）内出土の土器

柱穴内出土土器とほぼ同時期の須恵器ばかりが出土している。

須恵器

杯G身（133）・杯C（134）・杯B蓋（135）・杯B身（136～138）・鉢B（139.140）がある。

杯G身（133）は体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が若干外弯する。底部は平底。

杯C（134）は口縁部が大きく外反する。底部は丸底になるものと思われる。

杯B蓋（135）は天井部が高く、端部は短く垂下する。摘みは扁平なボタン型である。

杯B（136～138）は体部がいずれもごくわずかに内弯しながら開くものと思われる。高台はかなり外側に付き、斜めに広がるが著しく低くなる。

鉢B（139）は小型であり、体部はわずかに内弯気味に開く。高台は垂下し、内面接地する。（140）の体部は直線的に開くと思われる。高台は低く、垂下して内面接地する。

i．掘立柱建物址－26柱穴内出土の土器

須恵器

杯B身（141）が1点出土している。体部は直線的に大きく開く。高台は比較的内側にあり、大きく踏張り、内面接地する。奈良時代初頭に属するものである。

j．掘立柱建物址－18柱穴内出土の土器

須恵器

奈良時代前半に属する、杯A（142）と杯B蓋（143）の2点が出土している。

杯A（142）は平底である。体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部は内傾気味となる。

杯B蓋（143）は口縁部が大きく屈曲する形態であり、環状の摘みを伴う。

k．掘立柱建物址－13柱穴内出土の土器

土師器

奈良時代前半の椀B（61）が1点出土している。

椀B（61）は底部のみであり、高台は若干開き気味に著しく高く伸びる。

F．石列遺構に関する土器

a．石列南溝上半から出土した土器－溝上半の堆積土は基壇状石列遺構が火災によって廃絶した後に溝内に投棄された焼土であり、基本的には基壇状石列遺構上面を覆う焼土層と同一層である。主として7世紀前半から中葉にかけての遺物である。

須恵器

杯H蓋（174～180）、杯H身（182～184）、杯G蓋（187）、杯G身（185.188）、杯A（187）、高杯（186）、土師器では杯A（67.68）、杯C（69）、皿A（70）、甕（71～73.75）、把手付き甕（74）、鍋（76）、円面硯（5.6）が出土している。

杯H蓋（174～180）のうち、（174.175）は口径が11cm前後とやや大きく器形もやや偏平、（176～180）は口径は10cm前後、（176.179.180）は天井が高く、丸みを帯びる。

（177）は小口径であるが、天井部を削り平坦である。

杯H身（182～184）は立ち上がりが受部より若干出る程度でかなり低くなる。（182.183）は底部が尖り、直線的な体部、受部と体部の境の屈曲が甘い。（184）は底部から体部にかけて丸みを帯び、受部と体部の境の屈曲が明瞭な個体。量的には尖底の個体が多い。

杯G蓋（187）は天井部・摘み共に三角形で、内面の返りが口縁端部よりわずかにさがる。

杯G身（185）は杯Aに近い形態で、体部がわずかに内弯しつつ開く。（188）は器高が高く、小さな平底、体部は稜椀形となり口縁部が外反気味に開く。

杯A（187）は小さな平底、口縁部はわずかに外反しながら直立する。

円面硯（5）は陸部の殆どを欠損するが大きく外反する堤部よりかなり高いため、海部は著しく深い。脚部は外弯しながら開き、長方形の透が12孔穿たれていたものと思われる。

透と透の間の脚部は篦描きの「×」記号によって埋められている。（6）は焼土層出土の破片と接合関係にある。

土師器

溝下半と比べて、土師器の出土量、特に鍋・甕類の煮沸用土器の出土量が多い。

杯A（67.68）は口縁部が若干内弯しつつ開く。（67）は丸底気味、（68）は平底である。鉢（69）は口縁部が大きく内弯しつつ開く。底部は欠失している。

皿（70）はわずかに丸みをもった底部に直線的に外上方へ立ち上がる口縁部を持つ。

甕のうち、（71）は球形の体部に外反気味に直立する口縁部を持つ。口縁端部は若干内弯する。（72）もまた、球形に近い体部を持つものである。（73.75）は口縁部が「く」の字に外反し、長胴形の体部を持つ。（74）は球形の体部の最大径部に一対の偏平な把手が付く。口縁部は頸部で屈曲し、わずかに外弯しつつ外上方へ立ち上がる。

鍋（76）は半球形の体部に、水平にのびる口縁部が付く。口縁端部は外側に面を持つ。

b．石列南溝下半から出土した土器－基壇状石列遺構が火災によって廃絶する以前に溝内に堆積した、7世紀初頭～前半にかけての遺物である。

須恵器

杯H蓋（144～146）、杯H身（147.148.150）、杯G身（149）、瑕（151）、高杯（152.153）

等が出土している。杯Gは少なく、杯Hが出土杯の大半を占める。

杯H蓋の口径・形態は溝上半の個体と比べて顕著な差異は見受けられない。(144.145) は口縁部が大きく外弯し、(144) は天井部が丸みをもつ。(146) は体部が高く立ち上がり、天井部との境に沈線を巡らせる。短頸壷等の蓋の可能性をもつ。

杯H身 (147.148) は立ち上がりが受部より高く、平底の底部から体部にかけて丸みを帯び、受部と体部の境が屈曲。(150) は立ち上がりがやや低く、丸みを帯びた尖り気味の底部、直線的に立ち上がる体部、受部と体部の境は不明瞭。量的には前者の個体が多い。

(152.153) は無蓋高杯、杯部は内弯しつつ開く。脚部は裾部で大きく広がり、水平にのびる。端部外側に面をもつ。

土師器

甕 (62) は球形の体部から頚部は屈曲を見せずに小さく外反し短い口縁部へ至る。体部と口縁部径はほぼ同じである。甑 (63) は口径と器高がほぼ同じ。棒状に近い把手が体部中位にあり、把手より上位は円筒状、把手より下へ向かってはすぼむ。底部はなく、筒状の器形。

c. 基壇状石列遺構上面を覆う焼土面上の遺物－焼土層の上に堆積した土壌層より出土した7世紀後半～8世紀初頭の遺物である。

須恵器

杯G蓋 (154.155) ・杯G身 (157～163) ・杯B蓋 (156) ・杯B身 (164) がある。

杯G蓋 (154.155) は共に返りが口縁端部より長い。(154) の摘みは中央が窪み、(155) は宝珠形である。

杯G身 (157) は口縁端部が内側に肥厚する。(160) は器高が低く、壷類の蓋の可能性もある。他の個体はいずれも口縁部が外反しつつ立ち上がる器形を持つが、法量からみて若干の時期幅を持つものと考えられる。(163) は器高が高く、底部は丸みを帯びる。

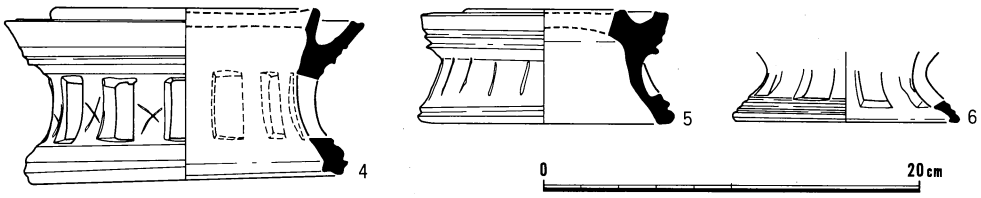
杯B蓋 (156) は器高が高く、口縁端部は短く折り返している。

杯B身 (164) は底・体部境の篦削りが顕著。踏張った高台が底部の内側に貼り付く。

土師器

鉢 (64) は口縁部に向かいゆるやかに内傾し、端部でわずかに外反する。

d. 整地層直上および焼土層内出土遺物－7世紀初頭～前半にかけての遺物である。整地層直上の土壌層および焼土層中の遺物を取り上げ時に分けることが出来ず一括して図示した。須恵質円面硯 (5) は南溝上半堆積土中より出土した破片と接合する。



第29図　出土円面硯

須恵器

杯H身（165）、杯G身（166）、須恵質円面硯（5．6）が図示出来た。

杯H身（165）は返りの立ち上がりが受部よりも若干高い。底部は丸みをおびた尖底状、体部と受部の境は屈曲するが甘い。

杯G身（166）は平らな底部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は若干内弯する。

円面硯（5）は南溝上半からも破片が出土している。陸部と堤部はほぼ同じ高さとなり、海部は浅い「U」字形を呈する。脚部は直線的に開き外面に縦方向の沈線を施す。透はない。

土師器

鉢（65）は平底の底部、口縁部は内弯。（66）は半球形。口縁部は直立する。

e．整地層構成土より出土した遺物－6世紀中葉および7世紀初頭の遺物である。

須恵器

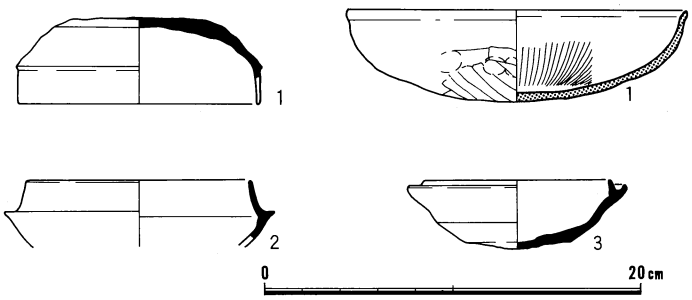
杯H蓋（1）は天井部約1/5にロクロ削り、平坦。体部境の稜は小さく三角形。

杯H身（2）は、口縁部はやや内傾するが立ち上がりは高く、端部は尖り、面は持たない。体部の篦削りは残存部までは及んでいない。

杯H身（3）は立ち上がりが口縁部より高く、受部下半は折り返しにより大きく屈曲。

土師器

杯A（1）が出土している。底部は丸みを持ち、口縁部が小さく内弯しつつわずかに開き、端部は外方へ屈曲する。杯Cに近い型式である。



第30図　石列整地層内出土土器

f．石列遺構に伴う遺構面上より出土した遺物－石列南溝の南側の肩部が切り込む面上より出土した、7世紀初頭～前半にかけての遺物である。

杯H蓋（169）は丸みをおびて器高が高い。（170）は口縁部境に甘い稜を持つ。

杯H身（172）は底部から受部端部まで丸みを帯びて立ち上がる。立ち上がりは内傾するが、受部より上に出る。（173）は尖り気味の底部から受部端部までやや直線的に立ち上がる。内傾する立ち上がりは受部より低い。

杯G蓋（171）は厚手の造り。体部・摘みとも偏平。返りは短く口縁部より下に出ない。

g．基壇状石列遺構より下層で出土した遺物－（167）は**f**で示した面の下層より出土した遺物。（168）は石列南溝溝底下層より出土している。

杯H蓋（167）はやや低く丸みを帯び、口径は11cmを越える。瑕（168）は球形の体部下半を乱方向の篦削り。口縁部の端部直下に段をもち、段下に波状文を巡らせる。

G．ピット内出土の土器

a．飛鳥・藤原時代の土器

須恵器

杯H蓋（189～192）・杯H身（193～196）・杯G蓋（197.198）・杯G身（199～205）・椀（204）・杯A（206）・杯B蓋（207）・杯B身（208）・高杯（209）・短頸壷（210）・長頸壷（211．212）・甑（213）がある。

杯H蓋（189～192）は体部がわずかに内弯し、口縁端部の形態に若干の違いが見られる。

杯H身（193～196）は（196）が同じ高さにある他は、返りが受部より高い。（195）の体部は丸味を持つが、他は逆三角形状となる。いずれも返りを折り返しているため、受部外面に屈曲を持つ。（193）が他より口径が大きい。

杯G蓋（197・198）の摘みは宝珠状であり、内面の返りが口縁部端部より低くなる。天井部は比較的低く、口縁部外面には返りを折り返した屈曲は見られない。

杯G身（199～205）の内（205）は器高も高く、体部が若干外反しながら開く。（201）は直線的に開くが、他は内弯しながら開く。（199～203）は杯A・杯H蓋との区別が付き難い。

椀（204）は小さな丸底から、内弯気味に体部が大きく開く。

杯A（206）は底部がわずかに丸く、体部がほぼ直線的に開き、口縁部が少し外反する。

杯B蓋（207）は天井部が低く、返りが口縁端部より長くなる。宝珠状摘みを持つ。

杯B身（208）の体部は椀状に内弯しながら大きく張り出し、深い。口縁部はわずかに外弯する。高台は長くしっかりと踏張り、内面接地する。

高杯（209）は杯部を欠損する。脚柱部は長く、二条の沈線が巡る。裾部は水平に広がり、端部は大きく内弯して垂下する。

短頸壷（210）は最大径が中央にある、扁平な球形と思われる。口縁部は短く外反する。

長頸壷（211）は高台が無く、体部は上方広がりの円柱状となり三条の沈線が巡る。（212）は肩が張り、丸身を持った算盤玉型である。高台は著しく長く、内側に小さく肥厚する。

甑（213）は体部がバケツ形を呈すると思われる。底部の大部分は欠損するが、上げ底状となっており、円形の孔が7箇所穿たれていたと思われる。

土師器

椀（77.78）・甕（79）等が出土している。

椀（77.78）は丸底から内弯する体部へと連続し、口縁部が少し内傾する。端部を斜め外方に摘み上げるため、その先端は斜めに内傾する。（77）は口径も小さく、器高も低い。

甕（79）の口縁部は緩やかに大きく外反し、端部は短い垂直面を成す。

b．奈良時代の土器

須恵器

杯A（214.215）・杯B蓋（218.219）・杯B身（221～224）・椀（216）・鉢B（217）・台付き鉢（225）・皿B（226）が出土している。いずれも奈良時代前半代におさまる。

杯A（214）は体部が内弯し、（215）は外反気味に開く。

杯B蓋（218）は天井部が低く、口縁端部は断面三角形状に内傾する。（219）は天井部に丸身を持ち、口縁部に屈曲の痕跡を残す。端部は斜めに開きながら垂下する。

杯B身（221.222）は体部が張り出し、（221）は内弯気味に、（223.222）は外反気味に立ち上がる。（221.223）は高台が低く外側に付くが、（222）は若干高い。（221）は器高が低い。（224）の底部外面には「富」の墨書が見られる。

椀（216）は平底で、体部は内弯しながら立ち上がる。

鉢B（217）の体部は直線的に伸びると思われる。高台は底体部境にあり、ごく低い。

台付き鉢（225）は体部は直線的に開くものと思われる。台は「八」の字に大きく開く。

皿B（226）は体部はわずかに外反気味に開く。高台は高く、若干開き気味となる。

土師器

杯A（80）・甕（81～85）・鉢（86）・筒形土器（87）が出土している。

杯A（80）は口縁部がゆるやかな「S」字状となり、端部が大きく開く。

甕の（81.82）は口縁部が外弯しながらゆるやかに外反し、端部は丸くおさまる。（82）は胴部径が口縁径より若干大きくなる。（83）の口縁部はわずかに外弯し、「く」の字に開き丸くおさまる。胴部径が口縁径よりかなり大きくなる。（84.85）は胴部が口縁径よりかなり小さく、長胴型になるものと思われる。（84）の口縁部はわずかに内弯して開き、端部が斜めに外傾する狭い平坦面となる。（85）は口縁部が外弯し、端部が狭い垂直面となる。

鉢（86）は鍋を深くしたような形態であり、体部は内弯しながら立ち上がる。口縁部は小さく「く」の字に開き、端部は斜めに外傾する平坦面を成す。

筒形土器（87）は体部は若干の膨らみを持ちながら直線的に逆「八」の字に開く。口縁端部は斜めに外傾し、裾端部は内傾する。

2．中世遺構出土の土器

A．火葬墓に伴う土器

12世紀代の土器が少量出土している。

須恵器

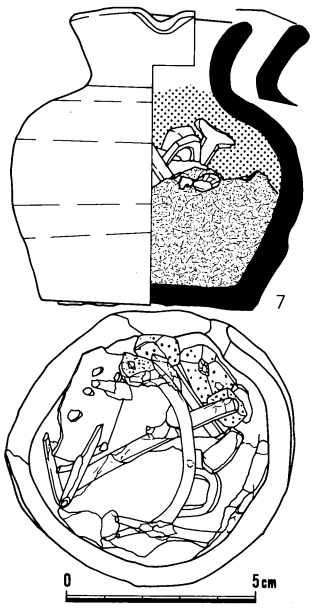
小皿（1）、椀（2～6）が出土している。

小皿（1）は口縁部が直線的に大きく外傾しながら開く。

椀（2～4．6）は大型であり、（2）は体部にかなりの丸身を持つ。（3．4）は口縁端部が小さく外弯する。（5）は小型であるが、口縁部を欠損する。

B．ピット内出土の土器

建物址に伴うものではないが、ピット内より須恵器片口小壷（8）が出土している。この小壷の底部は比較的大きな平底であり、口縁部も直線的に開き丸くおさまる。肩部は胴部のかなり上方にあり、胴部最大径は口縁径を大きく上回っている。土器内部には釘・小札・鉄滓・不明鉄器等が胴部の半分近くまで詰め込まれているため、胴部の内側には錆が付着している。明確な用途は不明であるが、御歯黒壷等ではないかと思われる。口径約4.8cm、器高約8.0cm、胴部径約7.8cmを計る。



第31図　ピット内出土御歯黒壷

3．包含層出土の土器

各時代の包含層内からは多くの土器が出土しているが、次時期の包含層内に前代の土器も多く包含されているため、ここでは各包含層に分割せず、包括的な「包含層」内出土として、土器を時期別に分類し、記述する。時期的には弥生時代後期から中世・近世に至る複数時期の土器が出土している。

A．弥生時代の土器

短頸壷（10）・高杯（11.12）・甕（13～18）・鉢（19）・甑（20.21）・台付き壷（22）等弥生時代後期の土器が出土している。

短頸壷（10）は最大径が体部下半にあり、口縁部はわずかに外反しながら開く。

高杯（11）の口縁部は段を持った後外反して大きく開く。（12）は口縁部が短く内傾し、体部の外面に横方向の叩き目を残す。いずれも杯部のみであり、脚部を欠損する。

甕（13）は小型であり、口縁部が短くゆるやかに外反する。（14.15）は中型で、口縁部が「く」の字に外反する。この二形態は、胴部最大径が口縁径を上回ることがない。（16）は大型であり、口縁部は外弯しながら大きく外反する。端部は狭い平坦面を成し、斜めに外傾する。胴部最大径が口縁径を上回る可能性がある。

鉢（19）の体部は内弯気味に大きく開く。底部は比較的大きな平底である。

甑（20.21）は体部がゆるやかに内弯しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。

B．飛鳥・藤原時代の土器

同時期でもほとんどが後半に属するものであり、一部奈良時代に含まれる可能性のものも見られるが、古い型式をより濃く残すとみなしてここに分類した。

須恵器

杯H蓋（227～234）・杯H身（235～242）・杯G蓋（243.244）・杯G身（245～249）・

杯B蓋（250～253）・杯B身（254～257）・高杯（258～260）・壷（261.262）等が出土。

杯H蓋（227～234）は（230）を除いて天井部が高い。（227.231.233）は内弯する体部へと連続し、端部は丸くおさまる。（228.229.232）は口縁部が小さく外弯する。（234）はわずかに外反して開く。（230）は口縁部が短く内反する。（228.232.234）は天井部が明確に識別できる。口径には（227.228）の大型と、その他の小型の2種類がある。

杯H身には返りが受部より高くなる形態（235～239）と、受部より出ない形態（240～242）がある。（235.236.240.241）は体部が逆三角形状となり、他はまだ丸身を残している。（238.239.241）の受部外面には折り返しによる屈曲が見られる。

杯G蓋（243）は天井部が笠形になると思われる。（244）は天井部が高く、内面に口縁端部と同じ高さの返りを持ち、口縁部外面にはその折り返しによる屈曲がある。

杯G身（245）は丸底から体部へと連続し、口縁部が大きく外反する。他のものは平底で、体部は外反気味に立ち上がる。

杯B蓋（250～252）は内面に折り返しによる返りを持つ。口径の大型な（251～253）と小型の（250）に分かれる。（253）は口縁部に段を持ち、端部が垂下する。

杯B身（254～256）は体部が大きく張り出す。（254）の体部は直線的に大きく開き、（255）は内弯気味に広く、（256）は内弯して高く、（257）は「S」字状に開く。高台はかなり内側に付くが、（254）がやや開き気味となる他は、垂下する。

高杯（259）は杯部が深く、口縁部が内傾する。（258.260）は浅い杯部であり、内弯しながら開く。脚部は短く、裾部は水平に近く開く。裾端部は（259）が大きく外弯し、他は斜めに垂下する。

壷（261）は口縁部が外弯しながら開き、端部は短い垂直面となって上方に肥厚する。（262）は内弯しながらゆるやかに開き、端部は内傾する狭い平坦面となる。口縁部外面には二条の沈線が巡り、その上段に一条の波状文を施す。

土師器

杯A（88）・椀（89）・甕（90.91）が出土している。

杯A（88）の底部は平底で、体部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさまる。

椀（89）は丸底と思われる底部から内弯する体部へ連続し、口縁端部は丸くおさまる。

甕（90.91）は口縁部が小さくゆるやかに外反し、丸くおさまる。胴部は口縁径程にしか張らず、頸部径が大きく、胴部が張らない形態となる。

C．奈良時代の土器

奈良時代前半におさまるものである。

須恵器

杯A（263～269）・杯B蓋（270～278）・杯B身（279～287）・皿A（288～292）・皿B身（293）・鉢A（294）・鉄鉢形（298）・鉢B（296.297）・鉢C（295）・長頸壷（299）等が出土している。

杯A（263）の口径は大型、（267～269）は小型であり、他は中型である。（263.267.268）は底部との境が丸身を持ち、他は境が明確である。（263）は体部が内弯気味に開き、他は外

反気味または直線的に立ち上がる。(263) は他地域からの搬入品の可能性がある。

杯B蓋 (270) は天井部が低く、口縁部に段の痕跡をとどめる。端部は断面三角形となる。口径が大きいため皿B蓋の可能性がある。(271) は口縁部に段の痕跡があり、端部が短く垂下する。他は天井部も高く、口縁端部も (274.278) が若干開き気味となる他は、内傾もしくは垂下する。口径からは、(276～278) の小型とそれ以外の大型に分かれる。

杯B身 (279.282.287) は口縁部がわずかに外弯し、(280.281.284) は内弯気味に、(283.285.286) は直線的に体部が開く。高台はよく踏張るがあまり高くなく、比較的外側の底体部境付近に付き、内面接地する。(287) は口径が小さい。

皿A (288.289) は底部に丸身を持つ。(289) は口縁部が内弯気味で、端部がわずかに肥厚する。他の口縁部は直線的もしくは外反気味となる。(290) は口径が大きく、器高も高い。

皿B身 (293) は口縁部が直線的に大きく開く。高台は比較的内側に付き、垂下する。

鉢A (294) は底体部境が丸く、体部が若干外反する。内面の一部に漆が付着する。

鉄鉢形 (298) は体部が直線的に開く。口縁端部は内側に肥厚し若干窪むが、外傾する狭い平坦面を成す。

鉢B (296) は口径が小さく、体部は直線的に立ち上がる。高台は外側に付き、内面接地する。(297) も体部は直線的であるが、大きく開く。高台は底体部境に付き、垂下する。

鉢C (295) は直線的に開く体部のみであり、口縁端部が内側に肥厚する。

長頸壷 (299) は高台を欠損する。胴部は器高の高い算盤玉型となり、肩が張る。

土師器

杯A (92～94) ・短頸壷 (95) ・椀 (96.97) ・皿A (98～101) ・鉄鉢形 (102) ・深鉢 (103～105) ・甕 (106～109) ・鍋 (110) ・製塩土器 (111.112) が出土している。

杯A (92) は底部が丸みを持ち、体部は「S」字状に立ち上がり、端部が内側に小さく肥厚する。(93.94) も底体部境が丸い。(93) は体部が「S」字状となるが、(94) は外反気味に大きく開く。(93) の口縁端部は内側に、(94) は外方にごくわずかに肥厚する。

短頸壷 (95) は口縁部が外反気味ながらほぼ垂直に、高く立ち上がる。端部は丸くおさまる。著しい精製品であり、内外面に丹を塗布している。

椀 (96) は体部が直線的に開き、口縁端部が小さく内傾する。底部は丸底気味である。(97) は器高が低く、体部は大きく内弯し、口縁端部は丸くおさまる。

皿A (98.99) は口径が大きく、口縁部が垂直に近く立ち上がり、端部は小さく外弯した後外方に肥厚する。(100.101) は小型で、口縁部が大きく外反しながら開く。

鉄鉢形 (102) の体部は緩やかに内弯しながら開く。口縁部がさらに大きく内傾し、端部が丸くおさまる。精製品であり、全面に丹を塗る。

深鉢形 (103) の体部は内弯しながら立ち上がるものと思われる。口縁部はさらに内弯し、端部は外面に蓋受け用かと思われる小さな段を持つ。(104) は体部が直線的に開き、バケツ形になるものと思われる。口縁端部は内側に大きく肥厚し、外傾する狭い平坦面を成す。(105) の体部はわずかに内弯しながらほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに小さく外反する。口縁端部は外傾する狭い面を成す。

甕 (106.107) は口径が大きく、口縁部が「く」の字に外反する。口縁端部は上方にごく

小さく肥厚し、わずかに外傾する垂直面を形成する。(108.109) は口径が小さく、(108) の口縁部は二段に屈折して外反し、(109) は外弯しながら大きく開く。いずれも口縁端部は丸くおさまる。(106～108) は胴部最大径が口縁径とほぼ等しくなり、(109) は大きくなる。

鍋 (110) の体部はわずかに内弯するものの大きく開き、外反する口縁部に連続する。口縁端部は上方に小さく肥厚し、垂直に近く狭い平坦面を形成する。

製塩土器 (111) は器壁が厚く、体部は直線的に開き、口縁端部は丸い。(112) は垂直に立ち上がる筒形状の体部を持ち、口縁端部はわずかに窪むが、外傾する狭い平坦面を成す。

D. 平安時代・中世の土器

須恵器

小皿 (8.9) は焼成が甘く、ロクロ土師器の範疇にいれてもよい個体である。(8) の口縁部は口縁部が内弯、(9.17) は外反気味に大きく開く。(17) は粘土紐痕跡が明瞭である。杯A (18) は篦切りによる平底から直線的に立ち上がる体部を持つ。高杯 (19) は口縁部がわずかに内弯しながら開く。脚柱部以下を欠損する。稜椀 (21) は稜が著しく明瞭で、口縁部は端部が大きく外反しながら直立気味に立ち上がる。椀 (20) は小型で口縁部は大きく内弯して開く。(22.23) は口縁端部が端反りする。(24) は体部が外方へ開き口縁部にいたる。(25) は口縁部が直立し端部はやや肥厚する。(26) は他の個体に比べ底部付近の器厚があり、口縁部付近は薄く、口縁部は若干外反する。底部は (25.26.27) とも回転糸切り後の調整はなく切り放したままの状態である。甕 (29.30) は焼成が甘く、亀山焼製であろう。(29) の口縁端部はやや内傾し (30) は短く直立する。

土師器

鍋 (14) は受け口状の口縁部をもつ。体部はやや下半が膨らむ長胴形であると考えられる。

羽釜は、水平に鍔が張り出し円筒形の胴部を持つ (13) と短い鍔が外上方にのび、口縁部が内傾する半球形か偏球形の体部を持つもの (10～12.15.16) に大別される。(13) は口縁部が直口し、外面を縦方向の刷毛によって調整するやや厚手で焼成の甘い製品である。(10～12.15.16) は横刷毛調整し、薄手で焼成の良い製品。口縁部の立ち上がりは小さく、鍔先の高さとほぼ同じか若干越える。全体の形態から、体部が強く張って最大径を体部にもつ偏球形の体部のもの (11)、体部があまり張らず鍔と体部の最大径が同一の偏球形の体部のもの (10.12.15)、体部が張らず半球形となって鍔径が最大径をとるもの (16) に分けることができる。

陶磁器

(28) は輸入磁器。白磁玉縁口縁碗である。口縁の玉縁は小さい。

(31) は無釉陶器擂鉢の口縁部。8本の篦描きの擂目をもつ備前焼ⅣA期の製品である。

5．包含層出土のその他の遺物

石器・金属器等が包含層内より出土しているが、その帰する明確な時期は不明である。

A．石器

石鏃（1）・打製石包丁様石器（2）・翼状剥片石核（3）・石重状石器（4）・砥石（5）等が出土している。

石鏃（1）：サヌカイト製凹基長さ2.4cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。基部の一端を欠く（調査時の破損）。素材剥片の背面側はほぼ全面に二次加工が及んでいるが、腹面側では周辺部にとどまる。従って断面形はD状を呈する。

打製石包丁様石器（2）：サヌカイトの板状の剥片の両側縁に、背面部から主に平坦な二次加工を施し、さらに打面部と末端部には、抉り部を作出している。図中の右側縁では、欠損により細部の状況は判断しかねるが、左側縁よりもシャープとなるように見受けられ、こちら側が刃部と想定しておく。形態的には打製石包丁に最も近いが、大きさの点で従来報告されているものよりもかなり小さい。長さ4.4cm、幅3.1cm、厚さ0.5cm（石質は白い洲の入るやや粗質のもので、四国産の可能性がある）。

翼状剥片石核（3）：灰色を呈するチャートの分割礫を素材とするもので、分割面（節理面）を石核底面とし、これと平行する自然面を打面としている。また、側面には自然面と分割面が認められる。作業面はほぼ全面に及ぶ一枚の剥離面（剥離角120度）と、わずかに残された小さな剥離面で構成され、末端は底面まで達している。断面部には、作業面の剥離以前の剥離面が一面認められ、この面と自然面の成す稜上に打点がある。また、作業面での剥片剥離以後にも、打面に対して細かな調整が加えられている。本石核は、本来はもう少し太味のあったものが、剥片剥離の際の衝撃等により、偶発的に節理面を境に割れてしまったと思われる。本石核の技術形態的な特徴は、翼状剥片石核に最も近い。しかしながら、サヌカイト以外の瀬戸内技法資料は、瀬戸内海沿岸の遺跡では今までの所認められておらず、類例の増加を待ちたい。長さ8.5cm、幅5.0cm、厚さ1.7cmを測る。

叩石状石器（4）：平面形は円形をなし、基部の側面形は隅円の台形をなす。その上部には宝珠形の突起が丁寧に磨き出されている。特に底部にあたる面は、弧を描く様に調整されており、摺石等である可能性も強い。

砥石（5．6）：四角柱材の四面を使用したもので、使用により各面とも中央部が大きく窪み、研磨痕が良く残る。石材は硬質系の砂岩である。

B．金属器

紡垂車（1．2）・矢頭（6～11）・釘（3～5）・鋏（12.13）・銭（14～16）等が出土。

紡垂車（1）の円盤部は薄い鉄板製であるが、円盤部にのみ粘土を張り付けはずみ部分を重くした可能性もある。わずかに残った軸部も金属製である。（2）の円盤部は薄く、（1）よりも小型であるが、残存状況は非常に良い。鉄製の軸部は完全に欠損する。

矢頭の（６～８）は薄板状で、先端を両側辺から作り出すが、基部の形態に違いが見られる。（８）は中子部分に矢柄部に巻いた銅板が残存する。（９）は体部が非常に長く、先端部を両面から叩き出す形態であり、中子側を欠損するが、体部下方の両側面に小さな突起があり、中子部と刃部を区別していたものかと思われる。(10) は鏑矢形であり、先端の一方と内子側を欠損する。中子は断面方形を呈する。(11) は基部が厚く、先端部がかなり長い。体部と中子部との境は大きな段を持ち明瞭で、(10) と同様中子は断面方形である。いずれも鉄製である。

（３～５）は角釘であるが、（３）は頭部が楕円形で斜めに傾斜するため、頭部を欠損している可能性もある。（４）は頭部が長方形を呈する。（５）は先端部分で、頭部を欠損する。

鋏 (12.13) は一方の先端部のみであり、断面形は角形となる。

銅銭はいずれも宋銭である。(14) は明確に「元豊通寳」(元豊＝1078～1085) であり、(15) も遺存状況が悪いが、「政和通寳」(政和＝1111～1117) かと思われる。(16) は著しく状態が悪く判読が非常に困難であるが、「熙寧元寳」(熙寧＝1068～1077) と読めようか。

C．土製品

土垂（１～20）と吹子の羽口 (21) が出土している。

土垂はその形状から細身形態（１～７）・太身形態（８～15）・夏目形形態 (16～19) ・円盤形形態 (20) に細分することができる。円盤形形態 (20) を除いていずれも手捏整形の痕跡を明瞭に残す。細身形態（１～７）は全長5.3cmから3.8cm、径1.3cmから0.8cmを計り、基本形は円柱形を呈する。太身形態（８～15）は全長6.6cmから4.1cm、径2.6cmから1.8cmを計る。円柱形態であるが両端が若干すぼむ。(15) は径がかなり大きく、孔も大きくゆがんでいる。夏目形形態 (16～19) は全長8.1cmから4.6cm、径3.2cmから1.7cmであり、他の形態に比べると調整が比較的丁寧である。円盤形形態 (20) は径約3.8cm、厚さは約2.3cmを計る。断面は角の取れた隅円形を呈し、焼成は若干瓦器質である。

羽口 (21) は現長で約8.3cm、最大幅約4.6cmを計る。先端側が半載された状態で遺存しており、先端のごく一部が残存する。外面には絞り目が一部に見られ、先端部分は受熱により灰色に変色し、その一部に金属が溶解して付着している。

表４　土垂一覧

No.	最大長	最大径	最小径	No.	最大長	最大径	最小径
1	5.5	0.9	0.7	11	5.3	1.9	1.2
2	5.1	1.3	0.8	12	5.1	2.1	1.3
3	4.7	0.9	0.7	13	4.8	1.8	1.3
4	4.9	1.4	0.8	14	4.2	1.8	0.7
5	4.6	1.4	0.7	15	5.6	2.4	1.6
6	4.3	1.3	0.8	16	8.1	3.4	1.7
7	3.7	1.3	0.8	17	4.3	1.7	1.1
8	6.6	2.2	2.0	18	4.6	1.7	0.7
9	5.6	1.8	1.6	19	4.7	1.9	1.0
10	5.3	2.1	1.4	20	3.8	2.3	—

6．処理槽地区出土の土器

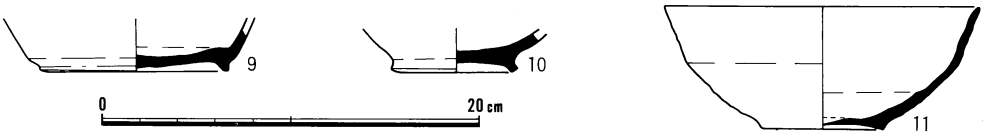
処理槽予定地区からは弥生時代から中世にかけてのわずかの土器が出土しているが、その内図化できたのは須恵器の杯B（9）・高台付き椀（10）・椀（11）のみである。

須恵器

椀B（9）は底部径が小さい。高台は底体部境に付き、内面接地する。

杯B身（10）の高台は低く、かなり外側の底体部境に付く。

椀（11）の体部は内弯しながら広がり、口縁端部は小さく外反する。底部は糸切りする。



第32図　処理槽地区出土土器

7．ポンプ場地区出土の土器

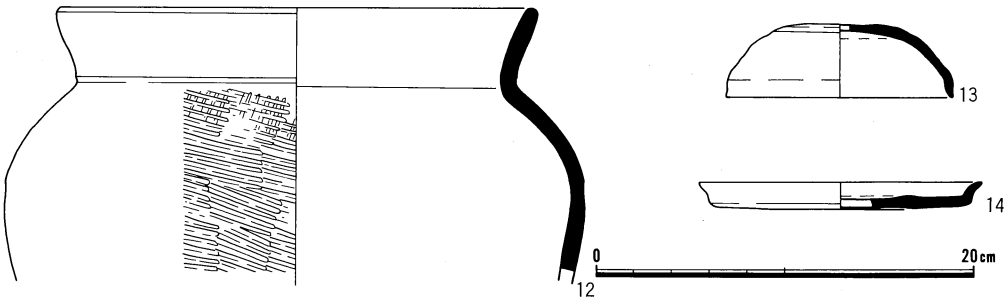
弥生時代から中世にかけての土器が見られるが、出土点数は少なく、図化できたものは須恵器の杯H蓋（13）・皿（14）・甕（12）の3点である。

須恵器

杯H蓋（13）の体部は内弯しながら開き、口縁部は小さく外弯する。

皿（14）は口縁部が大きく外弯しながら開き、端部は尖っておさまる。

甕（12）の口縁部は若干外反して開き、端部は丸くおさまる。肩部は撫で肩で張が小さい。



第33図　ポンプ場地区出土土器

第Ⅴ章　まとめにかえて

1．掘立柱建物址に関して

土層断面を観察すると、中世と思われる最上層遺構面から最下層の弥生時代遺構面までの間に数枚の遺構面を確認する事ができる。ただ7世紀後半から8世紀前半の包含層さらに遺構面と遺構埋土が非常に類似しており、2枚ある遺構面を時期毎に調査する事が非常に困難であったため、最終遺構面では同時期の遺構を同一面で確認する事となった。特に約30棟ほど検出された同時期に属すると思われる掘立柱建物址については、その遺構の性格が大いに注目されるため、その分析を試みてみたいと思う。

30数棟におよぶ掘立柱建物址には、多くの重複関係が見られる。包含層出土の土器をみてもかなりの時間幅が認められるため、掘立柱建物址も時間差による配置のステージを想定することが出来る。そこで建物の方位を有効なグルーピングの基準のひとつとして、分類を試みてみた。

建物址のほとんどが南北棟であるため、その桁行柱列の方向によって、3種類の基本方位を抽出することが出来る。そのA群は、ほぼ真北方向を向くものである。ただその中にもまだ重複関係が認められるため、この一群の建物址はその方位は一緒でも、その存続時期の異なる2群に細分出来ると思われる。B群は、建物の北が真北よりも東に振る配置形態を取るものである。C群は、磁北方向を取る建物址群である。B．Cの2群には重複関係が見られないため、それぞれこの一群でまとまるものと思われる。

以上のようにその建物の方位により、A～Cの3群に大別することができる。

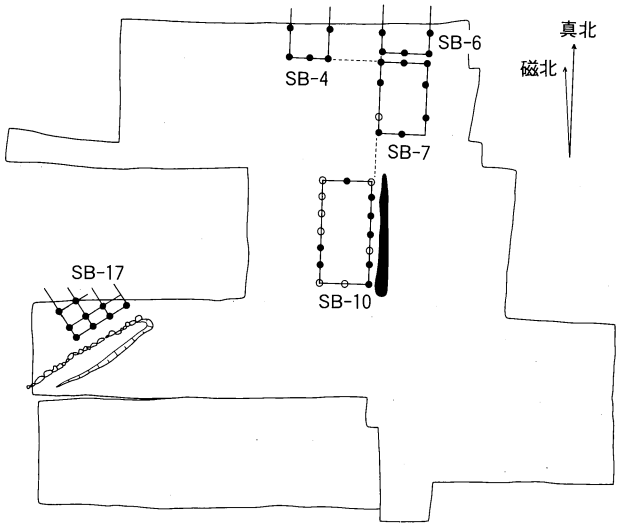
A群はさらに細分しなくてはならないが、その方位がほとんど一致しており、方位の違いだけによる細分は不可能なため、次に各建物址の配置関係に注目してみた。この配置関係は他群にも適応できるものであり、最終的には建物方位と共にこの建物配置関係によって、全建物址群をグルーピングする要因としたものである。この建物配置関係をA群に適応して2群に細分を行なった。

結局建物方位によって分類したA～Cの3群の建物址は、その配置関係から4群（Ⅰ群からⅣ群）のステージが考えられる事が明らかとなった。次に上記した配置の関係から、各群内の建物の関係を見てみたい。

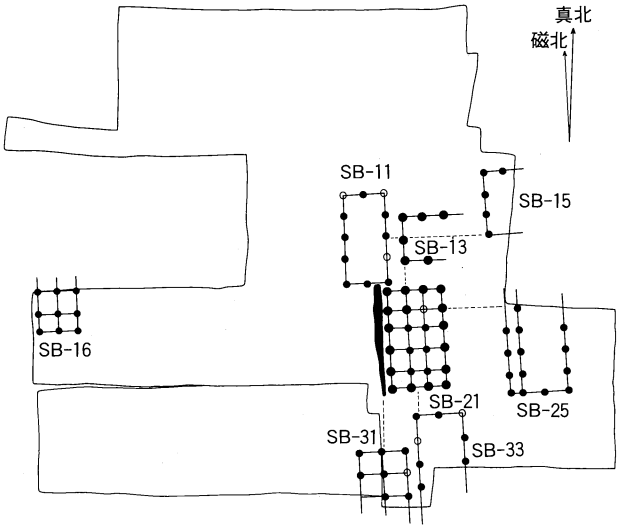
Ⅰ群

A群の内の群であるため、その方位は真北方向を示している。調査区の北地域を中心として、4棟の南北棟建物址によって構成されている。この群の中心的建物となるのがＳＢ－10である。建物規模も他のものより大きく、東側に雨落溝を伴っている。このＳＢ－10の東桁行の北延長上にＳＢ－6と7の西桁行が配されている。ＳＢ－10北梁間から15尺（約450㎝）

隔てて、ＳＢ－７の南梁間がある。ＳＢ－６と７は、2.5尺（約75㎝）の間隔を置いている。ＳＢ－６の西側にあるＳＢ－７の南梁間は、ＳＢ－32北梁間と東西方向に一直線となっている。この群の中で注目されるのは、調査区南西隅にある石列遺構とＳＢ－17である。この二遺構は前記した同期の遺構と方位が大きく異なり、現存地割り方位に対して約45度の振れを示しているため、群内においても時間的に差のある遺構群かとも思われる。特にその立地場所は浅い谷部へと下がって行く所であり、さらにその自然地形に逆らうように、敢えて45度に方位を取っている点は、先行地割りの規制に従うものとも思われる。



第34図　Ⅰ期遺構概略図



第35図　Ⅱ期遺構概略図

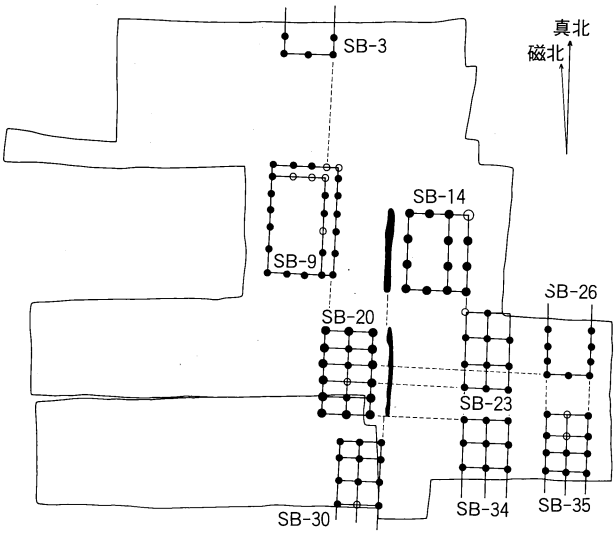
Ⅱ群

Ｃ群に属するものである。すべての建物址が南北棟である。その中心的建物址は調査区中央部に位置し、西側に雨落溝を伴うＳＢ－21である。この西桁行に接するようにしてＳＢ－11の東桁行がある。北10尺（約280㎝）には、ＳＢ－21梁間の西１間の柱の延長上に建築を途中放棄したＳＢ－13があり、その梁間中央線がＳＢ－11の桁行中央を通り、東ではＳＢ－15の南梁間に一致する。本来的にはこのＳＢ－５が本群の中心的建物となるべきものであったと思われる。ＳＢ－21桁行の北１間柱穴の延長上の東20尺（約560㎝）には、ＳＢ－25の北梁間がある。ＳＢ－31梁間中軸線は、ＳＢ－21雨落溝の南20尺（約560㎝）の延長上にある。ＳＢ－33の西桁行は、10尺を隔ててＳＢ－21の梁間中軸線の延長上に配されている。ＳＢ－16はこれらの建物址群とは大きく離れ調査区の西隅にあるため、その配置関係は明示し難い。

Ⅲ群

ほぼ真北方位を取るものであり、Ａ群の残りの群である。ここでの配置の基準となっているのは、ＳＢ－20である。ＳＢ－20西桁行の15尺（約450㎝）延長上にＳＢ－９の庇の端があり、ＳＢ－９東桁行の延長上にＳＢ－３の東桁行が揃えられている。その間は33尺（約

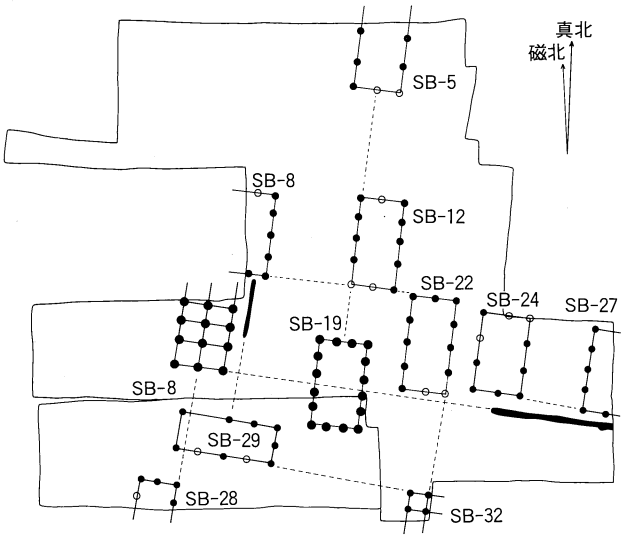
990cm）である。ＳＢ－20雨落溝とＳＢ－14雨落溝は基本的には同一線上にあり、ＳＢ－14の庇端はＳＢ－23・34の西桁行と一線上にある。ＳＢ－20とＳＢ－23は26尺（約780cm）の間隔を保ち、ＳＢ－23とＳＢ－34は９尺（約270cm）離れる。さらにＳＢ－26の南梁間はＳＢ－20の桁行中軸線の延長上にあり、ＳＢ－20から51尺の地点にあたる。ＳＢ－26とＳＢ－35は桁行が揃い、ＳＢ－35が12尺南に位置する。また、ＳＢ－30はＳＢ－20雨落溝の南端から８尺離れ、その東桁行は雨落溝の延長線上にある。ＳＢ－30とＳＢ－34は25尺（約750cm）の間隔を保っている。本遺跡の中では、建物址の配置状態に最もまとまりのある群である。



第36図　Ⅲ期遺構概略図

Ⅳ群

Ｂ群の建物址に相当する。建物址はⅢ群以上に調査区のほぼ全域に分布するが、その中心となるのはＳＢ－19もしくはＳＢ－29である。ＳＢ－19の北梁間の中軸線北延長上に、ＳＢ－12の西桁行があり、さらにその北がＳＢ－５梁間の中軸に当たっている。



第37図　Ⅳ期遺構概略図

ＳＢ－19とＳＢ－12の間が17尺、ＳＢ－12とＳＢ－５の間が32尺となっている。ＳＢ－12の南梁間は、ＳＢ－８は南梁間・ＳＢ－２の北梁間とも柱が通っている。一方、ＳＢ－29の桁行の中軸の北延長上にＳＢ－８雨落溝があり、ＳＢ－８梁間中軸線の南延長上にＳＢ－28の東桁行が位置する。ＳＢ－８の南梁間の東延長上に、溝－７が東西に走っている。また、ＳＢ－29の南桁行を42尺東に延長すると、ＳＢ－32の北柱列に当たる。このＳＢ－32はＳＢ－22の南30尺に位置している。ＳＢ－24とＳＢ－27はほぼ同規模の建物址であり18尺を隔て、それぞれ南北の梁間は方向が通っている。

以上建物の方位とその配置関係によって、建物址をⅠ群からⅣ群に分類する事ができた。当然これらの建物址群は時間的に共存するものではないため、Ⅰ群からⅣ群の分類も時期的推移に従って並べてみた。Ⅰ群はＳＢ－10雨落溝および各建物址柱穴内出土の土器から見て、

飛鳥・藤原Ⅲ型式に平行するものと考えられる。ただ、方位の大きく異なるＳＢ－17と石列遺構に関しては、石列遺構南溝内から出土する土器にはＳＢ－10雨落溝内出土の土器より一段階古い型式のものも少量含まれているため、同ステージの他の建物址群よりも古くなる可能性が高いと思われる。最も新しいと思われるⅣ群に関しては、遺構内から明確な一括資料は出土していないが、ＳＢ－８の柱穴内より環状摘みを伴う杯蓋が出土している事と、包含層内の土器に平城Ⅲ型式に含まれる土器が見られないことから、平城Ⅱ型式の新しい段階でおさまるものと考えられる。

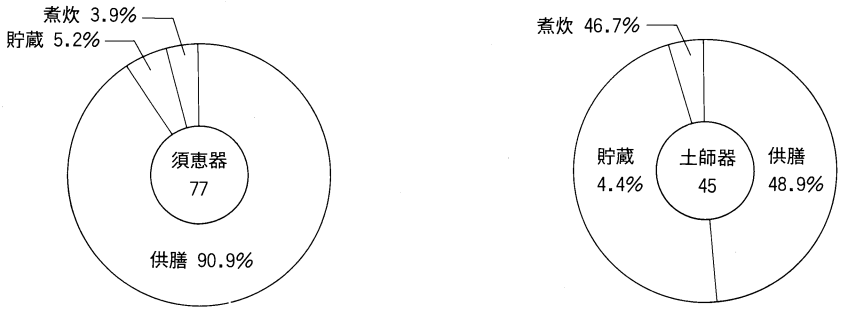
Ⅱ群からⅣ群は、その間の時期に相当する事になる。具体的に見ると、Ⅱ群はＳＢ－21雨落溝内出土の土器が、飛鳥・藤原Ⅳ型式から平城Ⅰ型式に相当している。Ⅲ群のＳＢ－14およびＳＢ－20の雨落溝と柱穴内から出土した土器は、平城Ⅰ型式に分類できる。Ⅳ群は、ＳＢ－８柱穴内より出土する土器から平城Ⅱ型式に並行するものと思われる。

以前本遺跡からは丹塗り土器や円面硯・墨書土器等官衙的な色彩の強い遺物が出土していたが、各時期の建物址配置を見る限りにおいては、その配置形態に官衙的要素を認める事はできない。ただ、その配置が非常に計画的になされている事、建物の規模等は官衙的な色彩の強い遺物にふさわしいものであり、本遺跡の特異性を顕著に示しているものと言えよう。

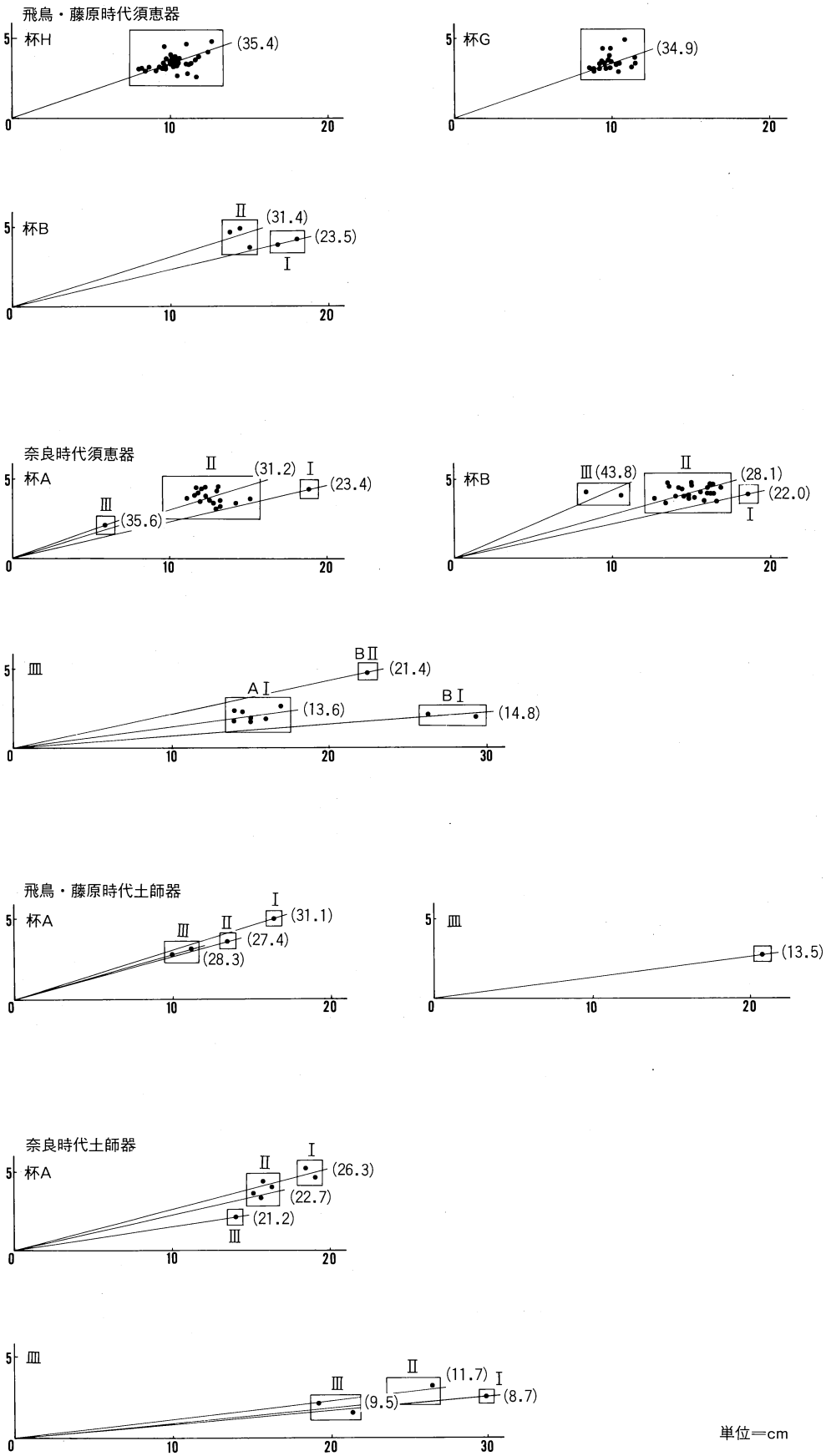
２．本遺跡出土の土器に関して

本遺跡出土土器のまとめとして、その概要と傾向を簡単に述べてみる。まずその取り扱う時期は８世紀代の資料のみであり、７世紀に属するものは須恵器杯Ｇ．杯Ｈがほとんどのため器種的偏りが大きい事と、土師器の資料が少ないため、ここでは除外する事にした。ただ概観を述べると、ほとんどが７世紀の後半代に属するものであり、同型式内においても細部の形状・胎土などに違いが見られるため、少なくとも同一窯からの一元的な供給ではないことは確実である。

８世紀代の土器群は、前代の土器に比較すると器種も豊富になり、土師器もかなり数を増す。須恵器対土師器の比率は、63％：37％であり、ほぼ２：１の割合となっている。また第38図の器種構成図に示すとおり、須恵器では杯Ａ．Ｂ・皿Ａ．Ｂ・高杯・鉢・椀等供膳形態の



第38図　器種構成図


飛鳥・藤原時代須恵器
杯H
(35.4)
杯G
(34.9)
杯B
Ⅱ
(31.4)
(23.5)
Ⅰ
奈良時代須恵器
杯A
Ⅱ
(31.2)
Ⅰ
(23.4)
Ⅲ
(35.6)
杯B
Ⅲ(43.8)
Ⅱ
(28.1)
(22.0)
Ⅰ
Ⅲ
BⅡ
(21.4)
AⅠ
(13.6)
BⅠ
(14.8)
飛鳥・藤原時代土師器
杯A
Ⅰ
(31.1)
Ⅲ
Ⅱ
(27.4)
(28.3)
Ⅲ
(13.5)
奈良時代土師器
杯A
Ⅱ
Ⅰ
(26.3)
(22.7)
(21.2)
Ⅲ
Ⅲ
Ⅲ
Ⅱ
(11.7)
Ⅰ
(9.5)
(8.7)
0
10
20
30
5
単位＝cm

第39図　器種別指数図

土器が約90％を占め、甕をはじめとする貯蔵形態が約10％という割合であり、官衙遺跡に非常に近い機能別割合の状況を示している。一方土師器では、供膳形態が約50％、貯蔵が約５％、煮炊形態が約50％となり、平城宮に代表される官衙遺跡の85％：0.5％：10％の比率とは大きく掛け離れるものとなる。この様に、須恵器は官衙遺跡の状況に近いにも係わらず、土師器が大きく異なる傾向は、当然その遺跡の本質的な性格に基づくものであるが、この須恵器、土師器の機能別器種構成の状態は、里長関連遺跡と考えられている氷上郡春日町所在の山垣遺跡とほぼ類似した傾向を示すものであり、本遺跡の性格が純粋な集落遺跡ではない事に機縁するためと思われる。この事は出土する円面硯・墨書土器等の遺物においても、また前項で述べた遺構、特に掘立柱建物址の各ステージにおける配置の状況からも確認出来る事である。

各器種別の法量を示したものが、第39図である。須恵器の場合、７世紀代の杯Ｇ・杯Ｈは35％の一法量で収まっているが、８世紀初頭の杯Ｂになると23.5％のＩ型式と31.4％のⅡ型式に既に分化している。さらに奈良時代に入ると、杯ＡではＩ型式23.4％、Ⅱ型式31.2％、Ⅲ型式35.6％とさらに細分化するが、Ⅰ・Ⅱ型式はほぼ前代の杯Ｂと同じ指数を示している。ところが杯Ｂは22.0％のＩ型式、28.1％のⅡ型式、43.8％のⅢ型式と杯Ａ同様３型式となるが、前代の杯ＢⅠ・Ⅱ型式とはかなり指数が異なってしまう。細分化の傾向は皿においても同様で、Ⅰ型式が14.8％、Ⅱ型式が21.4％、Ⅲ型式が13.6％となる。特に皿の場合、他の器種に比べて口径の差が大きく目に付く。

土師器は杯Ａと皿だけであるが、須恵器同様８世紀の初頭より既に３型式の区分が見られる。杯Ａでは８世紀初頭のものは各指数が30.0％前後と比較的近い値を示す傾向にあるのに対し、奈良時代に入ると器高差が顕著になる傾向が見受けられるが、須恵器杯Ａに比べると口径幅の変化はかなり小さいものとなっている。皿も10％を挟んだ指数となり、須恵器より器高差・口径差とも小さくなる。

概観すると須恵器の場合、窯関連の資料とは異なり一器種一法量ではなく、一器種においてもその使用目的によって使う器の大きさが区別されていたものと思われる。これは他の集落遺跡においても同様の傾向を示す事は容易に想像できる。むしろ当然の事であるが、特に須恵器の場合、三法量あっても絶対数を占めるのはほぼ一法量の型式のものであり、他の二法量の器は１点もしくは２点ほどである。法量的には３型式あっても、主に使用しているのは、ほぼ一定法量の容器であると考えて差し支えないと思われる。また土師器の場合須恵器以上に口径差が小さいため、資料が増えた場合３型式が２型式、もしくは単一法量になる事も十分に考えられる。そうなると須恵器と土師器とも一法量で事足りることとなり、官衙関連遺跡とはかなり異なる傾向が見られる事になる。

結　語

本遺跡の調査より、「有年原・田中遺跡」の性格の概要がかなり明確となってきた。特に今回確認した掘立柱建物址群は本遺跡の中核部分を占める遺構群であり、「有年原・田中遺跡」そのものと言ってよいものである。今回の調査結果を踏まえ、本遺跡の歴史的な位置付けと、その歴史的環境を考察し、本報告の結びとしたい。

本遺跡周辺が積極的に生活域として利用され始める弥生時代中期から後期には、山間部に奥山遺跡・木虎谷遺跡、平野部に有年原・田中墳丘墓遺跡下層の住居址群があるが、4遺跡とも本遺跡を中心としてほぼ同じ距離関係にあり、さらに立地条件も各遺跡によって異なっているため、個別の集落を形成していたと思われる。ただ、蟻無山古墳群の麓に所在する奥山遺跡からは小型仿製鏡が出土し、有年原・田中墳丘墓下層遺跡は墳丘墓を構築し、東側の谷内に所在する北畠遺跡の南側には前期古墳かと考えられる津村古墳があるため、この3遺跡が基幹的な弥生時代後半の集落遺跡であったと考えられる。

古墳時代には千種川をも望む蟻無山の蟻無山古墳群と、字津村に所在する津村古墳が前期に属する古墳であるが、後者に関してはその実態があまり明確ではない。蟻無山古墳群内の1号墳は帆立貝形を呈し、その出土品からみてもこの地域の盟主的古墳であることは確実である。ただその後この地域での古墳の造営は見られず、後期にはいって各尾根上に多数の古墳群が姿を現す。北原古墳群は除外するとして、玉堀・奥山・木虎谷・惣計谷の各古墳群は本質的には、同一の群に属するものと考えられる。ハトカ・奥山田が一群であり、塚山古墳群が一群を成すと思われるため、大きく3群の古墳群を想定する事ができる。それぞれの群の中に、前記した弥生時代中期から後期の遺跡が存在している事も特徴的である。

こうした時代背景を考えると、「有年原・田中遺跡」は蟻無山古墳からつながる伝統的勢力に基づいて形成された大きな古墳群を背景とし、また「有年原・田中遺跡」と肩を並べると思われる「牟礼・山田遺跡」は、大陸的特色の強い方形墳丘・複室構造の内部主体を持つ塚山古墳群を背景として出現したものと考えられる。時期的同時性・遺構の状況など表面上では類似した性格の両遺跡も、本質的にはその性格が根本的に異なっていることが明らかとなってくる。

調査によって確認された掘立柱建物址群は、「まとめ」の項で述べたように、4ステージの配置状況を考える事ができた。7世紀後半に属するⅠ期の建物址群は飛鳥・藤原土器編年Ⅲに相当すると思われ、さらに石列関連の遺構はそれよりも一段階先行し、飛鳥・藤原Ⅱ前後に来るものと思われる。Ⅲ・Ⅳ期は最も遺構が広く展開する時期であり、本遺跡の最盛期にあたる。Ⅳ期を奈良時代前半の平城土器編年Ⅱに相当するとすれば、Ⅱ期は飛鳥・藤原Ⅲに、Ⅲ期は平城Ⅰに当たる事となる。ほぼ古墳群の造営終息に呼応するように始まる本遺跡は、まさに古墳造営に変わる、蟻無山古墳系統の在地勢力の拠点的集落であったものと思われる。整然と並んだ建物址群は矢野川流域はもちろん、千種川を介して政治・文化・経済をも掌握していた「長」の、古墳に変わる権威の象徴であったものと思われる。奈良時代後半には本遺跡は衰退し、代わって「泰」を名乗る牟礼の牟礼・山田遺跡が台頭する状況は、「長」の移行に他ならない。

表5　溝関連出土土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
溝－1出土土器一覧					
須恵器					
15	杯H蓋	17.5	3.6	20.5	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、暗灰色
16		11.0	3.7	33.6	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、暗灰色
17		(11.3)	3.7+	——	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み調整不明、灰白色
18	杯H	(13.6)	3.4	25.0	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、暗灰色、左回転
19		(9.8)	1.9+	——	底外面・見込み調整不明、外面に自然釉、灰白色
20		(10.0)	3.1+	——	底外面ヘラキリ、見込み調整不明、暗青灰色
21	杯G	(9.1)	3.2	35.1	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰白色
22		(11.0)	3.0+	——	底外面ヘラキリ、見込み調整不明、明灰色
23	杯B蓋	(13.6)	1.7+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み調整不明、淡灰色
24		(18.0)	1.5+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み調整不明、灰色
25		(16.0)	0.9+	・・	天井部・見込みとも調整不明、灰白色
26	杯B	——	1.4+	——	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰色
27	高杯	——	8.8+	・・	杯底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
28	杯H	(10.7)	4.8+	——	底外面回転ヘラケズリ、見込み調整不明、灰色
29		(12.6)	5.1	40.4	底外面回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
30	高杯	(16.4)	12.5	・・	底外面回転ヘラケズリ、内面自然釉、杯部外面一条波状文、黒褐色
31	甕	(22.0)	8.2+	・・	外面と口縁内面自然釉のため調整不明、体部内面ヘラケズリ後指頭圧
土師器					
2	杯A	(16.8)	3.8	22.6	底外面不定方向ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、橙色
3	椀	(13.6)	5.3+	——	体部外面上半指頭圧・下半その後横方向ヘラケズリ、浅黄橙色
4	無頸壺	(31.6)	4.4+	・・	口縁部内面ヘラケズリ、体部外面縦方向刷毛目、内面指頭圧、茶橙色
5	鍋	(44.7)	8.2+	・・	体部外面不定方向刷毛目、内面横方向刷毛目、灰黄褐色
6	深鉢	(29.6)	10.4+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面上半横方向刷毛目・下半指頭圧、灰白色
7	甕	(24.8)	27.2+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面指頭圧、頸部内面横方向刷毛目、赤褐色
8		(14.3)	4.1+	・・	体部外面縦方向刷毛目、口縁部内面板ナデ、灰白色
9	埴輪	——	——	・・	外面横方向の刷毛目、内面指頭圧後不定方向の刷毛目、にぶい黄橙色
10		——	——	・・	外面横方向の刷毛目、内面縦と斜め方向の刷毛目、灰白色
溝－2出土土器一覧					
須恵器					
32	杯H蓋	(10.1)	1.7	16.8	天井部ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、暗灰色
33		10.6	4.0	37.7	天井部ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、淡灰色
34	杯H	8.4	2.9	34.5	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰色
35		(10.9)	3.3	30.8	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、淡灰色、左回転
36	杯G蓋	9.7	3.2	・・	回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰色
37		10.6	3.5	・・	回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰色
38	杯G	(9.8)	4.0	40.8	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰色
39		(9.4)	4.5	47.8	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、暗緑灰色
43		(10.4)	3.5	33.7	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰色
40	杯A	13.1	4.7	35.9	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、淡緑灰色
41		11.7	4.5	38.5	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、淡灰色
42		(13.0)	4.3	33.0	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、黒灰色

44 杯B蓋	(13.8)	1.5+	・・	外面自然釉、見込み調整不明、灰色、左回転
46	13.4	3.5	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰色
45 杯B	(13.6)	4.6	33.8	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、淡緑灰色
47	(16.0)	4.5	28.1	底外面・見込みとも調整不明、青灰色
50	(17.4)	6.6	37.9	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、暗灰色
51	(10.8)	4.0	37.0	底外面・見込みとも調整不明、淡青灰色
48 皿B蓋	(24.2)	3.3	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み調整不明、灰色
49 皿B	(22.4)	4.8	21.4	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
52 鉢A	(17.0)	7.4	43.5	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、淡灰色
53	15.5	8.5	54.8	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰色
54 高杯	(15.0)	4.4+	・・	杯底外部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、淡灰色
55	——	7.6+	・・	杯底外部回転ヘラケズリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰色
56 鉢B	(12.4)	10.1	・・	杯底外部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰色
57 短頸壷蓋	5.9	2.0	・・	外面自然釉のため調整不明、見込み一定方向ナデ、灰色
58 短頸壷	——	13.6+	・・	体部外面中央部回転ヘラケズリ・下半手回しヘラケズリ、暗灰色
59 台付壷	——	17.1+	・・	体部外面横方向の櫛目、底外面不定方向ナデ、内面指頭圧、明緑色
60 甕	(36.6)	12.8+	・・	体部内面叩き、口縁部外面に三条の波状文、暗灰色
61	(12.8)	7.3+	・・	体部外面縦方向の叩き後横方向刷毛目、内面叩き、灰色
62	(18.8)	5.4+	・・	頚部内面板ナデ、灰白色
63	(24.2)	24.0+	・・	体部外面縦方向の叩き後ナデ、内面縦方向ナデ、黒褐色
土師器				
11 杯A	(12.4)	3.6	29.0	底外面指頭圧後ナデ、内面斜放射状暗文、見込み一方向暗文、橙色
12	10.8	3.3	30.5	底外面指頭圧後ナデ、見込み一定方向ナデ、内面二段斜放射状暗文、橙
13 杯C	(19.4)	3.7	19.1	底外面不定方向、体部外面横方向ヘラミガキ、一段放射状暗文、橙色
14 皿A	(26.8)	3.3	12.3	底外面指頭圧後不定方向ナデ、体部外面横方向ヘラミガキ、体部内面一段放射状暗文、淡橙色
15	(28.6)	3.9	21.7	底外面ヘラケズリ後一定方向ヘラミガキ、体部外面横方向ヘラミガキ、体部内面一段放射状暗文、淡橙色
16	(24.6)	2.4+	——	ヘラケズリ後指頭圧、橙色
17 盤B	——	2.1+	——	底外面・見込みとも調整不明、淡橙色
18 片口鉢	(21.4)	13.6	63.6	体部外面不定方向の刷毛目、内面横方向の刷毛目、淡赤橙色
19	(23.5)	10.6	45.1	体部外面縦方向刷毛目、底外面不定方向刷毛目、内面指頭圧、灰白色
20 鉢	(15.2)	4.1+	——	外面は剝離が著しく調整不明
21 鍋	(42.2)	12.0+	・・	体部外面上半刷毛目後指頭圧・下半横方向刷毛目、口縁内面板ナデ
22	(36.0)	5.7+	・・	体外面縦方向刷毛目、灰白色
23	(29.0)	12.3+	・・	体外面ヘラナデ後ナデ、内面上半ヘラケズリ・下半指頭圧、浅黄橙色
24 甕	(25.2)	25.8+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面下半指頭圧、浅黄橙色
25	(25.0)	8.9+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面横方向刷毛目、浅黄橙色
26	(30.0)	6.0+	・・	体部外面縦方向刷毛目、口縁部内面横方向に板ナデ、灰白色
27 把手付甕	(28.0)	11.6+	・・	体部外面縦方向刷毛目、頚部内面ヘラナデ、灰白色

表6　土壙出土土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
土壙－1出土土器一覧					
弥生土器					
4	高杯	——	10.0＋	・・	脚部外面縦方向のヘラミガキ、内面頂部指ナデ、淡赤橙色
5	甕	(15.7)	9.8＋	・・	体部外面横方向の叩き後ナデ、内面縦方向のヘラケズリ、にぶい橙色
6	壷	——	4.7	・・	外面横方向の叩き後縦方向の刷毛目、内面縦方向のヘラケズリ後縦方向のナデ、見込み指頭圧、にぶい橙色
7		——	5.2＋	・・	外面縦方向のヘラミガキ、内面剝離のため調整不明、見込み指頭圧、高台部外面指頭圧、にぶい橙色
8	鉢	14.3	6.8	47.6	体部外面下半横方向の刷毛目、見込み指頭圧、橙色
9		(10.6)	5.5	51.9	体部外面右上り斜め叩き、内面縦方向ナデ、高台部外面指頭圧、橙色
土壙－2出土土器一覧					
弥生土器					
1	台付壷	11.5	10.1＋	・・	口縁部と体部下半は縦方向のヘラミガキ、体部上半調整不明（横方向のヘラミガキの可能性有）脚部は剝離のため調整不明、浅黄橙色
2	高杯	——	3.5＋	・・	外面縦方向のヘラミガキ、内面裾付近横方向のヘラミガキ、灰白色
3	器台	——	12.2＋	・・	外面は縦方向の刷毛目、脚部は横方向の刷毛目、脚柱内部は横方向のヘラケズリ、浅黄橙色
土壙－3出土土器一覧					
須恵器					
64	杯G蓋	(8.8)	2.8＋	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、明赤灰色
65		7.8	2.8	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
68	杯A	12.3	4.0	32.5	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、淡灰色
66	杯B蓋	(16.1)	2.5	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
67		13.9	2.1＋	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
69		15.8	2.7	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
70		(17.7)	4.0	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
71	杯B	(15.9)	4.0	・・	底外面・見込みともに調整不明、灰色
72		(17.7)	5.2	・・	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、暗灰色
73	長頸壷	——	9.4＋	・・	肩部以下外面回転ヘラケズリ、底外面ヘラケズリ後ナデ、暗灰色
74	広口壷	15.6	16.6	・・	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、底外面底部境回転ヘラケズリ、灰色
75		(17.2)	16.0	・・	底外面回転ヘラケズリ、灰色
土師器					
28	杯A	(17.0)	3.8＋	——	底外面指頭圧後ナデ、体部内面に一段の斜放射状暗文、浅黄橙色
29		(15.9)	3.7＋	——	底外面不定方向のヘラケズリか、外面の一部に丹が残存、浅橙色
30	無頸壷	(14.0)	6.6＋	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面指頭圧後ナデ、灰色
31	深鉢	(37.0)	9.4＋	・・	体部外面下半縦方向の刷毛目、内面指頭圧後ナデ、暗橙色
32	甕	(15.6)	7.9＋	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面指頭圧、浅橙色
33		(15.7)	5.8＋	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面ヘラケズリ、口縁部内面板ナデ、浅赤橙
34	把手付甕	(29.8)	11.4＋	・・	体部外面縦方向の刷毛目、暗橙色
35		(16.8)	17.5＋	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面上半ヘラケズリ・下半縦方向ナデ、浅橙

土壙－4出土土器一覧

須恵器

76 杯A	(11.8)	4.1	34.7	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み調整不明、灰白色
77	(12.0)	4.4	36.7	底外面ヘラキリ、見込み指頭圧後不定方向ナデ、灰白色
78 杯B	(15.0)	4.6	30.7	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
79	(8.3)	4.2	50.6	底外面回転ヘラケズリ後ヨコナデ、見込み自然釉、灰白色
80 甕	(40.2)	7.1＋	・・	口縁部外面に二条の沈線と四条の波状文、灰白色
81	(12.6)	(24.1)	・・	体部外面縦方向の叩き後横方向の櫛目、内面同心円文、暗黒褐色

土師器

36 杯A	19.0	4.6	24.2	底外面一方向のヘラケズリ後ナデ、底体部境は横方向のヘラケズリ後ナデ、体部内面には一段の斜放射状暗文、外面丹塗り、橙色
37	(18.4)	5.2	28.3	底外面「ロ」の字にヘラケズリ後不定方向の粗いヘラミガキとナデ、底体部境は横方向のヘラケズリ後ナデ、体部内面に一段の斜放射状暗文、見込みには三重の粗い螺旋状暗文、橙色
38 甕	(23.6)	9.8＋	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部・頸部内面横方向の刷毛目、灰白色
39 鍋	(46.1)	10.0＋	・・	体部外面指頭圧後縦方向の刷毛目、口縁部内面横方向の板ナデ、暗橙色
40 短頸壷	(10.0)	4.7＋	・・	体部外面と口縁部内面に丹塗り、淡橙色

土壙－5出土土器一覧

土師器

41 甕	(17.3)	4.3＋	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部内面横方向の板ナデ、淡橙色
42	(16.9)	12.9＋	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部内外面とも横方向の刷毛目後ヨコナデ、頸部内面横方向の刷毛目、体部内面横方向のヘラケズリ、黄灰色

土壙－6出土土器一覧

須恵器

82 杯A	(14.2)	3.5	24.6	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
83 杯B蓋	15.8	2.4	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
84	(17.4)	2.2＋	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、明青灰色
85 杯B	14.0	3.9	27.9	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰色
86	(13.5)	4.8	35.6	底外面回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、明緑灰色
87	(13.6)	4.8	35.3	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色

土師器

43 杯A	(15.2)	3.6	23.7	体部外面横方向のヘラミガキ、底外面不定方向にヘラケズリ後ヘラミガキ、見込み不定方向ナデ、橙色
44	(16.3)	4.0	24.5	底外面不定方向にヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、橙色

表7　掘立柱建物址関連土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
ＳＢ－10雨落溝（溝－３）内出土土器一覧					
須恵器					
88	杯H蓋	(10.2)	1.7+	——	天井部・見込みとも調整不明、淡灰色
89		(10.4)	3.6+	——	天井部ヘラキリ後ナデ、見込み調整不明、灰色
90		10.8	3.6	33.3	天井部ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰色
91	杯H	9.8	3.0	30.6	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰色
92		(9.0)	2.3+	——	底外面・見込み調整とも不明、暗灰色
93		(10.4)	2.6+	——	底外面・見込み調整とも不明、灰色
94	深鉢形	(26.6)	16.3+	・・	内外面とも粘土紐痕が明確に残る
ＳＢ－19柱穴内出土土器一覧					
須恵器					
95	杯A	(12.6)	3.2+	——	底部内外面とも調整不明、暗灰色
96	杯B蓋	——	1.3+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
97	杯B	(14.4)	3.4+	——	底外面・見込みとも調整不明、淡灰色
土師器					
45	深鉢	(29.4)	11.3+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面縦方向ヘラケズリ・刷毛目後ナデ、浅橙
46	鍋	(33.4)	6.8+	・・	体部外面縦方向刷毛目、口縁部・体部内面横方向刷毛目、橙色
ＳＢ－14柱穴内出土土器一覧					
須恵器					
98	杯B	——	1.2+	——	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、見込み一方向ナデ、灰色
99		——	2.0+	——	底外面・見込みとも調整不明、灰色
100	高杯	——	5.9+	・・	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、暗灰色
土師器					
47	杯A	(10.8)	2.1+	——	底外面指頭圧、見込み調整不明、浅橙色
ＳＢ－14雨落溝（溝－４）内出土土器一覧					
須恵器					
101	杯H	10.9	2.7	24.8	底外面ヘラキリ後ナデ、灰白色
102		11.7	3.4	29.1	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、青灰色
103	杯G	(9.9)	3.6	36.3	底外面ヘラキリ後ナデ、灰色
104	杯A	(12.2)	4.5	36.8	底外面ヘラキリ、灰色
土師器					
48	鉢	(19.6)	10.2+	——	体部外面指頭圧後横方向の刷毛目、内面下半縦方向ナデ、浅橙色
49	甕	(22.0)	18.2+	・・	体外面縦方向の刷毛目、内面指頭圧、口縁部内面横方向板ナデ、赤橙
ＳＢ－21柱穴内出土土器一覧					
須恵器					
105	杯A	(9.8)	2.4+	——	底部内外面とも調整不明、灰色
106	杯B	——	1.9+	——	底外面回転ヘラケズリ、灰白色
107		(15.2)	3.9	25.7	底外面回転ヘラケズリ、見込み調整不明、灰白色
108	台付壺	——	4.5+	・・	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、体部外面回転ヘラケズリ、灰色

土師器

50 皿A	(19.2)	2.2	11.5	体部外面不定方向のヘラケズリ、内面調整不明、淡橙色
51 把手付甕	——	16.0+	・・	体部外面上半縦方向刷毛目・下半横方向刷毛目、内面指頭圧後横方向刷毛目、白橙色

ＳＢ－21雨落溝（溝－５）内出土土器

須恵器

109 杯H	11.8	3.9	33.1	底外面回転ヘラケズリ後周囲のみナデ、見込み一定方向ナデ、灰色
110 杯G蓋	9.5	3.3	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
111 杯G	(11.4)	3.9	34.2	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰色
112 杯A	13.2	3.4	25.8	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰色
113 杯B蓋	14.8	1.6+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
114	(17.6)	0.8+	・・	天井部・見込みとも調整不明、灰色
115 杯B	——	3.1+	——	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
116	——	3.1+	——	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
117	(16.6)	3.6	21.7	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰色
118 皿A	14.0	1.7	12.1	底外面ヘラキリ、見込み指頭圧後ナデ、暗灰色
119 鉢	(10.2)	3.7+	——	内外面ともヨコナデ、灰色
120 鉢B	(14.3)	6.4	44.8	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、暗灰色
121 高杯	——	4.6+	・・	杯部底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
122	——	6.4+	・・	見込み不定方向ナデ、灰色
123 長頸壺	9.4	10.2+	・・	内面に粘土紐痕あり、暗灰色
124 壺	——	7.7+	・・	底外面回転ヘラキリ、体部下半回転ヘラケズリ、灰色

土師器

52 甕	(26.2)	4.5+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面横方向ヘラケズリ、口縁部内面横方向板ナデ、明橙色
53	(19.6)	5.6+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面縦方向のナデ、橙色

ＳＢ－20柱穴内出土土器一覧

須恵器

125 杯H蓋	10.6	3.7	34.9	天井部ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰色
126 杯H	8.2	3.2	37.6	底外面ヘラキリ、見込みヨコナデ、灰色
127 杯G	9.8	4.5	45.9	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰色
128 杯A	(11.6)	4.0	34.5	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰白色
129	(12.6)	3.2+	——	底外面・見込みとも調整不明、灰色
130	15.1	3.8	25.2	底体部境は回転ヘラケズリ、底外面不定方向のヘラケズリ、灰白色
131 杯B蓋	(15.8)	1.4+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み調整は不明、灰白色
132 杯B	13.4	3.5	26.1	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色

土師器

54 椀	(16.6)	5.0+	——	体外面横方向のヘラミガキ、底外面不定方向のヘラミガキ、淡橙色
55 杯A	(20.0)	3.3+	——	体部外面下半横方向のヘラミガキか、淡橙色
56 摘み部	——	2.1+	——	剥離が著しく調整不明、淡明橙色
57 皿A	(29.1)	2.6+	——	底外面は不定方向のヘラミガキか、橙白色
59 甕	(21.2)	7.9+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部内面横方向の板ナデ、暗橙色
60	(24.8)	8.5+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部内面横方向の板ナデ、暗橙色

ＳＢ－20雨落溝（溝－６）内出土土器一覧

須恵器

133	杯A	10.8	5.1	47.2	底外面ヘラキリ、内面に漆付着、暗灰色
134	杯C	(5.9)	1.1+	——	底外面・見込みとも調整不明、灰色
135	杯B蓋	(17.4)	3.1	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
136	杯B	(14.8)	3.8	25.7	底外面・見込みとも調整不明、灰白色
137		——	2.2+	——	底外面回転ヘラケズリ、見込み調整は不明、灰色
138		——	1.7+	——	底外面回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰色
139		——	4.2+	——	底外面回転ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰色
140	鉢B	——	4.6+	——	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色

ＳＢ－26柱穴内出土土器一覧

須恵器

141	杯B	16.2	4.1	25.3	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色

ＳＢ－18柱穴内出土土器一覧

須恵器

142	杯A	5.9	2.1	35.6	底外面ヘラケズリ、見込み不定方向ヘラケズリ、暗灰色
143	杯B蓋	(18.2)	2.8	・・	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰白色

表８　石列南溝内出土土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
174	杯H蓋	10.6	3.8	35.8	天井部ヘラキリ、見込みヨコナデ、明青灰色
175		(11.3)	3.5	31.0	天井部ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、明青灰色
176		10.1	3.9	38.6	天井部ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、明青灰色
177		10.2	3.3	32.4	天井部回転ヘラケズリ、見込みヨコナデ、明青灰色
178		10.2	3.9	38.2	天井部ヘラキリ、見込みヨコナデ、灰色
179		10.3	3.8	36.9	天井部回転ヘラケズリ、見込みヨコナデ、灰色
180		(10.0)	3.6	36.0	天井部ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰色
181	杯G蓋	10.2	3.2	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、明青灰色
182	杯H身	11.4	3.5	35.4	底外面ヘラキリ、見込みヨコナデ、明青灰色
183		(9.2)	3.5	38.0	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰白色
184		8.6	2.6	30.2	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰白色
185	杯G身	10.3	3.4	33.0	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、明青灰色
186	高杯	16.9	4.5+	・・	杯部底外面回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
187	杯A	(12.4)	4.2	33.9	底外面ヘラキリ後ナデ、見込みヨコナデ、灰色
188	杯G身	(11.0)	4.6	41.8	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、橙色
土師器					
67	杯A	(11.2)	3.2	28.6	底外面不定方向のヘラミガキ、体部内面に一段の斜放射状暗文
68		(10.0)	2.8	28.0	底外面不定方向ヘラケズリ、体外面横方向ヘラミガキ、一段斜放射文
69	鉢	(16.4)	5.1	31.1	底部調整不明、体外面横方向ヘラミガキ
70	皿	(20.8)	2.8	13.7	底外面不定方向のヘラケズリ後周囲を横方向にヘラケズリ、見込み中央部は指頭圧、以外は不定方向のナデ

71	甕	16.0	9.4+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面斜め方向の板ナデ
72		(14.6)	6.4+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部内面横方向の板ナデ
73		(24.4)	10.6+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部内面横方向の板ナデ
74	把手付甕	(31.0)	18.1+	・・	体部外面縦方向の刷毛目
75	甕	(28.8)	19.7+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面横方向の刷毛目
76	鍋	(42.6)	8.7+	・・	体部外面縦方向刷毛目後横方向刷毛目、内面板ナデ、口縁部内面板ナデ

表 9　石列遺構関連土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
144	杯H蓋	(10.4)	3.5	33.7	底外面ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、暗赤灰色
145		10.4	3.5	33.7	底外面ヘラキリ、見込み円形にナデ、灰白色
146		(10.2)	3.5+	——	底外面・見込み調整不明、沈線が一条巡る、灰白色
147	杯H身	10.2	3.4	33.3	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
148		(8.7)	3.0	34.5	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、明青灰色
149	杯G身	10.1	4.0	39.6	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
150	杯H身	(9.6)	3.2	33.3	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
151	壺（瓿）	——	5.0+	・・	体部半分以下不定方向ヘラケズリ、内面底部押さえ、灰色
152	高杯	(11.5)	10.1	・・	杯底部回転ヘラケズリ、杯部内面・脚部外面自然釉がかかる
153		(12.7)	9.3	・・	杯底部回転ヘラケズリ、杯部内面自然釉がかかる、脚部内面篦刳抜き
154	杯G蓋	(8.5)	2.3	・・	天井部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、暗青灰色
155		(7.6)	2.9	・・	天井部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、灰白色
156		(11.6)	3.4	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
157	杯G身	(9.4)	3.1	33.0	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰色
158		(9.3)	3.2	34.4	底外面ヘラキリ後ナデ、内面ヨコナデ、灰白色
159		11.2	3.4	30.4	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、青灰色
160		(10.4)	2.7	26.0	底外面回転ヘラキリ、見込み不定方向のナデ、灰白色
161		(8.0)	3.1	38.8	底外面回転ヘラキリ、見込み調整不明、灰白色
162		(10.3)	3.5	34.0	底外面ヘラキリ後ナデ、内面ヨコナデ、青白色
163		(9.6)	4.6	47.9	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
164	杯B身	(13.7)	4.7	34.3	底外面・見込み調整不明、明青灰色
165	杯H身	(11.2)	3.1	27.7	底外面ヘラキリ後ナデ、内面ヨコナデ、灰白色
166	杯G身	10.4	3.3	31.7	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み円形にナデ、灰白色
167	杯H蓋	11.1	3.6	32.4	天井部ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰白色
168	瓿	(11.3)	11.7	・・	体部外面回転ヘラケズリ後ナデ、底外面手回しヘラケズリ、灰色
169	杯H蓋	(9.8)	3.8	38.8	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、暗灰色
170		10.0	3.5	35.0	底外面ヘラキリ後ナデ、内面ヨコナデ、灰白色
171	杯G蓋	11.0	2.5	・・	天井部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、内面の一部に漆付着、明紫色
172	杯H身	8.7	3.3	37.9	底外面ヘラキリ後ナデ、内面ヨコナデ、灰白色
173		9.1	3.0	33.0	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、内面の一部に漆付着、灰白色
土師器					
62	甕	(12.8)	11.3	・・	体部外面縦方向刷毛目後横方向刷毛目、内面横方向ヘラケズリ、口縁部横方向の刷毛目

63	甑	29.2	26.8	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面刷毛目後ナデ
64	鉢	(15.6)	6.7+	・・	底外面不定方向ヘラミガキ、体外面横方向ヘラミガキ、内面一段暗文
65		(18.6)	8.5+	——	体部外面縦方向刷毛目、内面ナデ
66		(23.8)	11.4+	——	体部上半縦方向刷毛目、同下半横方向ヘラケズリ、内面指頭圧後ナデ

表10　ピット内出土飛鳥・藤原時代土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
189	杯H蓋	(11.4)	4.1	36.0	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
190		(10.7)	4.1	38.8	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、青灰色
191		10.0	3.6	36.0	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、暗灰色
192		9.7	3.6	37.1	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、内面ヨコナデ、灰白色
193	杯H身	10.3	4.0	38.8	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
194		9.9	3.8	38.4	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰白色
195		9.1	3.4	37.4	底外面ヘラキリ、見込み丸くナデ、明青色
196		(9.0)	3.2	35.6	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰色
197	杯G蓋	9.6	3.0	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、明青色
198		9.2	3.0	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、内面漆付着、明緑灰色
199	杯G身	11.0	4.1	37.3	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰白色
200		10.6	3.7	34.9	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、明紫灰色
201		10.8	3.7	34.3	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、緑灰色
202		9.8	3.0	30.6	底外面ヘラキリ後周囲ナデ、内面ヨコナデ、灰白色
203		10.0	3.4	34.0	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰色
204		(9.8)	3.7	37.8	底外面ヘラキリ後ナデ、体部外面中央部指頭圧、見込一定方向ナデ
205		10.4	4.5	43.3	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、淡黄灰色
206	杯A	(18.3)	5.3	29.0	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、淡灰色
207	杯B蓋	11.2	3.3	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み三角形にナデ、青灰色
208	杯B身	(13.0)	5.0	38.5	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
209	高杯	——	6.8+	・・	杯底外面回転ヘラケズリ、見込不定方向ナデ、脚部ヨコナデ、灰白色
210	短頸壺	(7.8)	4.9+	・・	底部調整不明、体部外面下半回転ヘラケズリ、明紫灰色
211	長頸壺	——	13.6	・・	底外面不定方向ヘラケズリ、内面ヨコナデか、灰白色
212		——	10.0+	・・	体部外面下半回転ヘラケズリ、底外面調整不明、内面ヨコナデ、灰色
213	甑	——	15.6+	・・	体部は内外面ともヨコナデ、底部の調整は不明、灰色
土師器					
77	杯A	(16.6)	5.8	34.9	底外面不定方向ヘラミガキ後ナデ、体部外面横方向ヘラミガキ・内面一条放射状暗文
78	椀	(18.0)	7.4	41.1	底外面不定方向刷毛目、体部外面横方向刷毛目、見込み不定方向ナデ
79	甕	(20.9)	6.5+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面ナデ

表11　ピット内出土奈良時代土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
214	杯A	(12.6)	3.7	29.4	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
215		(12.8)	3.5	27.3	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、浅黄橙色
216	椀A	13.6	5.0	36.8	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰白色
217	椀B	——	4.2+	——	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、黄灰色
218	杯B蓋	(16.6)	1.8+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
219		(16.1)	2.1+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
220	杯B	(18.6)	4.1	22.0	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
221		(16.8)	3.7	22.0	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰白色
222		14.2	4.5	31.7	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
223		(15.0)	4.8	32.0	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
224		15.6	4.2	26.9	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、暗灰色、底外面に「富」の墨書あり
225	椀B	——	4.3+	・・	椀部底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
226	皿B	(29.6)	2.0	6.8	底外面回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、灰白色
土師器					
50	杯A	(14.0)	2.1	15.0	底部内外面の調整不明、底体部境横方向のヘラミガキ、体部内面には一段の斜放射状暗文、橙色
81	甕	(18.9)	5.0+	・・	口縁部・体部外面縦方向の刷毛目、頚部内面横方向の板ナデ、灰白色
82		(13.0)	12.9+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面縦方向のヘラケズリ、にぶい橙色
83		(14.0)	11.2+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面下半縦方向のヘラケズリ、淡橙色
84		(23.4)	10.1+	・・	頚部外面指頭圧、体外面は剥離が著しく調整不明、橙色
85		(24.8)	14.8+	・・	体外面縦方向の刷毛目、体部内面・口縁部内面横方向の板ナデ、橙色
86	鉢	(35.5)	19.2+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面頚部下縦方向の刷毛目、下半縦方向のヘラケズリ、にぶい橙色
87	筒形	(19.6)	13.0	・・	内外面とも剥離が著しく調整不明、淡赤橙色

表12　火葬墓出土土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
1	小皿	9.1	1.9	20.9	底部糸切り、底部・体部境ヘラケズリ、灰白色
2	椀	——	4.1+	——	底部糸切り、内面ヨコナデ、灰色
3		(15.4)	6.3	41.0	底部糸切り、見込み一定方向ナデ、明緑灰色
4		(16.0)	6.2	38.8	底部糸切り、見込み不定方向ナデ、灰白色
5		——	3.6+	——	底部糸切り、内面ヨコナデ、灰色
6		——	2.2+	——	底部糸切り、見込み調整不明、灰白色

表13　包含層出土弥生土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
10	短頸壷	(6.5)	9.9	・・	外面体部上半まで縦方向のヘラミガキ、体部下半縦方向のヘラケズリ、底部内面指頭圧、淡橙色
11	高杯	24.7	5.9+	・・	杯部上半横方向のヘラミガキ・下半縦方向のヘラミガキ、橙色
12		(12.9)	4.4+	・・	杯部下半横方向の叩き、全体に剝離のため調整不明確、灰白色
13	甕	11.1	9.0	・・	体外面左上り叩き、内面縦方向ヘラケズリ、見込み指頭圧、淡橙色
14		(11.3)	12.7	・・	体外面右上り叩き、内面剝離のため調整不明、灰白色
15		(9.9)	9.0+	・・	体外面右上り叩き、内面剝離のため調整不明、にぶい橙色
16		(23.4)	5.8+	・・	体外面縦方向の叩き、内面横方向のヘラケズリ、浅黄橙色
17		(14.6)	3.1+	・・	体外面縦方向の叩き、内面横方向のヘラケズリ
18		——	4.8+	・・	体外面縦方向の叩き、底部はヘラキリ、灰白色
19	鉢	(12.9)	6.5	50.4	内外面とも剝離が著しく調整不明、底部外面指頭圧、褐灰色
20	甑	(16.0)	16.2	・・	体外面左上り叩き、底部付近横方向叩き、内面ナデと指頭圧、灰黄色
21		(16.4)	11.7	・・	外面ヘラケズリ後ナデ、内面縦方向の刷毛目後ナデ、浅黄橙色
22	台付壷	——	5.4+	・・	体外面は縦方向のヘラミガキ、脚外面は縦方向のヘラケズリ後縦方向の刷毛目、脚内面裾部は横方向のヘラケズリ、にぶい橙色

表14　包含層出土飛鳥・藤原時代土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
227	杯H蓋	12.5	4.8	38.4	天井部ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
228		(11.8)	4.6	39.0	天井部ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、青灰色
229		(10.4)	4.6	44.2	天井部ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
230		(10.5)	3.0	28.6	天井部ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
231		10.7	3.9	36.4	天井部回転ヘラケズリ、内面調整不明、緑灰色
232		10.2	3.6	35.3	天井部ヘラキリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、灰白色
233		(10.0)	4.5	45.0	天井部回転ヘラケズリ、見込み調整不明、紫灰色
234		(9.2)	3.4	37.0	天井部ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、緑灰色
235	杯H身	10.3	3.6	35.0	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰白色
236		9.5	3.5	36.8	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、明青灰色
237		(9.3)	3.6	38.7	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、青灰色
238		9.7	3.7	38.1	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰白色
239		(8.8)	3.1	35.2	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、明青灰色
240		(9.8)	3.7	37.8	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み一定方向ナデ、灰白色
241		(9.8)	3.2	32.7	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰色
242		(8.5)	3.2	37.6	底外面ヘラキリ後ナデ、見込み調整不明、灰白色
243	杯G蓋	——	2.4+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、明青灰色
244		7.3	2.5+	・・	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、内面ヨコナデ、灰色
245	杯G身	(10.0)	3.3+	——	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
246		(9.7)	3.3	——	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰色
247		(11.6)	3.7	31.9	底外面ヘラキリ、見込み調整不明、灰白色

248		(9.7)	3.1	32.0	底外面ヘラキリ、内面ヨコナデ、緑灰色
249	杯G身	(9.6)	3.5	36.5	底外面ヘラキリ、見込み調整不明、灰色
250	杯G蓋	10.4	2.8	・・	天井部回転ヘラケズリか、内面ヨコナデ、黄灰色
251	杯B蓋	11.8	2.7	・・	天井部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、灰白色
252		(15.9)	2.2+	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
253		(16.3)	2.0	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
254	杯B身	(18.0)	4.3	23.9	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、明紫灰色
255		(16.8)	3.9	23.2	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、明青灰色
256		(15.0)	3.8	25.3	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
257		14.4	5.0	34.7	底外面回転ヘラケズリ、見込み三方向にナデ、明青灰色
258	高杯	16.0	10.6	・・	杯部底外面回転ヘラケズリ、見込みは不定方向ナデ、灰白色
259		(11.3)	7.7	・・	内外面ともヨコナデ、見込みは不定方向ナデ、灰白色
260		(12.7)	7.2	・・	杯部底外面回転ヘラケズリ、他はヨコナデ、灰白色
261	壷	(11.9)	4.6+	・・	口縁部ヨコナデ、灰白色
262		(16.3)	5.5+	・・	口縁部外面に二条の沈線帯、その間に二条の波状文を巡らす
土師器					
88	杯A	(13.5)	3.7	27.4	底外面ヘラケズリ後ナデ、内面縦方向の刷毛目
89	椀	(12.7)	4.0+	——	底外面不定方向の刷毛目、体部外面中央指頭圧、内面不定方向のナデ
90	甕	(14.6)	6.7+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、体部内面横方向のヘラケズリ
91		(13.6)	8.5+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、体部内面縦方向のヘラケズリ

表15　包含層出土奈良時代土器一覧

No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
263	杯A	(18.8)	4.4	23.4	底外面回転ヘラケズリ、見込み調整は不明、青灰色
264		(13.9)	3.3+	——	底外面ヘラキリ、見込み不定方向のナデ、灰白色
265		(12.9)	3.1	24.0	底外面ヘラキリ後ナデ、明青灰色
266		(13.2)	3.6	27.3	底外面回転ヘラケズリ、緑灰色
267		(11.9)	3.6	30.3	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、灰色
268		11.0	3.8	35.4	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、灰白色
269		(9.9)	3.0	30.3	底外面ヘラキリ後不定方向のナデ、灰白色
270	皿B蓋	(20.4)	2.4	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
271	杯B蓋	(17.6)	2.9	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
272		(16.2)	3.1	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
273		(16.8)	3.5	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
274		(17.6)	3.9	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込不定方向ナデ、内面一部自然釉、明紫灰
275		(17.0)	2.4	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み一定方向ナデ、明赤灰色
276		(14.8)	3.5	・・	口縁部付近まで回転ヘラケズリ、明青灰色
277		(14.8)	2.8	・・	天井部回転ヘラケズリ、外面に自然釉がかかる、明青灰色
278		(15.5)	2.8	・・	天井部回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、オリーブ灰色
279	杯B	(16.2)	4.7	29.0	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
280		(16.4)	4.1	25.0	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
281		(14.8)	4.0	27.0	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色

282	(14.5)	4.0	27.6	底外面回転ヘラケズリ、底体部境も大きく回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰白色、左回転
283	16.9	4.5	26.6	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
284	(16.0)	4.1	25.6	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、灰色
285	(16.3)	4.7	28.8	底外面ヘラキリ後指頭圧、見込み不定方向ナデ、灰白色
286	(14.4)	4.4	30.6	底外面回転ヘラケズリ、見込み不定方向ナデ、浅黄色
287	(12.6)	3.8	30.2	底外面ヘラキリ、明青灰色
288 皿A	(16.0)	1.9	11.9	底外面ヘラキリ、内面自然釉、灰色
289	(14.5)	2.3	15.9	底外面ヘラキリ後ナデ、灰白色
290	(16.9)	2.7	15.9	底外面ヘラキリ後ナデ、内面不定方向のナデ、灰白色
291	(14.0)	2.4	17.1	底外面ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
292	(15.0)	1.9	12.7	底外面ヘラキリし周囲のみナデ、見込み不定方向ナデ、灰白色
293 皿B	(26.2)	2.1	8.0	底外面回転ヘラケズリ後不定方向にナデ、内面不定方向にナデ、灰色
294 鉢A	(15.2)	6.6	43.4	底外面回転ヘラケズリ後ナデ、内面一部に漆付着、灰白色
295 鉢C	(14.6)	10.2+	・・	底部を欠損のため調整不明、灰白色
296 鉢B	(12.4)	7.6	61.3	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、明青灰色
297	(16.5)	6.0	35.4	底外面ヘラキリ、見込み一定方向ナデ、灰白色
298 鉄鉢形	(13.1)	4.1+	——	底部欠損のため調整不明、灰白色
299 台付壺	——	9.4+	・・	底外面ヘラキリ後ナデ、内面底部に自然釉、明青灰色
土師器				
92 杯A	15.7	4.4	28.0	底外面ヘラケズリ後一定方向のヘラミガキ、見込み不定方向ナデ
93	(15.6)	3.5	22.4	底外面ヘラケズリ後ナデ、見込み不定方向ナデ、内外面丹塗り、橙色
94	(15.6)	3.3	21.2	底外面不定方向ヘラケズリ後ナデ、底体部境横方向のヘラミガキ、見込み不定方向のナデ、内外面に丹を塗る、橙色
95 短頸壺	(9.6)	4.1+	・・	口縁部内面から外面全面に丹を塗る、橙色
96 椀	(15.2)	5.2+	——	底体部境横方向のヘラミガキ、体部内面に二段斜放射状暗文、淡橙色
97	(14.2)	4.5	31.7	底外面不定方向のヘラミガキ、底体部境は横方向のヘラミガキ、見込み不定方向のナデ、浅黄橙色
98 皿A	(29.8)	2.6	8.7	底外面不定方向のヘラケズリ、底体部境横方向のヘラミガキ、見込み調整不明、体部内面に二段の斜放射状暗文、淡橙色
99	(26.4)	3.3	12.5	底外面不定方向のヘラケズリ、底体部境横方向のヘラミガキ、見込み不定方向のナデ、体部内面に二段の斜放射状暗文、浅黄橙色
100	(24.0)	2.6	10.8	底外面不定方向のヘラケズリ、体部外面横方向のヘラミガキ、見込み調整不明、体部内面に一段の斜放射状暗文、淡橙色
101	(21.4)	1.6	7.5	底外面ケズリ後指頭圧、体部内面刷毛目後ナデ、淡橙色
102 鉄鉢形	(16.2)	6.1+	——	底部欠損のため調整不明、全面に丹を塗る、橙色
103 深鉢	(31.0)	10.0+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、口縁部内面横方向の板ナデ、明橙色
104	(26.1)	10.6+	・・	体外面縦方向刷毛目、内面上半横方向刷毛目・下半ヘラケズリ、灰白
105	(24.4)	12.9+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面上半横方向刷毛目、下半指頭圧、淡黄色
106 甕	(25.8)	7.2+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面指頭圧、頸部内面横方向刷毛目、淡橙色
107	(20.9)	7.9+	・・	体部外面縦方向に刷毛目、内面縦方向のヘラケズリ、口縁部・頸部内面横方向の刷毛目、灰白色
108	(16.8)	14.3+	・・	体外面縦方向の刷毛目、内面縦方向ヘラケズリ、頸部内面横方向刷毛体部外面と口縁部内面に丹塗り、淡橙色
109	(16.6)	6.9+	・・	体部外面縦方向の刷毛目、内面横方向ヘラケズリ、浅黄橙色
110 鍋	(43.5)	6.2+	・・	体部外面剝離し調整不明、口縁部・体部内面横方向刷毛目、浅黄橙色
111 製塩土器	(10.9)	4.1+	・・	内外面とも指頭圧で調整が非常に粗い、橙色
112	(10.6)	18.6+	・・	体外面縦方向の刷毛目、内面は接合痕が明確に残り調整が粗い、橙色

表16　包含層出土平安時代・中世土器一覧

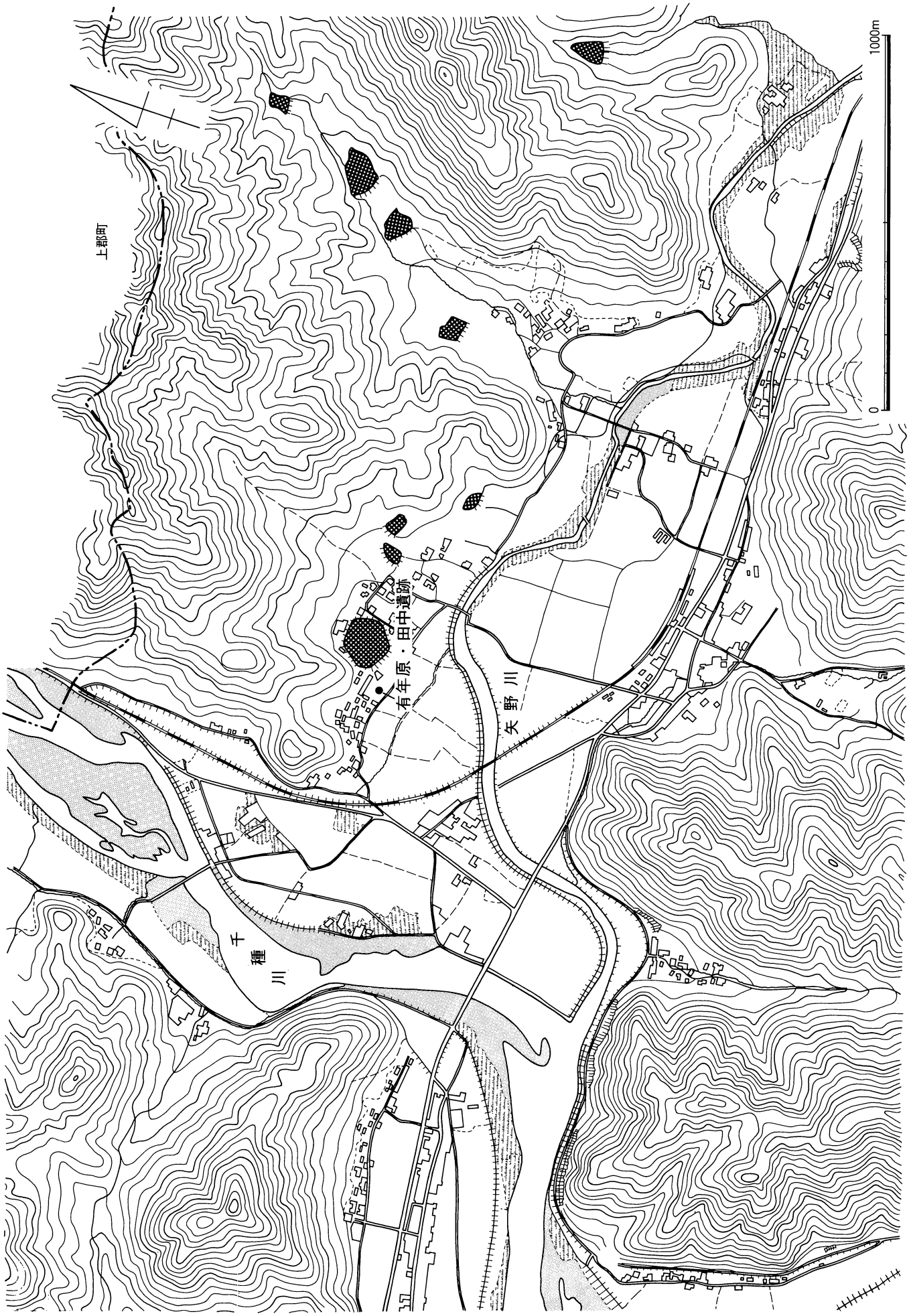
No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
8	小皿	9.4	2.0	21.3	底部ヘラキリ（ヘラオコシ）、内面ヨコナデ、灰色
9		(9.6)	1.5	1.5	底部糸切り、見込み不定方向ナデ、灰白色
17		(9.5)	2.6	27.4	底部ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰白色
18	杯A	(11.5)	3.2	27.8	底部ヘラキリ、内面ヨコナデ、灰白色
19	高杯	(13.0)	3.7+	・・	内外面ともヨコナデ
20	椀	(8.5)	3.0	35.3	底部糸切り、内面ヨコナデ、褐灰色
21	稜椀	(17.7)	3.6+	——	底部欠損のため調整不明、明紫灰色
22	椀	(15.8)	4.3+	——	底部欠損のため調整不明、灰白色
23		(16.2)	3.9+	——	底部欠損のため調整不明、オリーブ灰色
24		(15.9)	5.0+	——	底部欠損のため調整不明、灰白色
25		14.4	6.2	43.1	底部糸切り、内面ヨコナデ、明緑灰色
26		(13.6)	5.2	38.2	底部糸切り、内面ヨコナデ、灰白色
27		——	3.6+	——	底部糸切り、見込み不定方向ナデ、明青灰色
29	甕	(19.6)	3.8+	・・	体部外面叩きか、内面同心円文、灰色
30		(16.8)	9.8+	・・	体部外面縦方向叩き後横方向叩き、内面同心円文、灰白色
31	摺鉢	(27.0)	4.1+	・・	おろし目八条の櫛書き、灰赤色
輸入磁器					
28	白磁椀	(15.6)	3.0+	——	口縁部外面に大型の玉縁、乳白色の釉を施す
土師器					
7	甕	(19.0)	6.7+	・・	体部外面縦方向の叩き、内面横方向のヘラケズリ
10	鍋	(22.8)	2.7+	・・	口縁部は内外面ともヨコナデ
11		(27.6)	5.2+	・・	体部外面横方向の刷毛目後ナデケシ
12		(24.8)	6.4+	・・	体部内外面とも横方向の刷毛目
13		(17.8)	6.0+	・・	体部外面縦方向刷毛目後ナデ
14		(26.6)	7.6+	・・	体部外面縦方向刷毛目、内面横方向ヘラケズリ
15		(23.2)	10.5+	・・	体部外面上半縦方向刷毛目・下半横方向刷毛目、内面横方向刷毛目
16		(23.4)	6.4+	・・	体部外面指頭圧後ナデ

表17　処理槽地区およびポンプ場地区出土土器一覧

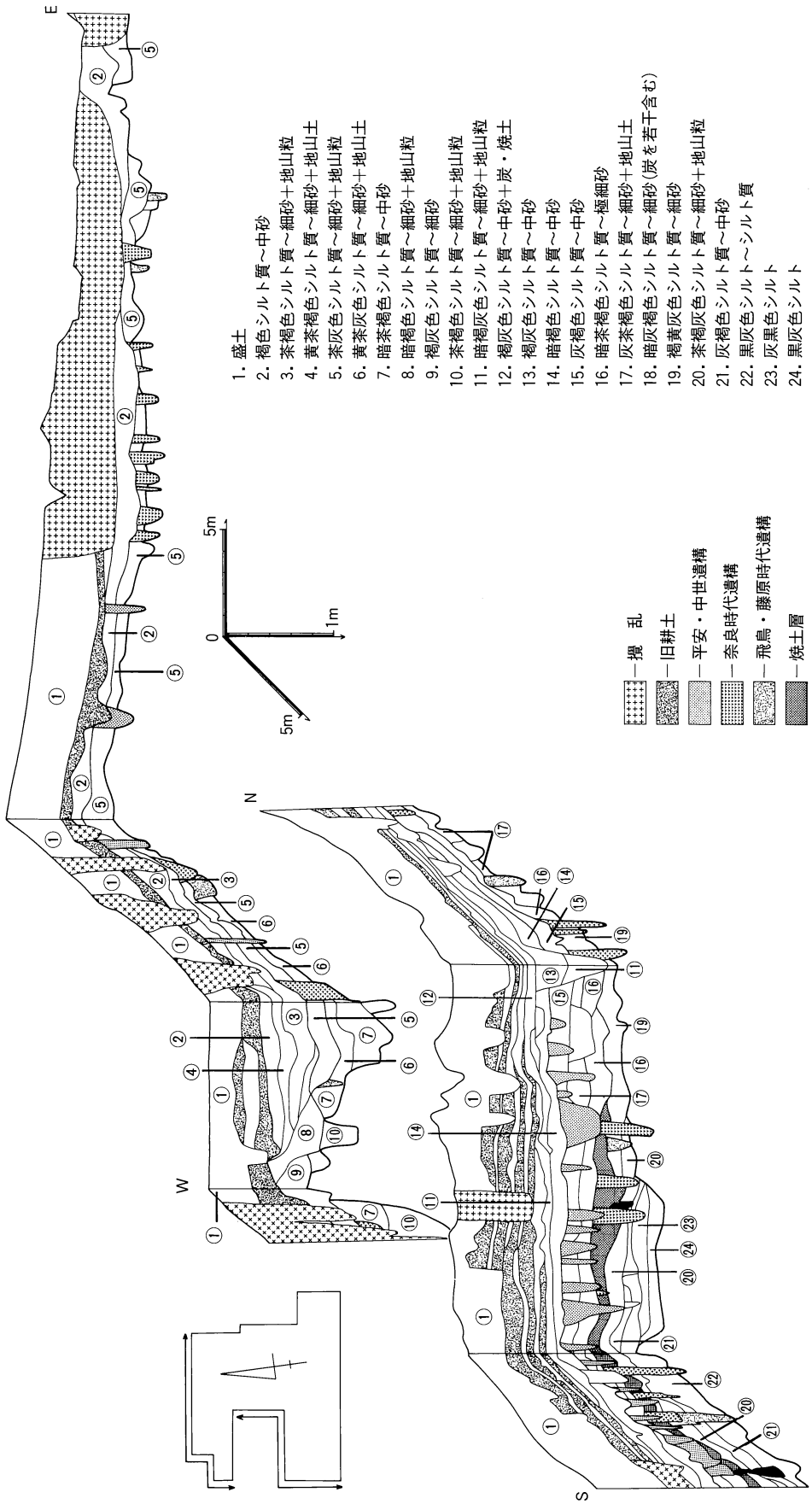
No.	器種	口径	器高	指数	調整および備考
須恵器					
9	杯B	——	2.1+	——	底外面ヘラリキ後ナデと指頭圧、見込み一定方向ナデ、黄灰色
10	高台付椀	——	2.0+	——	底外面糸切り、見込み一定方向ナデ、灰白色
11	椀	(16.6)	6.5	39.2	底外面糸切り、粘土紐痕が明瞭、灰白色
12	杯H蓋	(11.8)	4.0	33.9	天井部ヘラキリ、見込み不定方向ナデ、灰白色
13	皿A	(15.0)	1.4	9.3	底外面ヘラキリ後ナデ、灰白色
14	甕	(25.0)	13.9+	・・	体部外面横方向の叩き、内面ナデ、灰色

図　　版

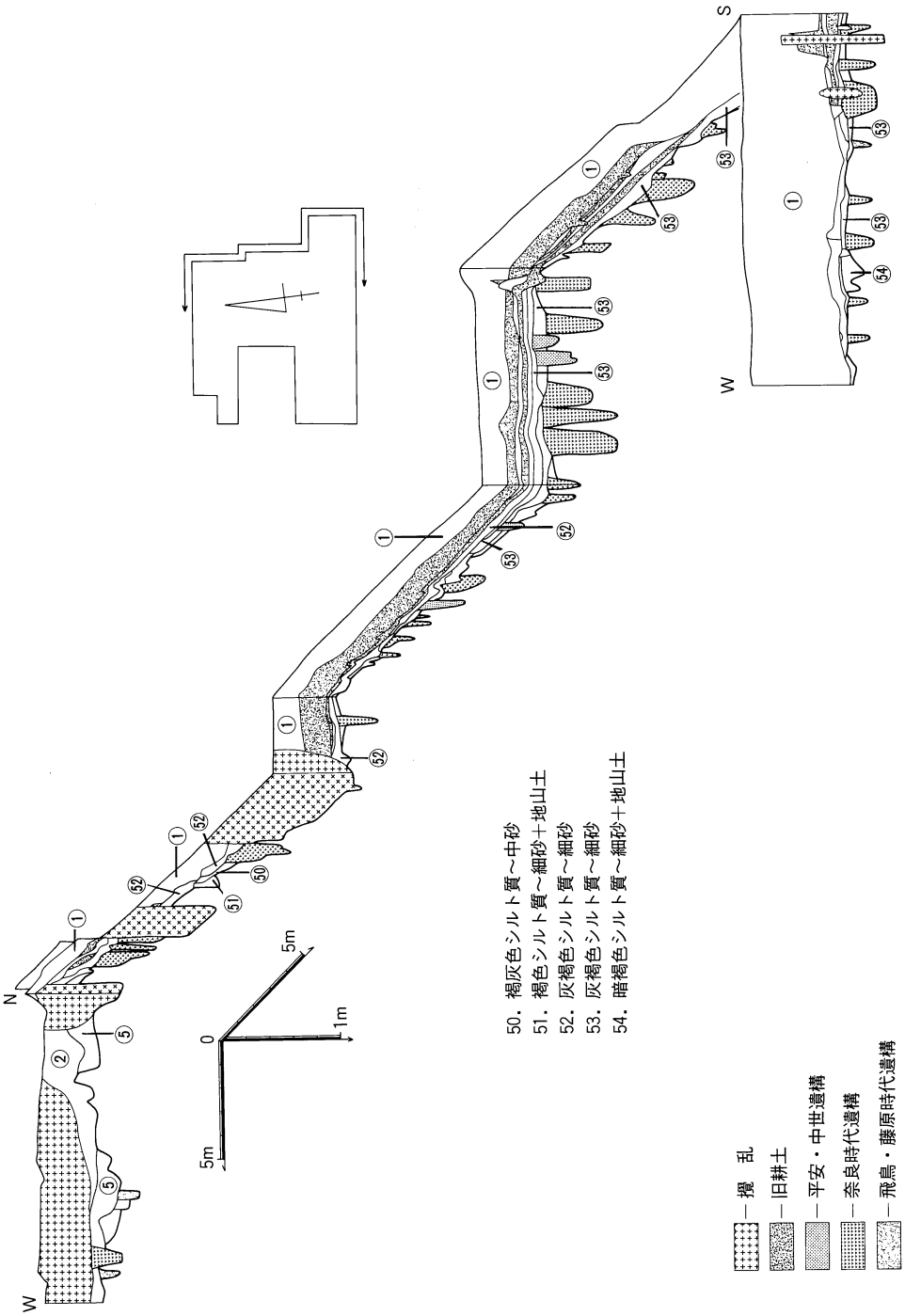
図版1　遺跡周辺図



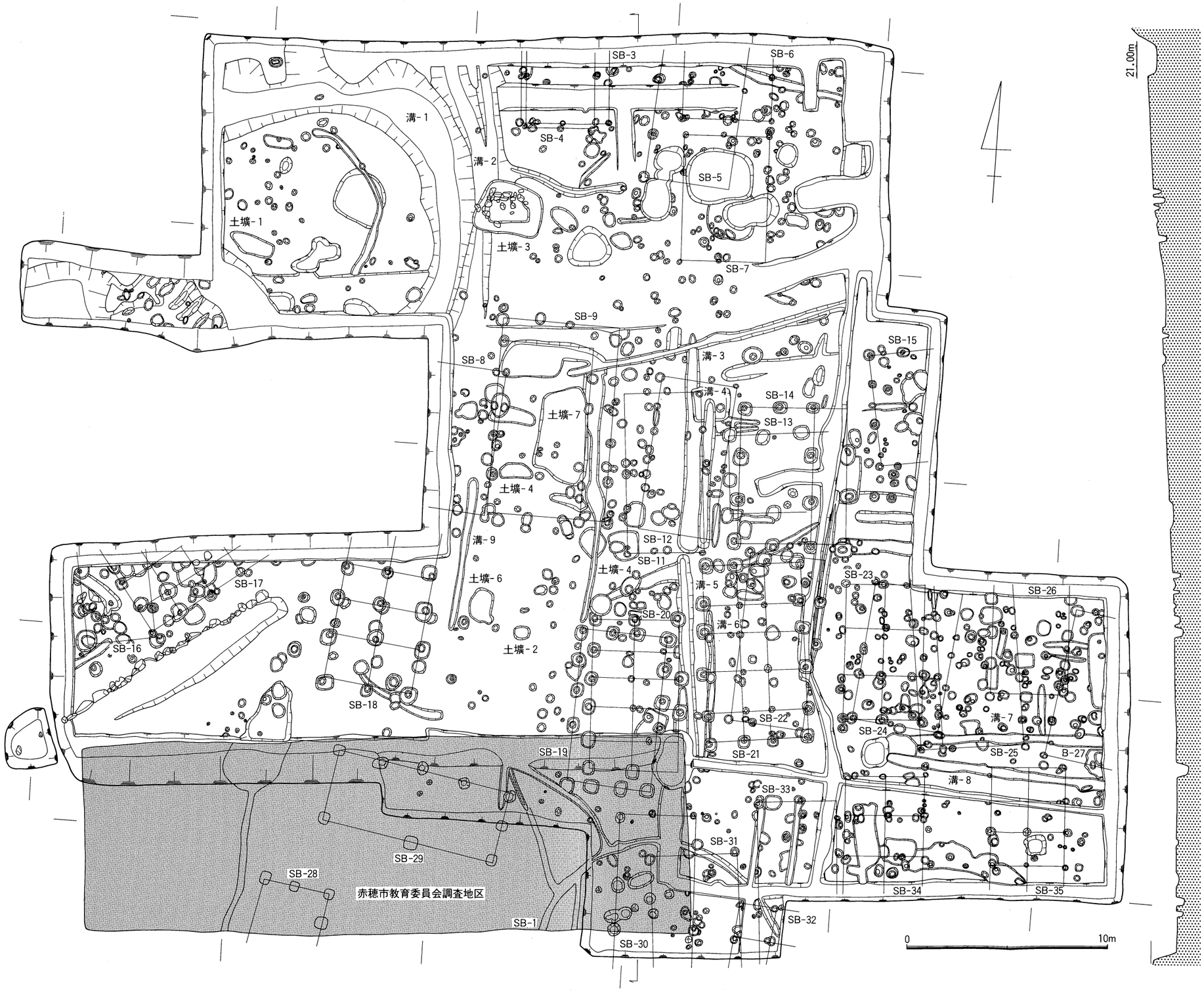
図版 2　調査区西半土層断面図



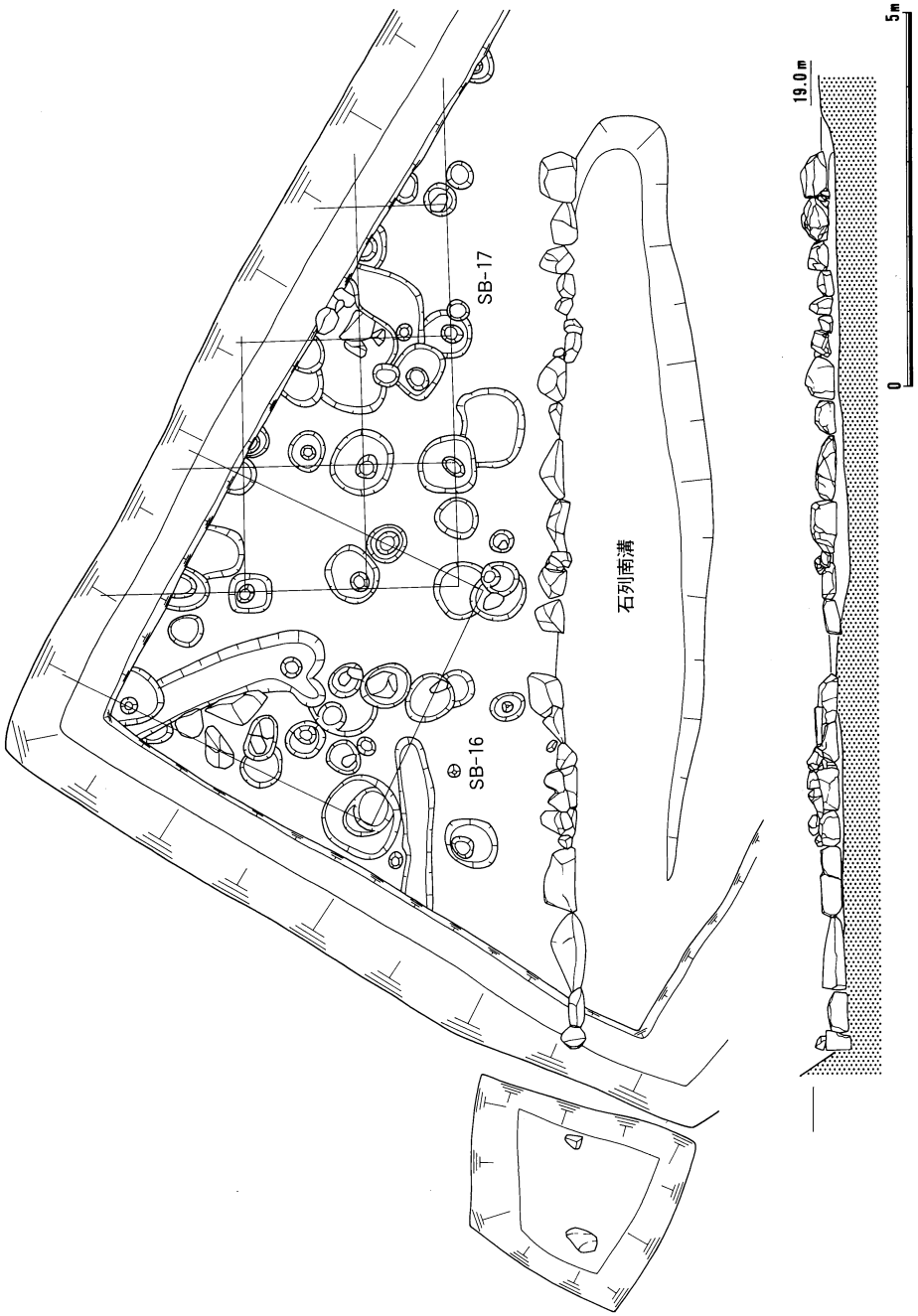
図版 3　調査区東半土層断面図



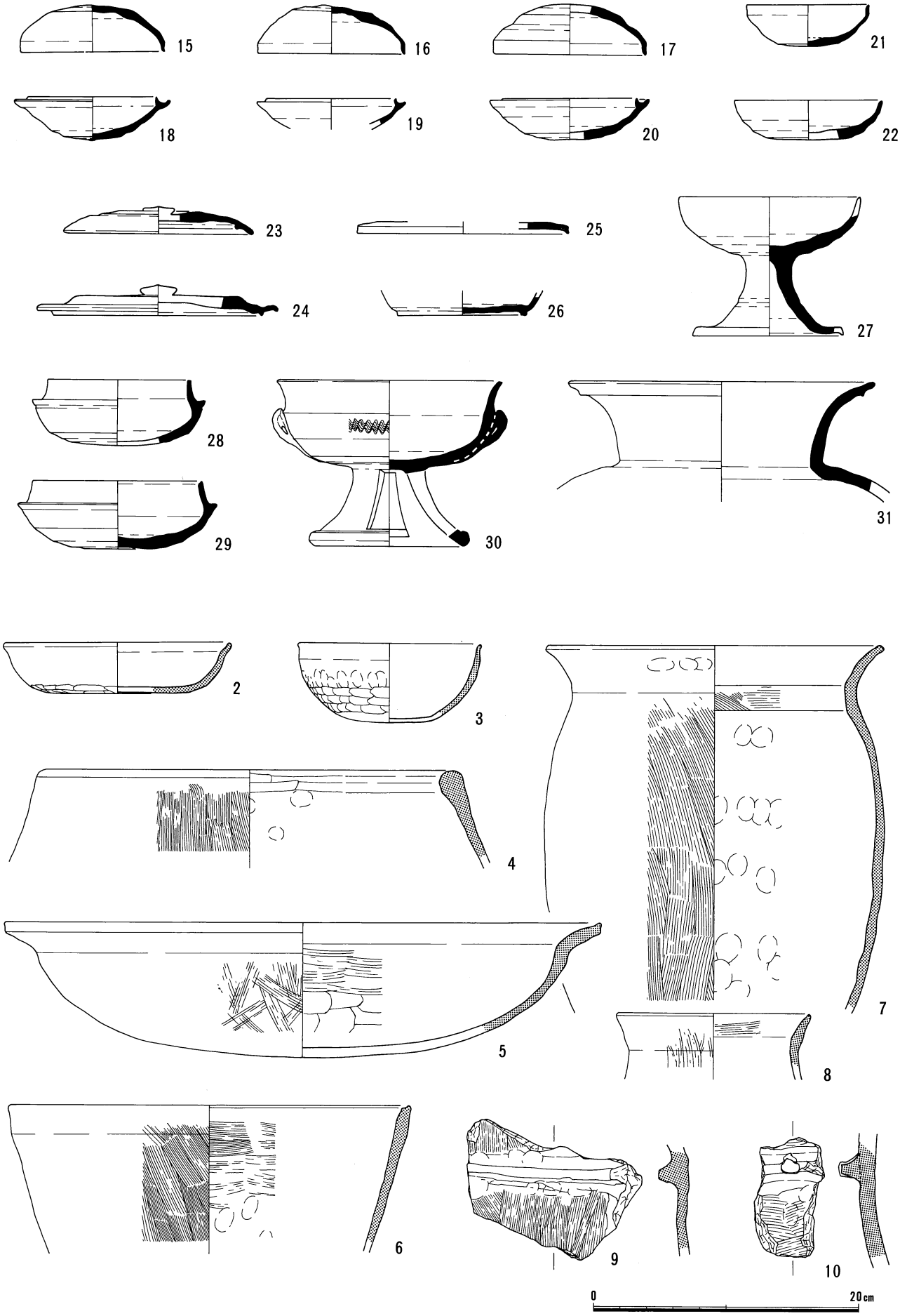
図版4　遺構全図


21.00m
SB-3
SB-6
溝-1
SB-4
溝-2
SB-5
土壙-1
土壙-3
SB-7
SB-9
SB-15
SB-8
溝-3
溝-4
SB-14
土壙-7
SB-13
土壙-4
溝-9
SB-12
SB-11
土壙-4
SB-23
SB-26
SB-17
土壙-6
溝-5
SB-20
溝-6
SB-16
土壙-2
SB-18
SB-22
溝-7
SB-24
SB-19
SB-21
SB-25
B-27
溝-8
SB-33
SB-31
SB-29
SB-28
赤穂市教育委員会調査地区
SB-34
SB-35
SB-1
SB-32
SB-30
0
10m

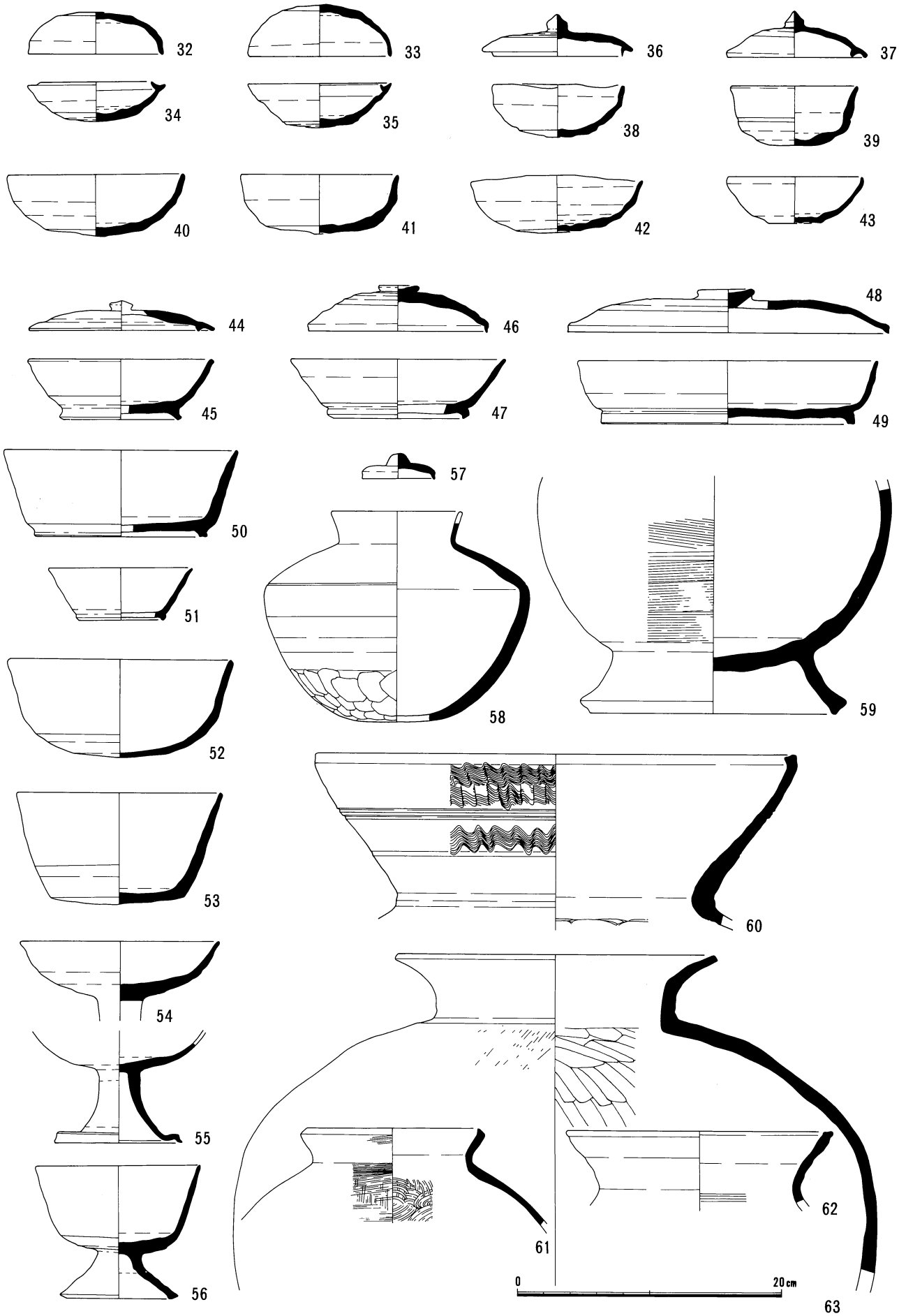
図版 5　石列関連遺構図



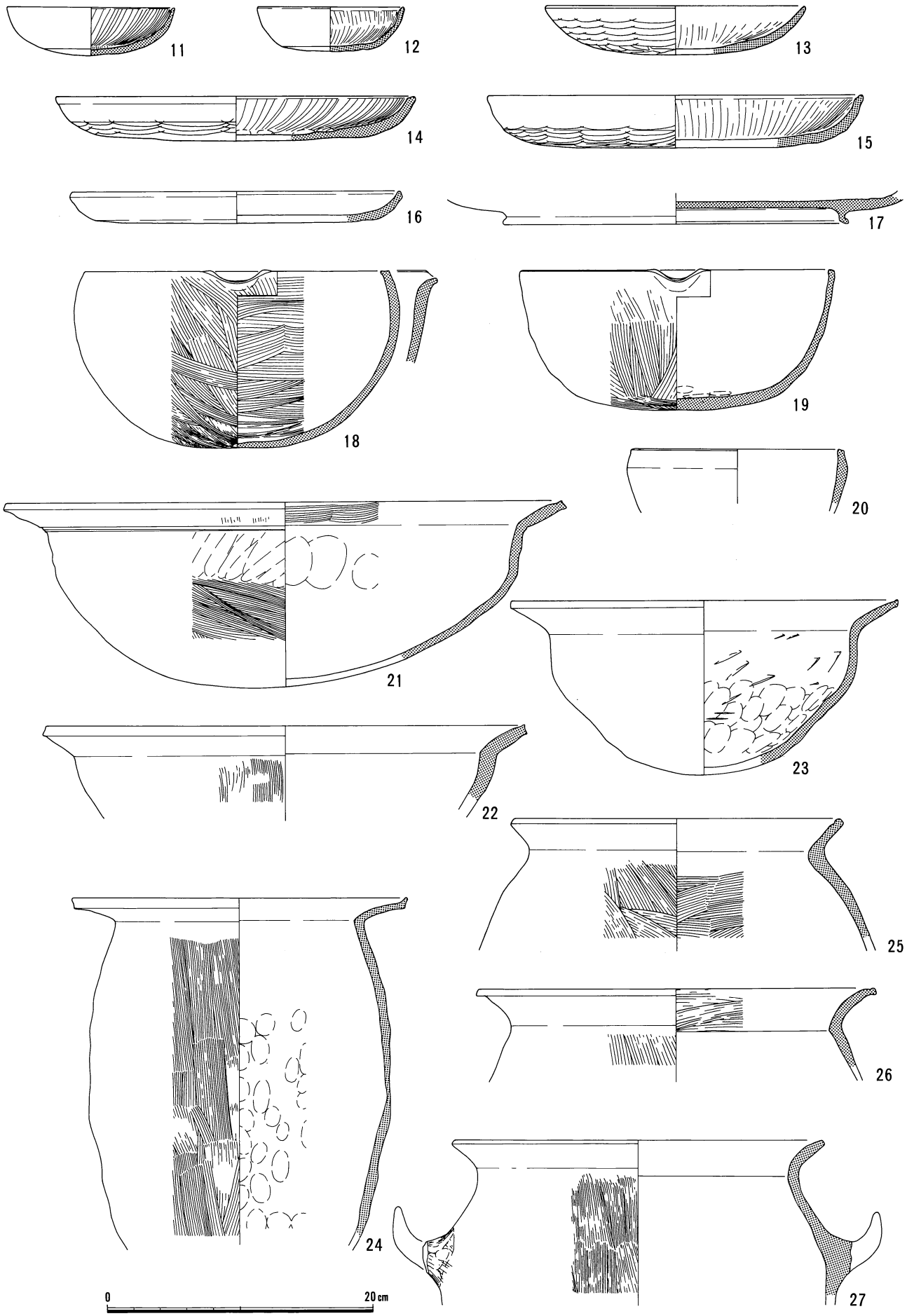
図版6　溝－1出土土器



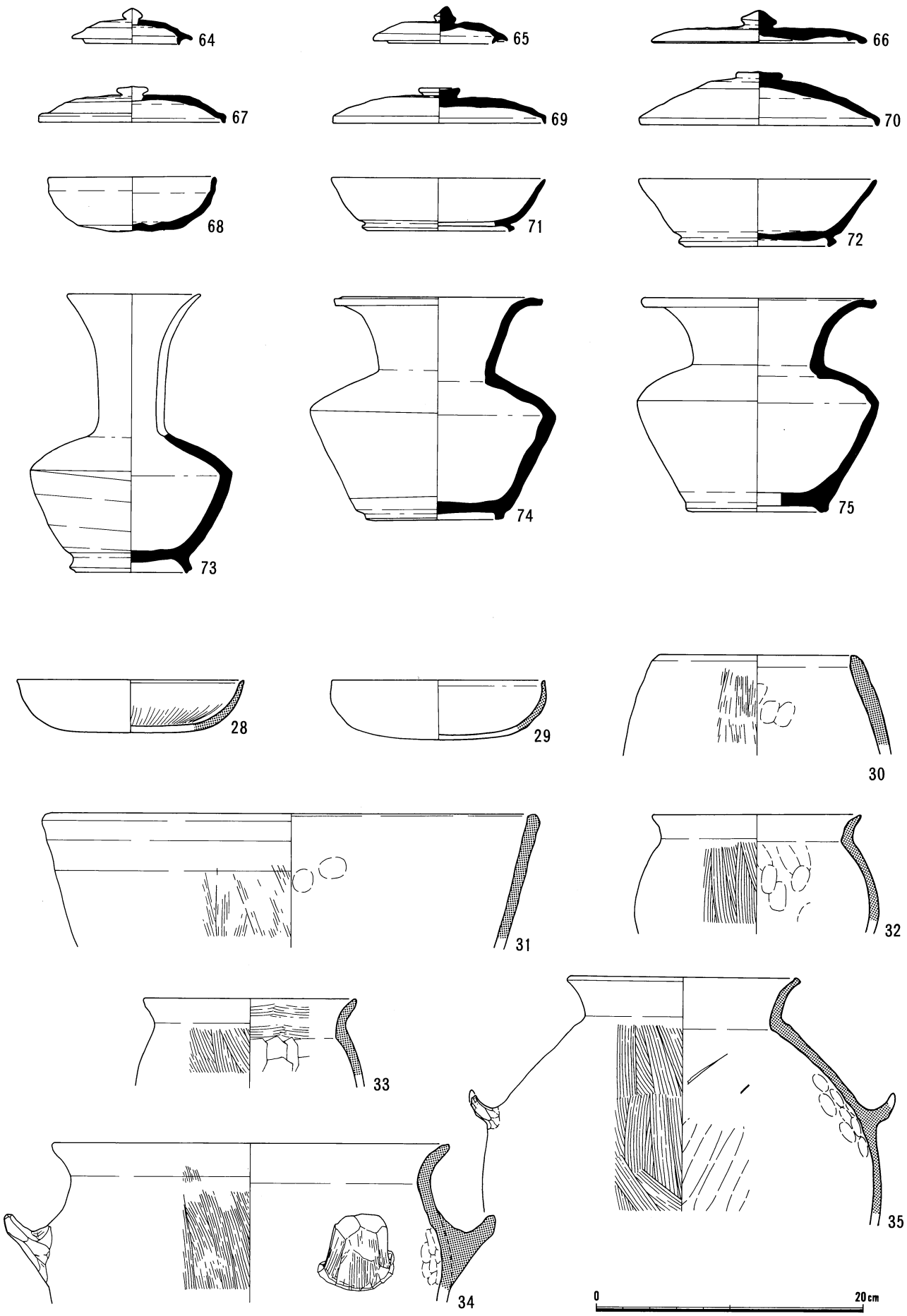
図版７　溝－２出土須恵器


32
33
36
37
34
35
38
39
40
41
42
43
44
46
48
45
47
49
50
57
51
58
59
52
53
60
54
55
56
61
62
63
0
20cm

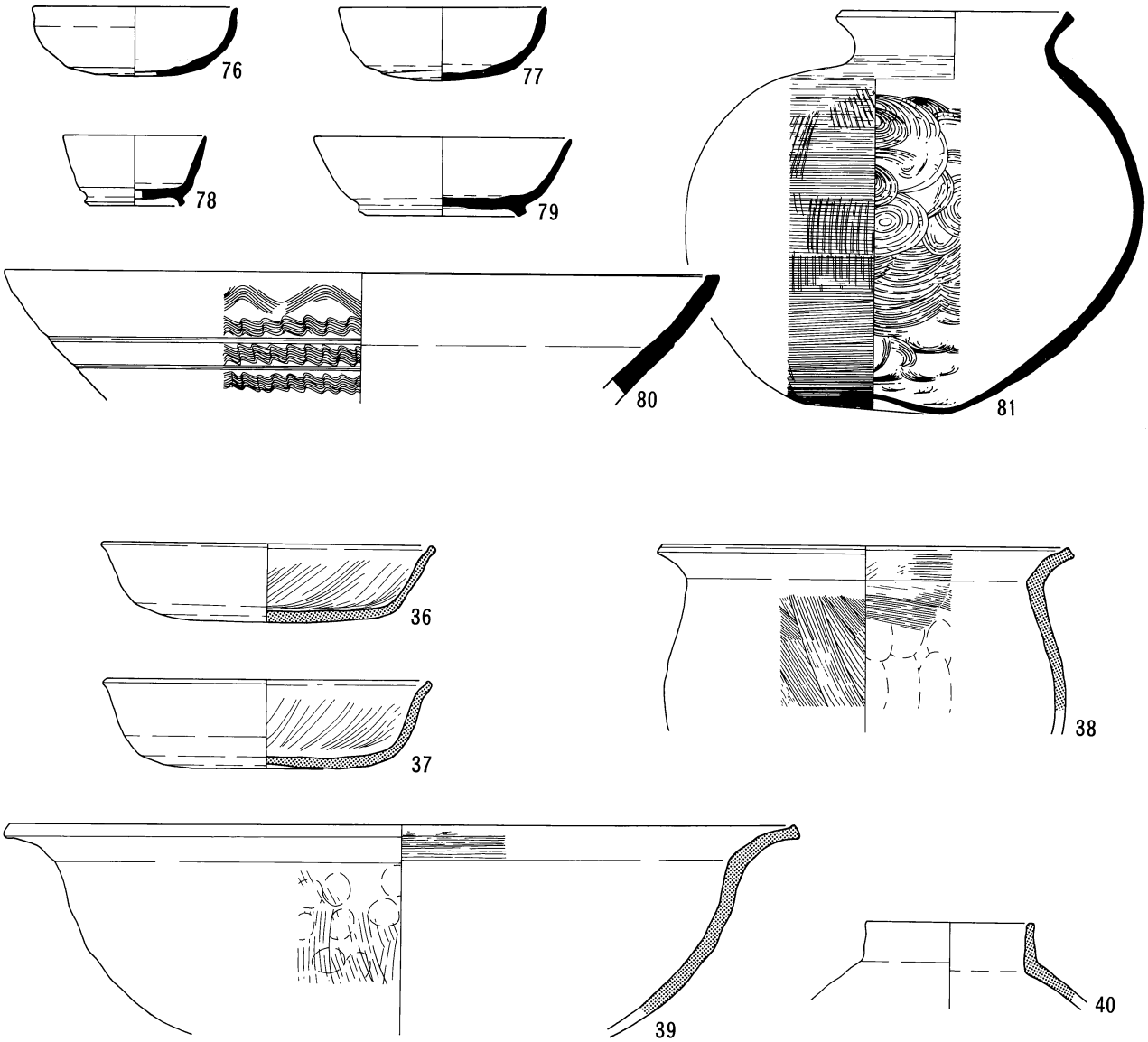
図版 8　溝－2 出土土師器



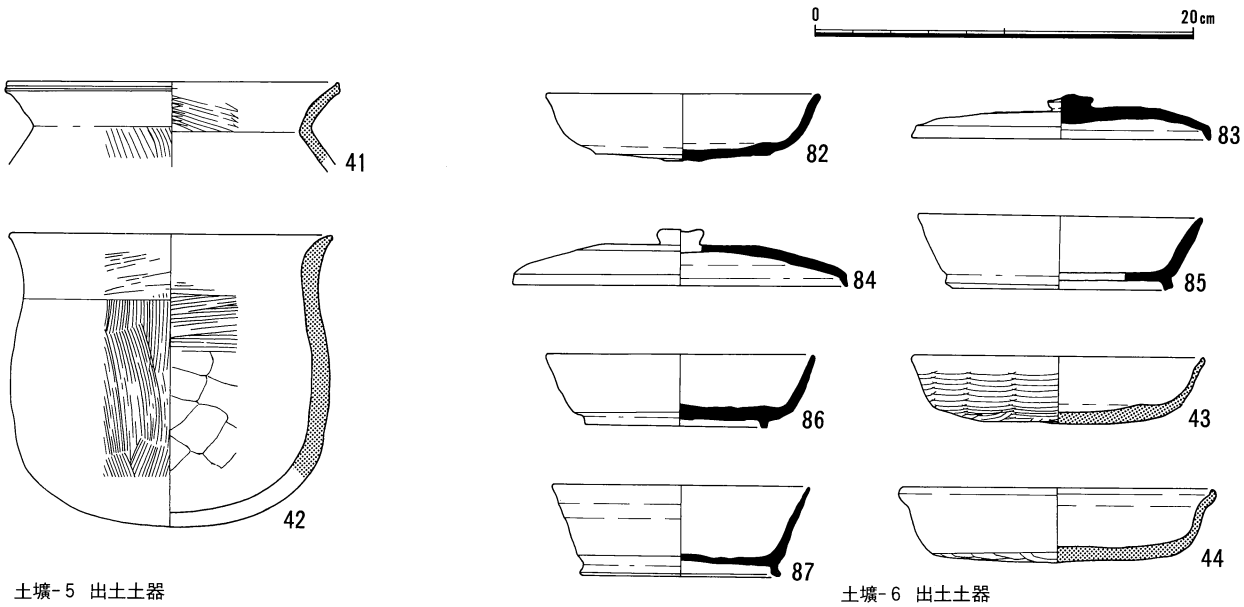
図版 9　土壙－ 3 出土土器



図版10　各土壙出土土器



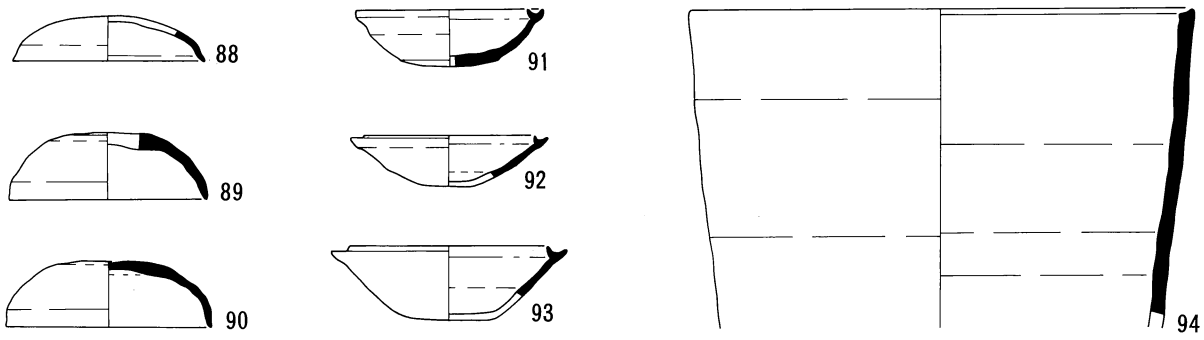
土壙-4　出土土器



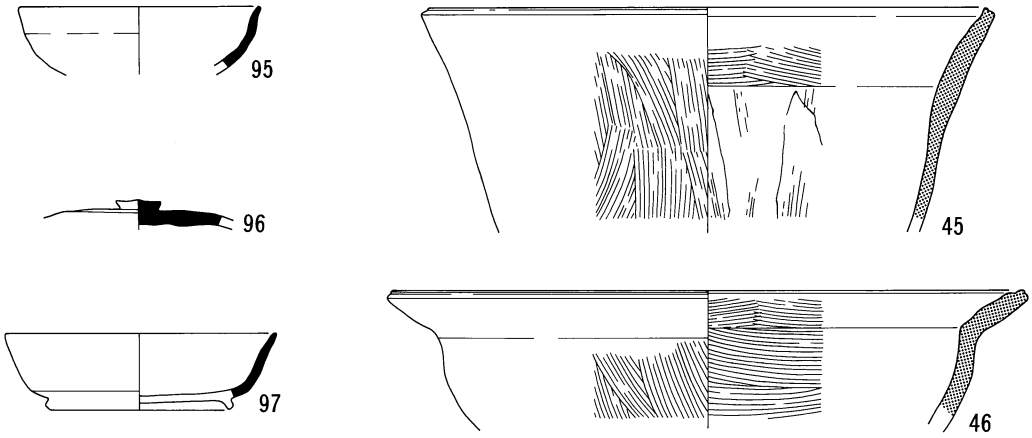
土壙-5　出土土器

土壙-6　出土土器

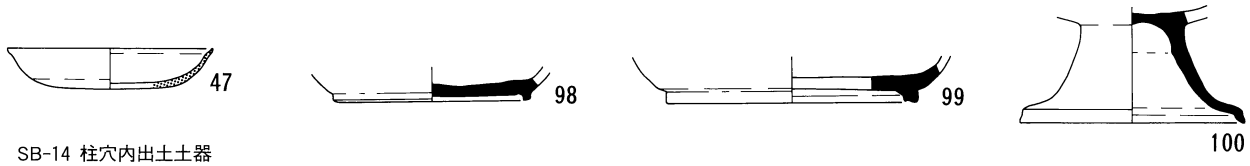
図版11　掘立柱建物址（SB）関連土器－1



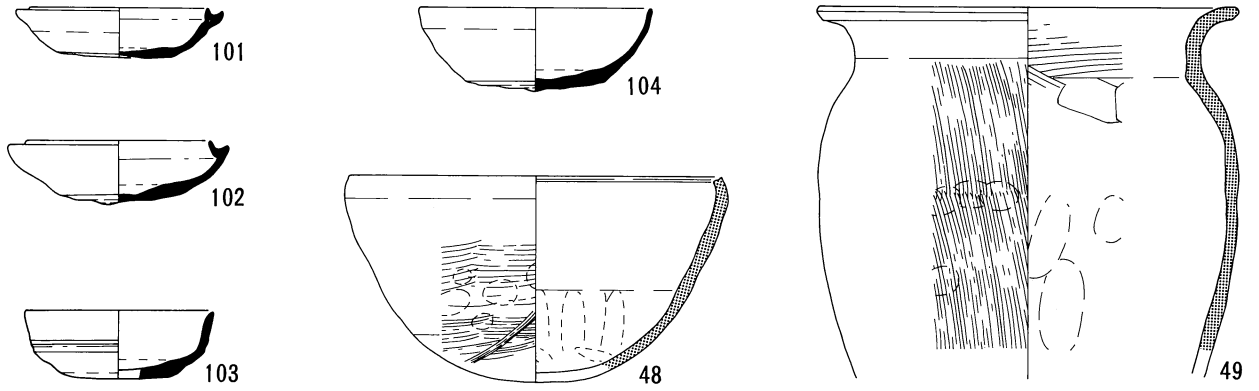
SB-10 雨落溝（溝-3）内出土土器



SB-19 柱穴内出土土器

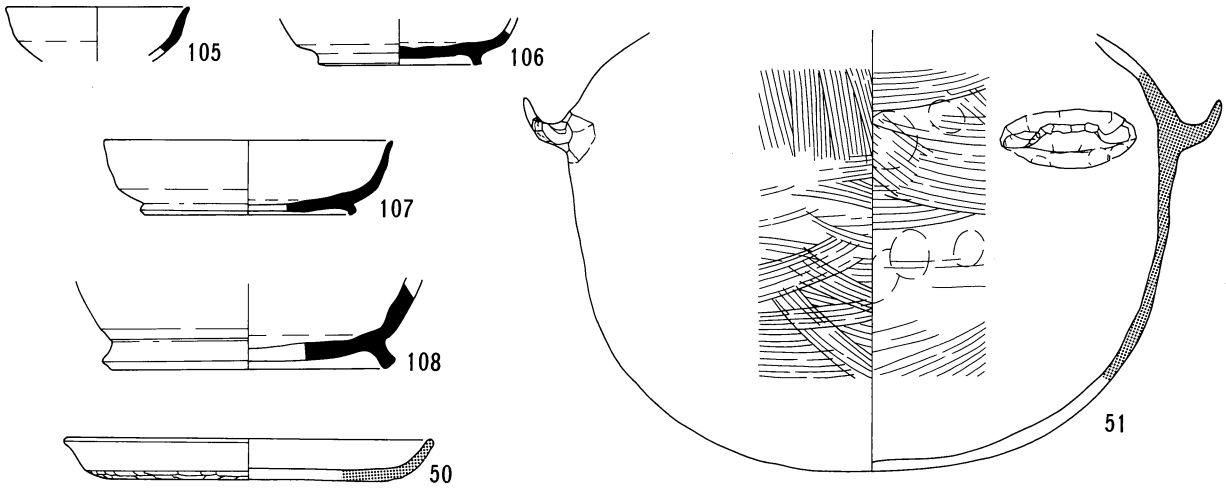


SB-14 柱穴内出土土器

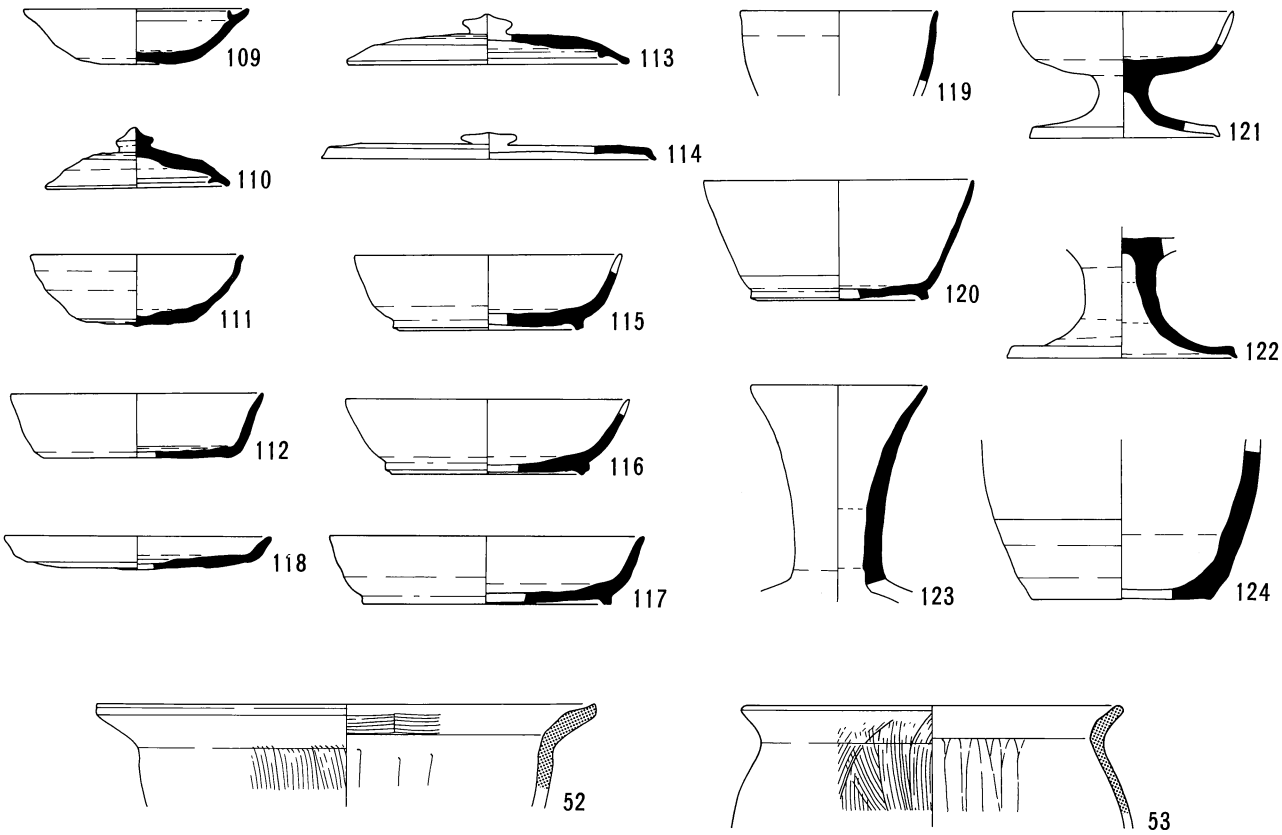


SB-14 雨落溝（溝-4）内出土土器

図版12　掘立柱建物址（SB）関連土器－2

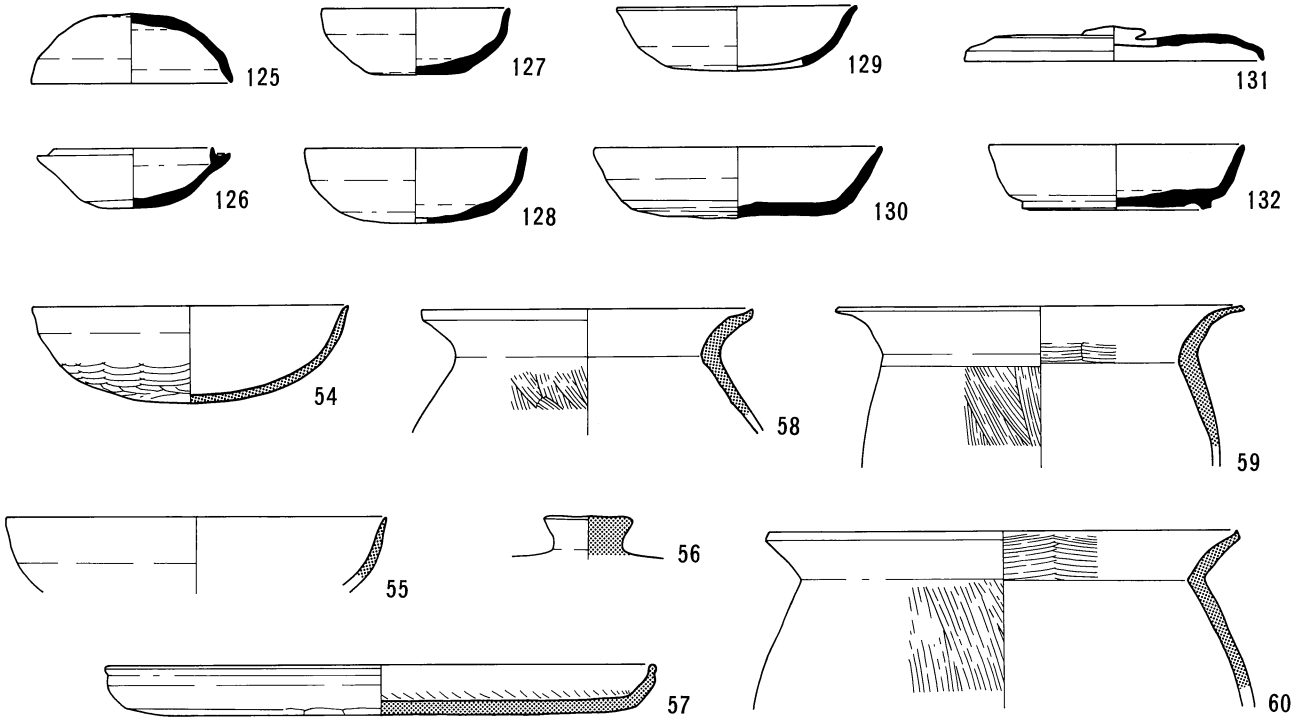


SB-21 柱穴内出土土器

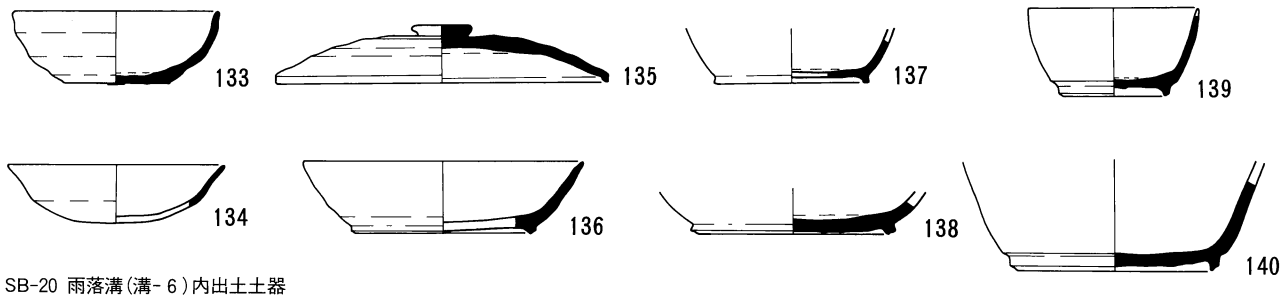


SB-21 雨落溝内出土土器

0　20cm



SB-20 柱穴内出土土器



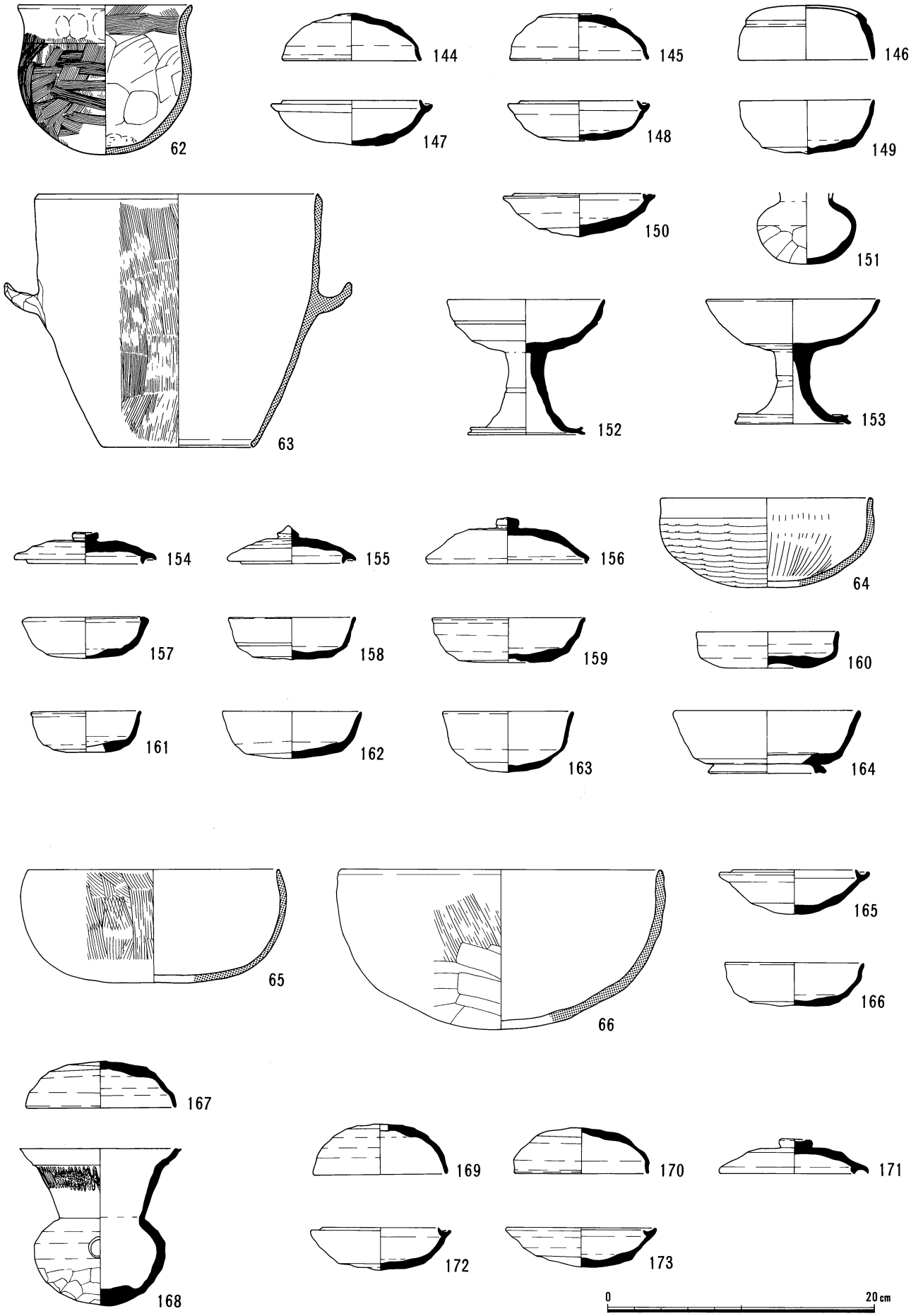
SB-20 雨落溝（溝-6）内出土土器

SB-18 柱穴内出土土器

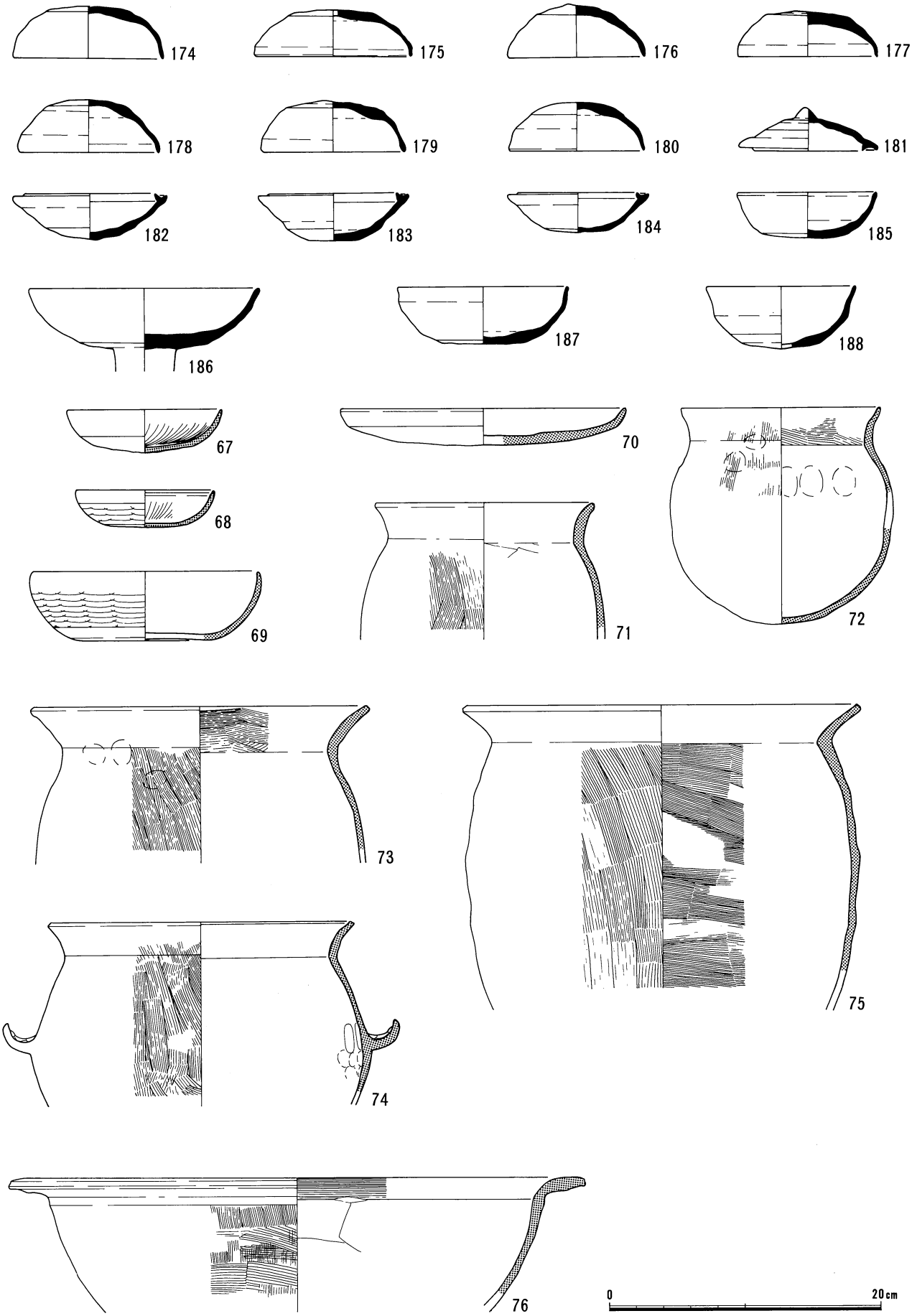
SB-26 柱穴内出土土器

建物にならない柱列（SB-13）柱穴内出土土器

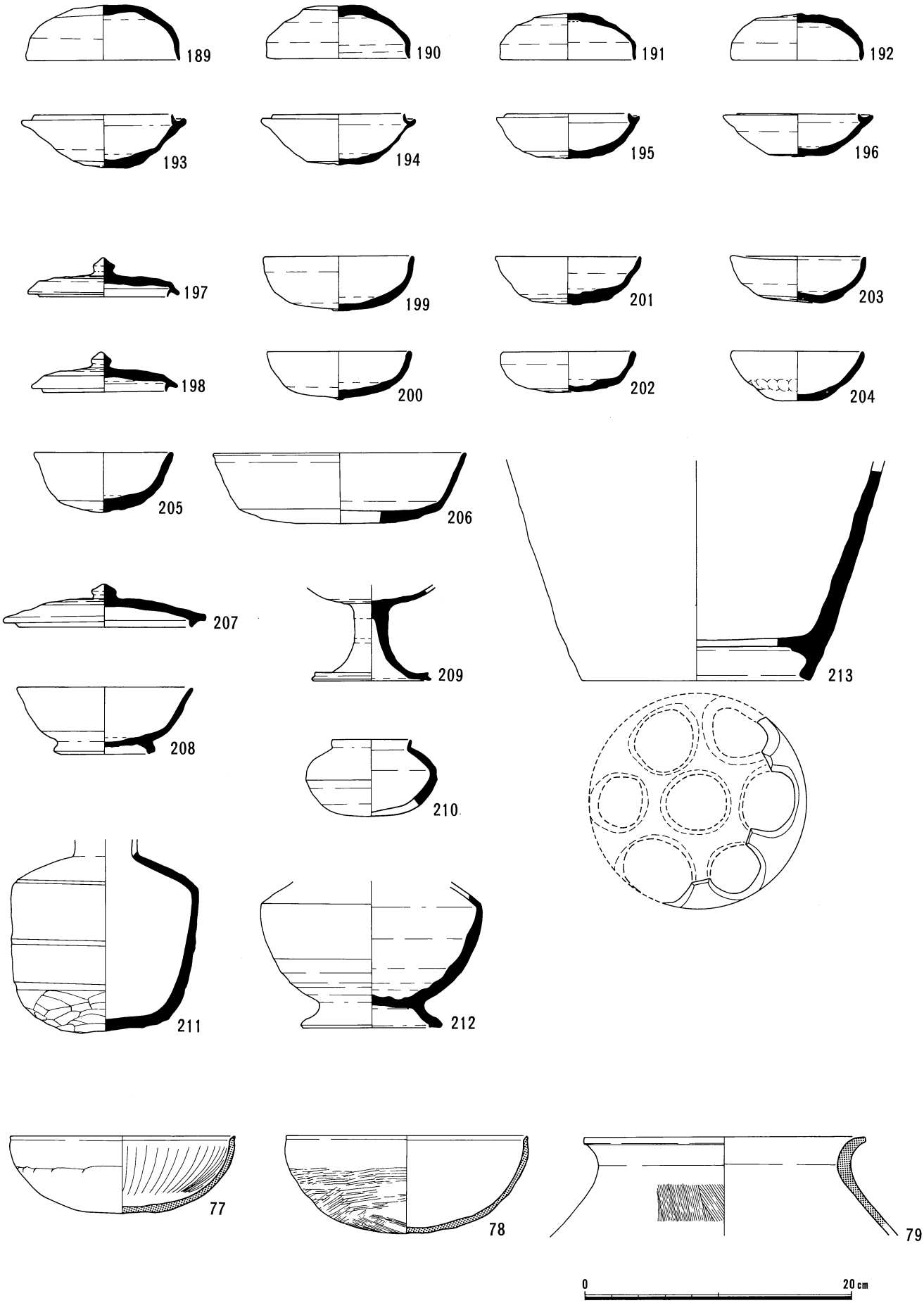
図版14　石列関連土器


62
144
145
146
147
148
149
63
150
151
152
153
154
155
156
64
157
158
159
160
161
162
163
164
65
66
165
166
167
168
169
170
171
172
173
0
20cm

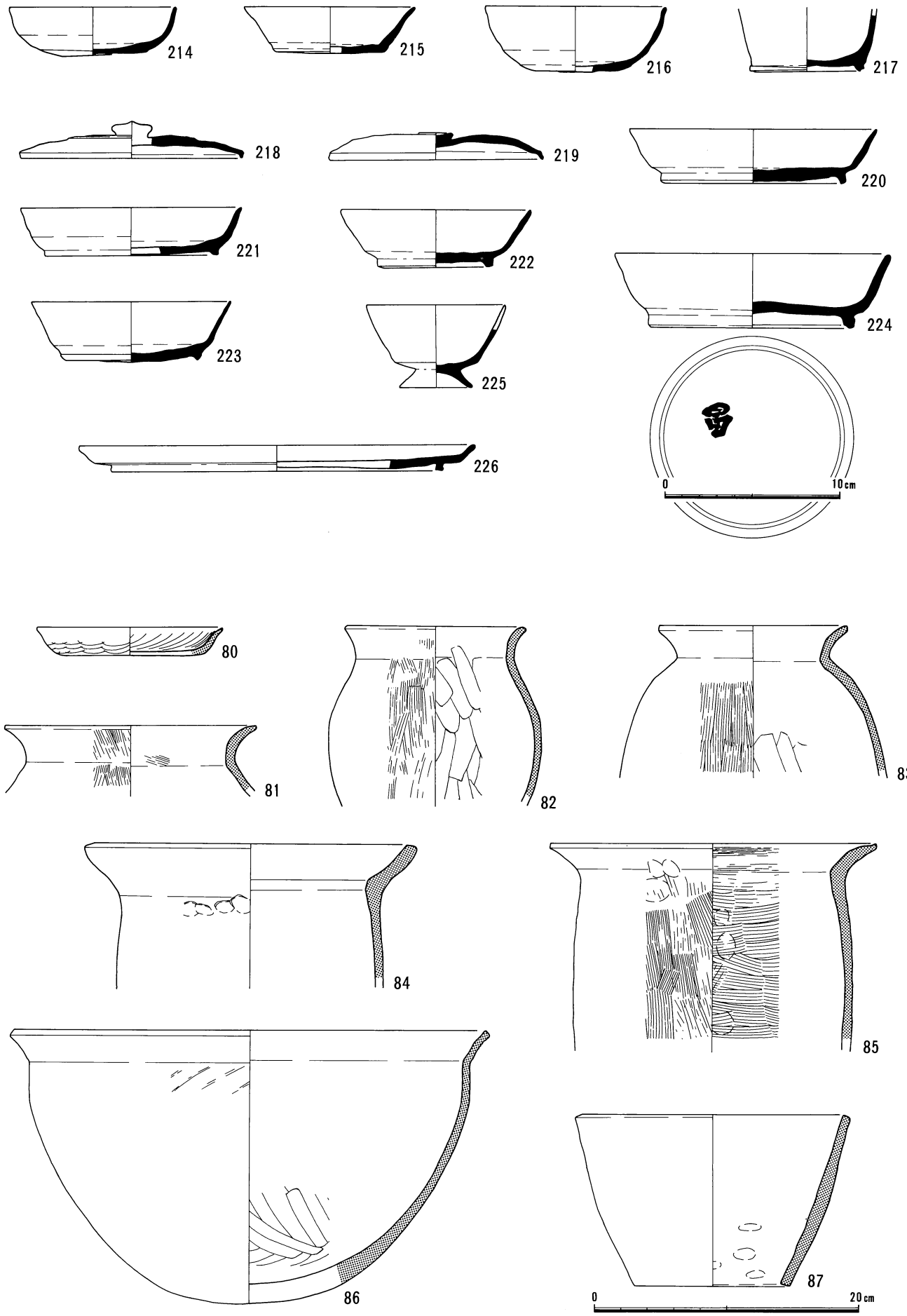
図版15　石列南溝出土土器



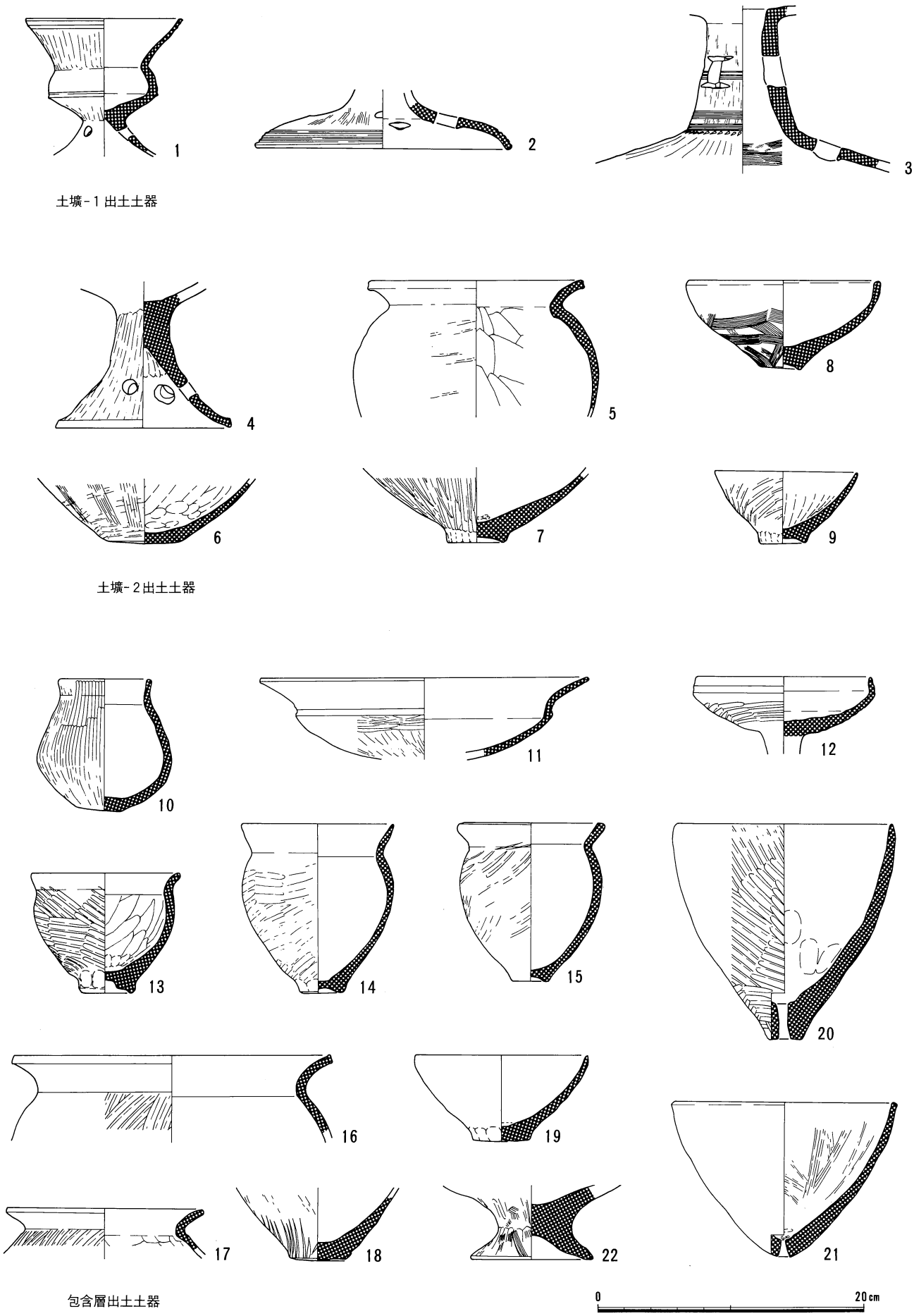
図版16　ピット内出土飛鳥・藤原時代土器



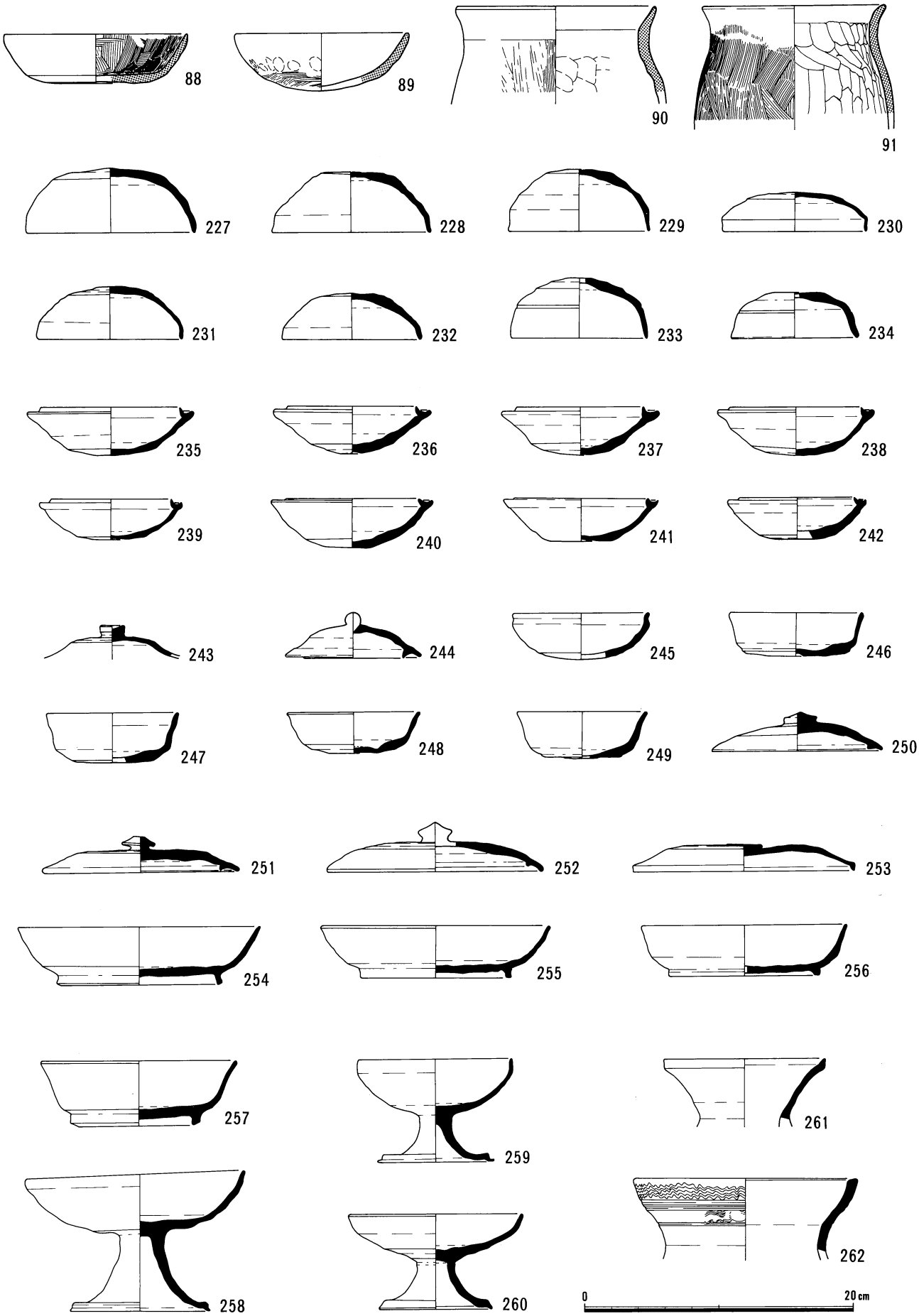
図版17　ピット内出土奈良時代土器



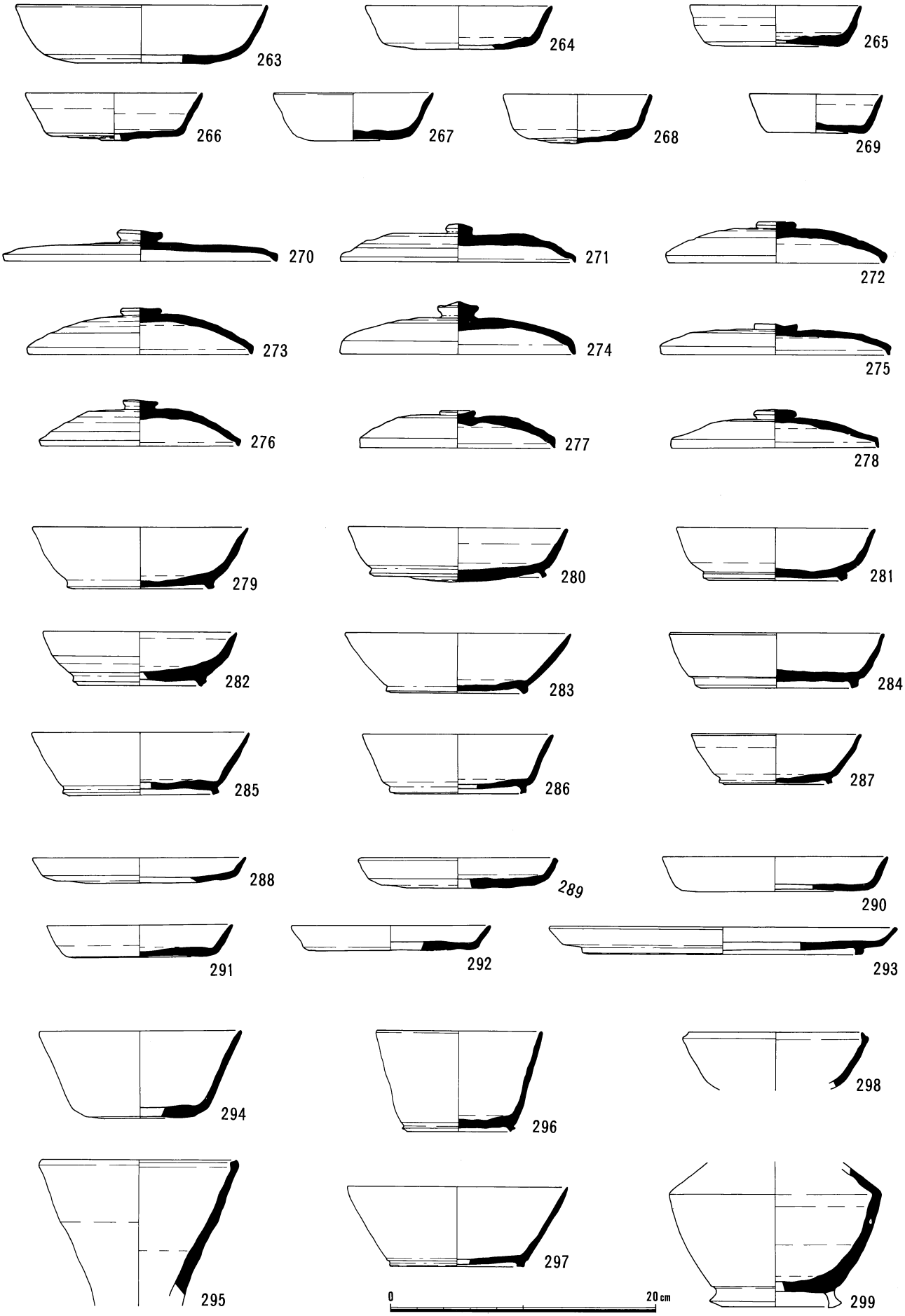
図版18　弥生土器


1
2
3
土壙-1出土土器
4
5
8
6
7
9
土壙-2出土土器
10
11
12
13
14
15
20
16
19
17
18
22
21
包含層出土土器
0
20cm

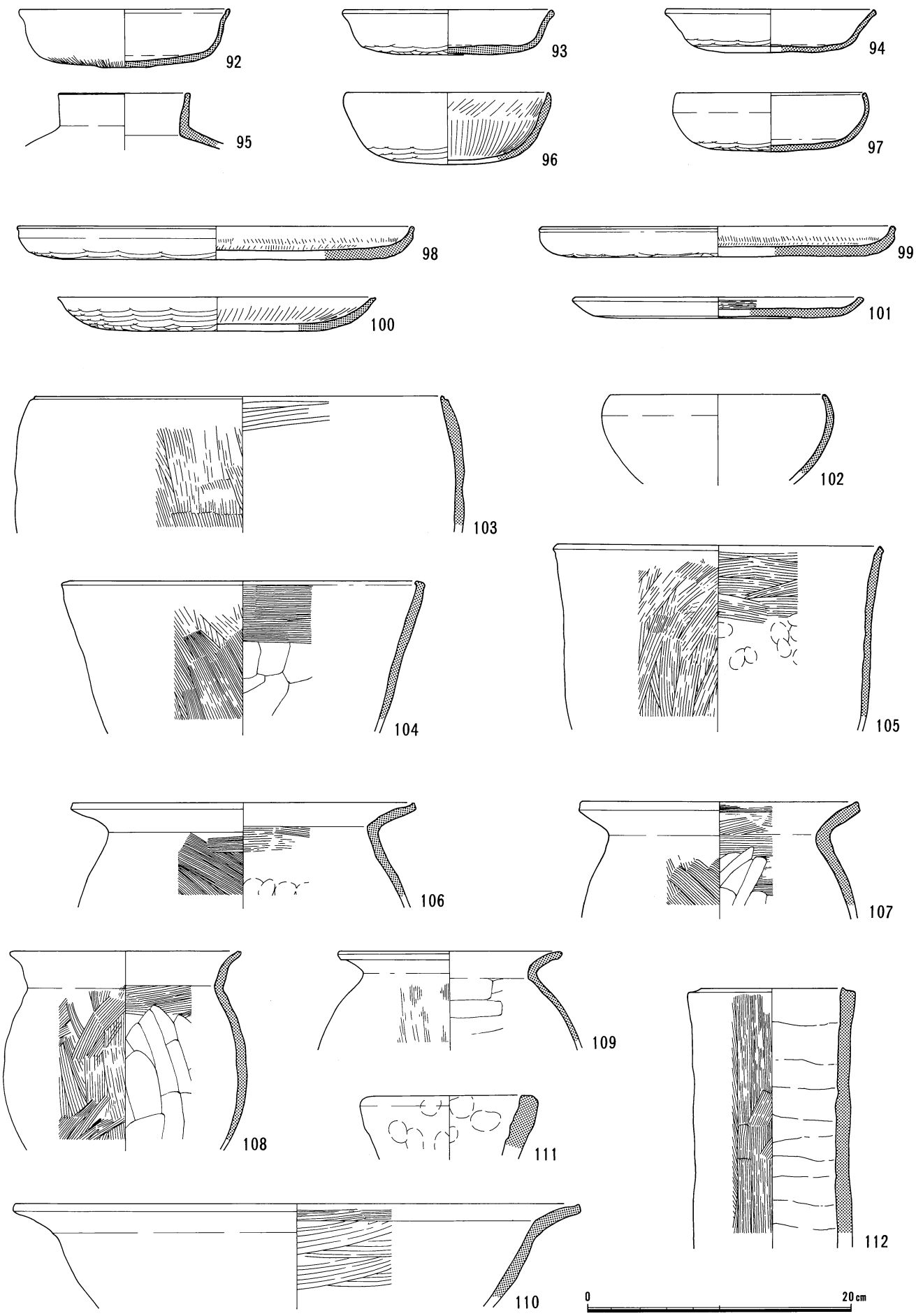
図版19　包含層出土飛鳥・藤原時代土器



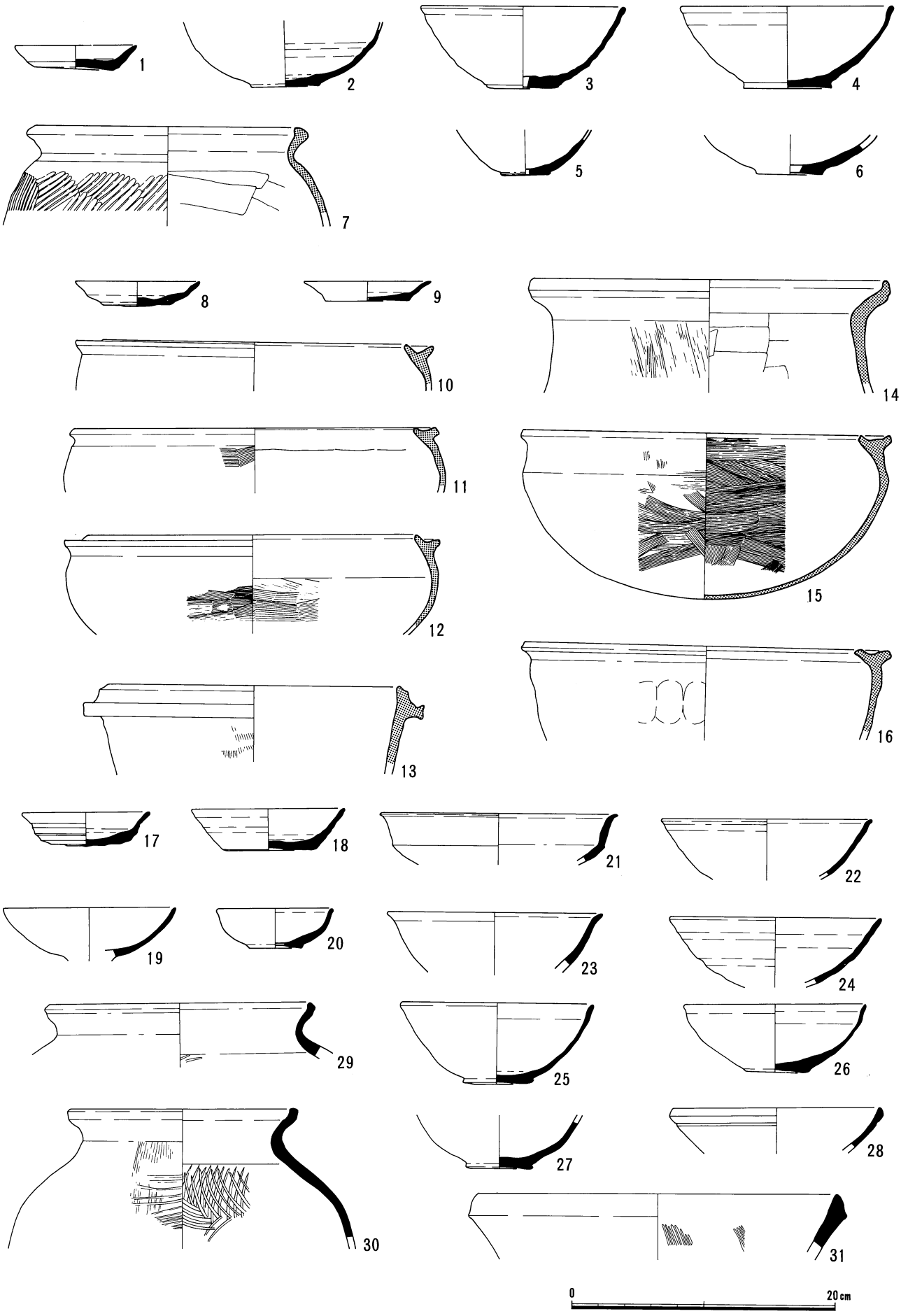
図版20　包含層出土奈良時代須恵器



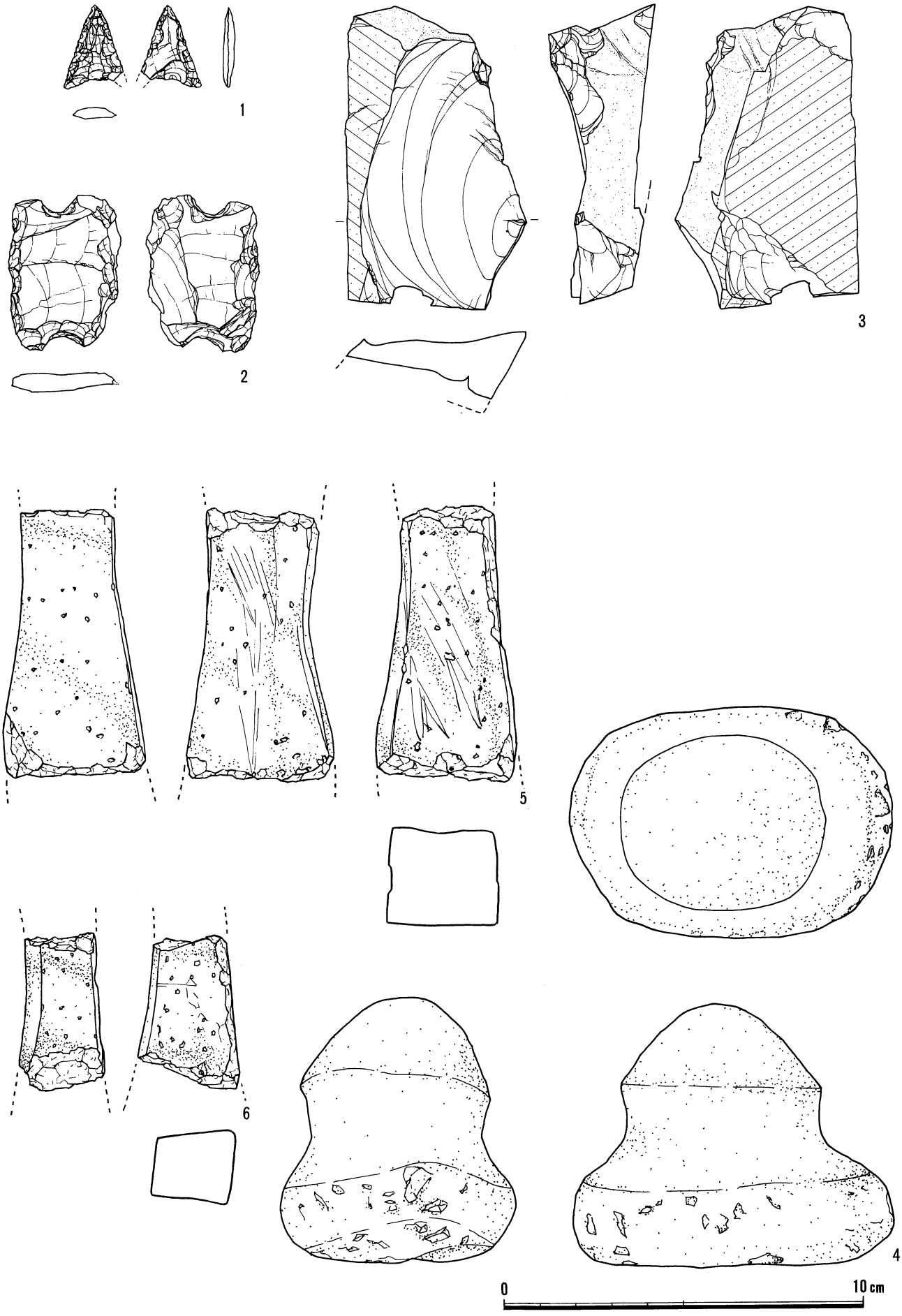
図版21　包含層出土奈良時代土師器



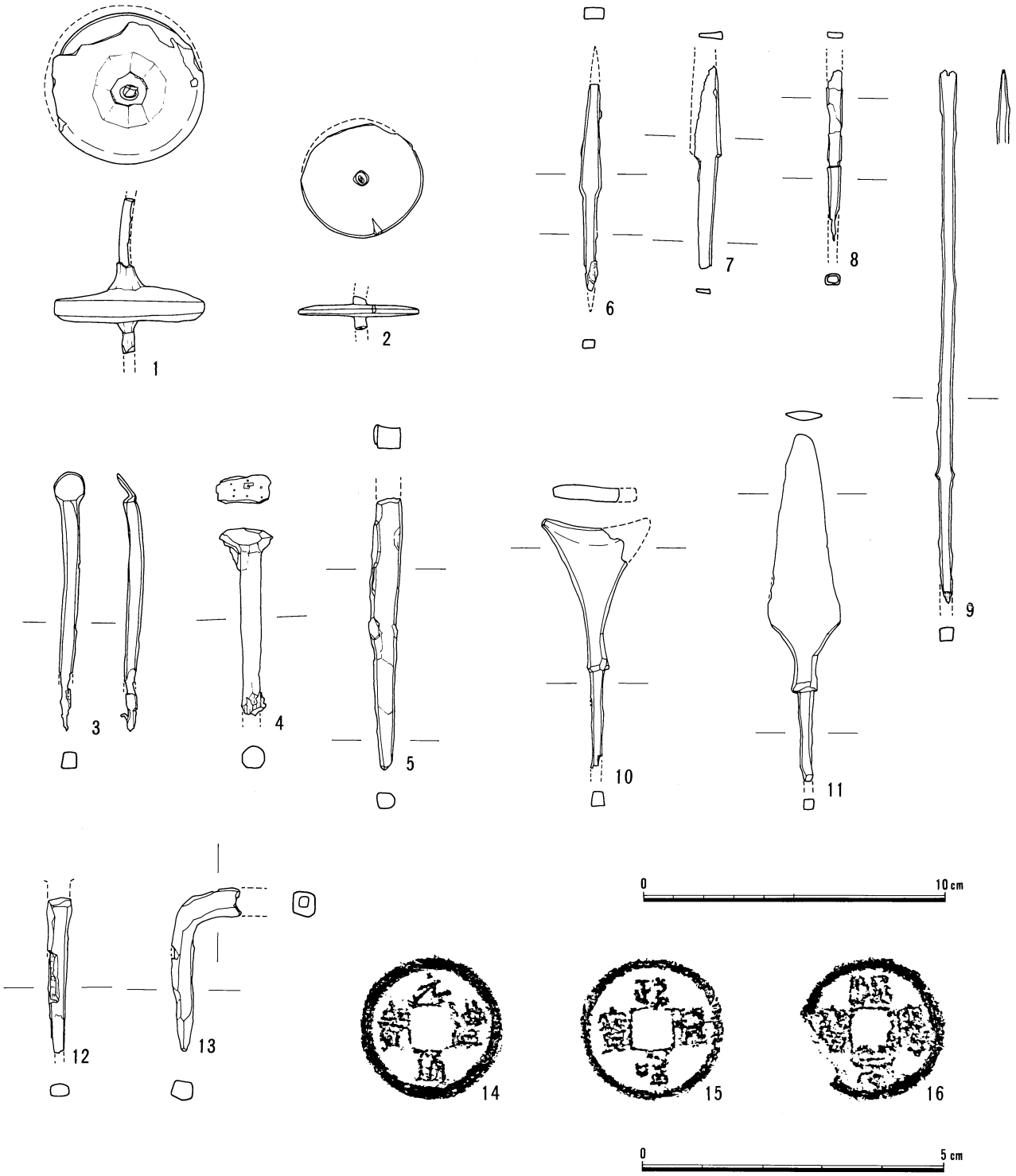
図版22　火葬墓および包含層出土平安時代・中世土器



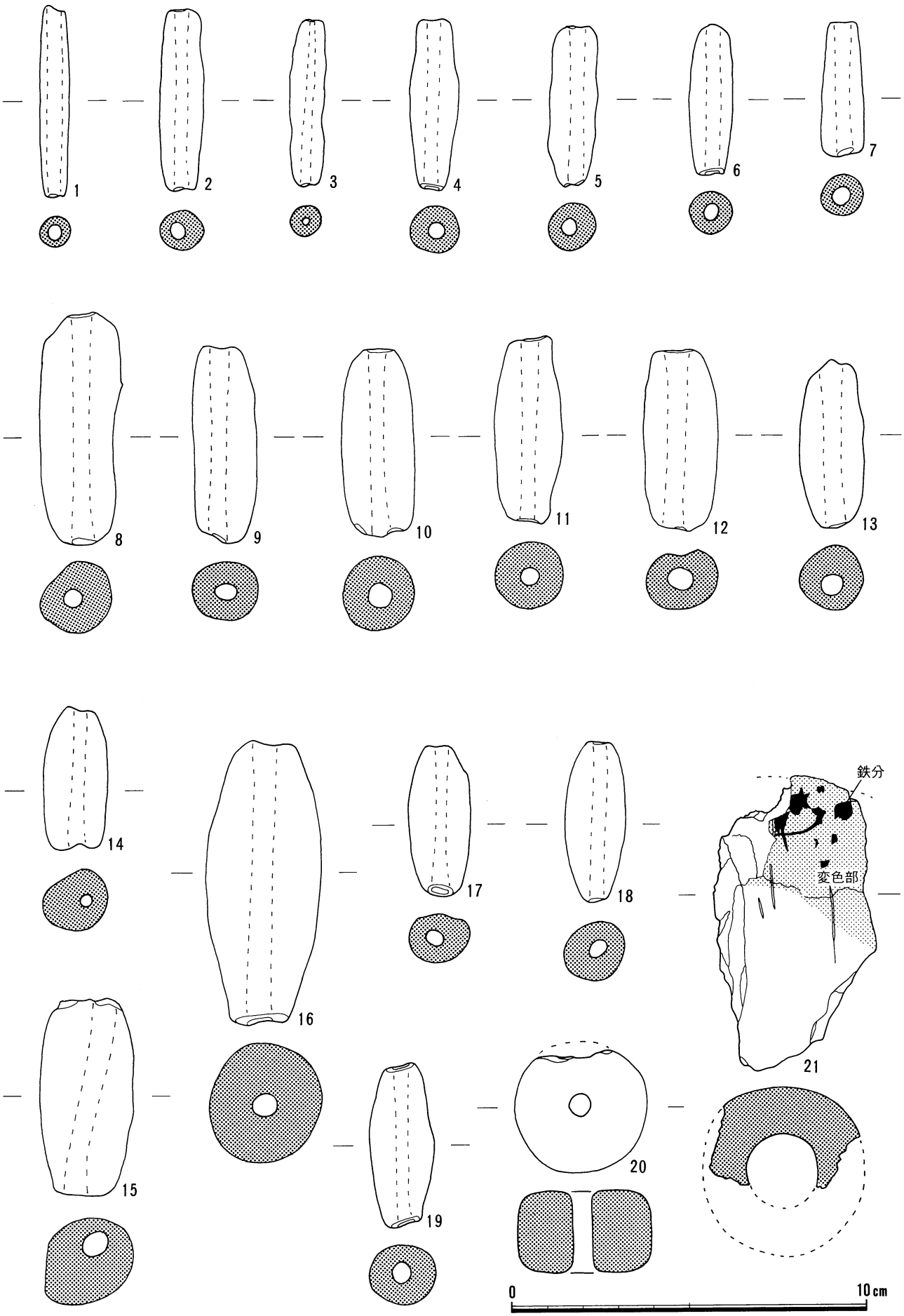
図版23　包含層出土石器



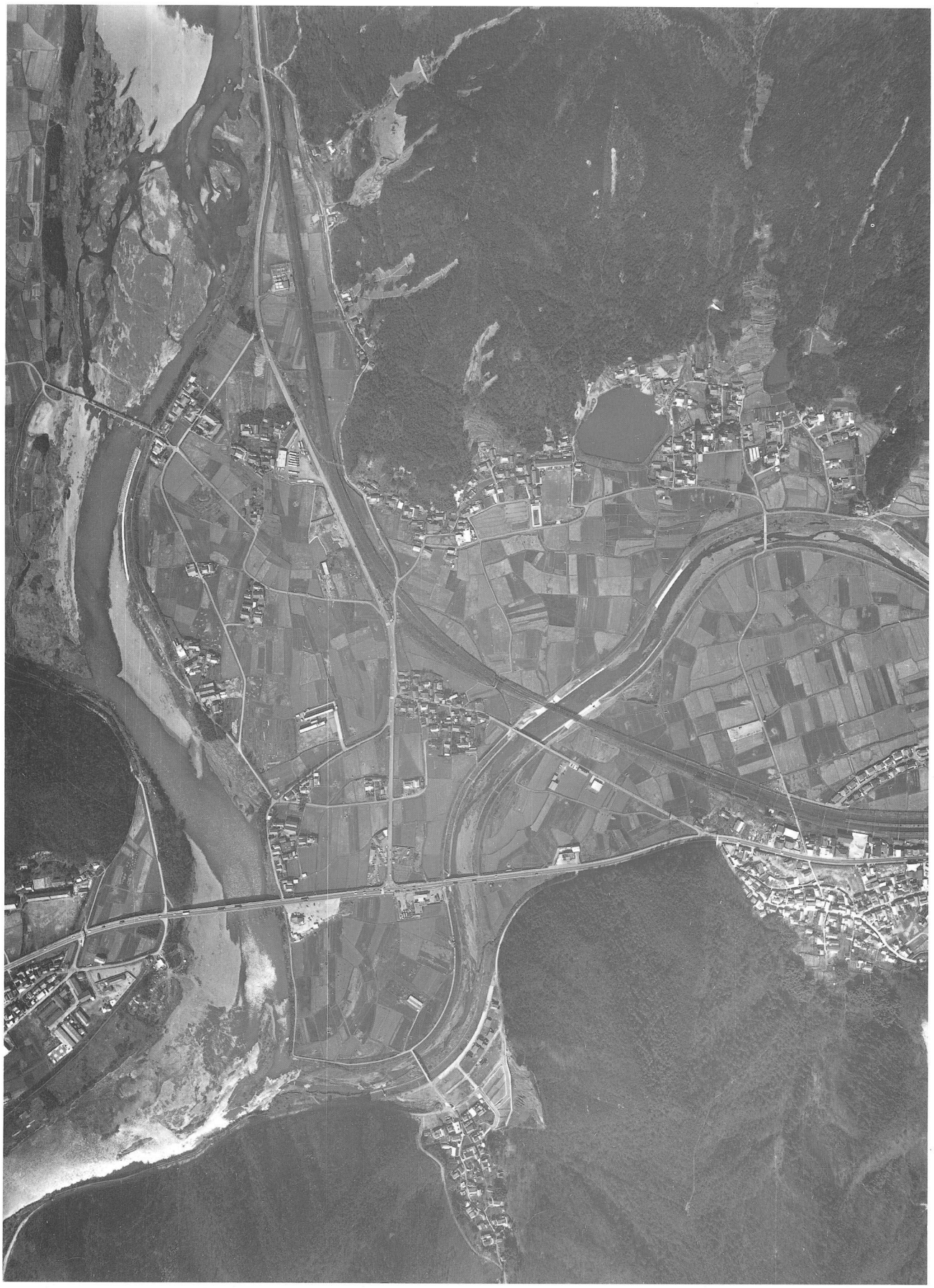
図版24　包含層出土金属製品



図版25　包含層出土土製品

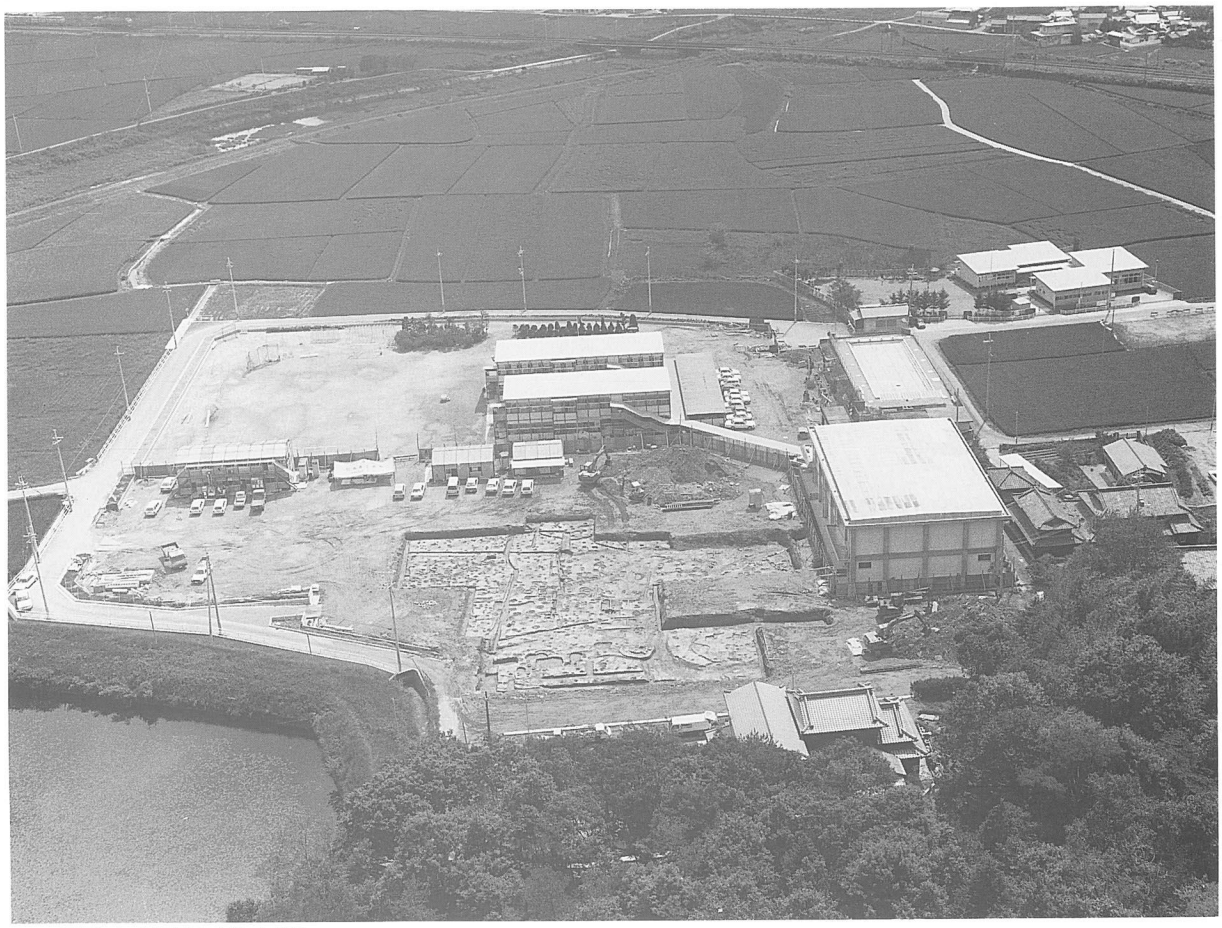


図版26

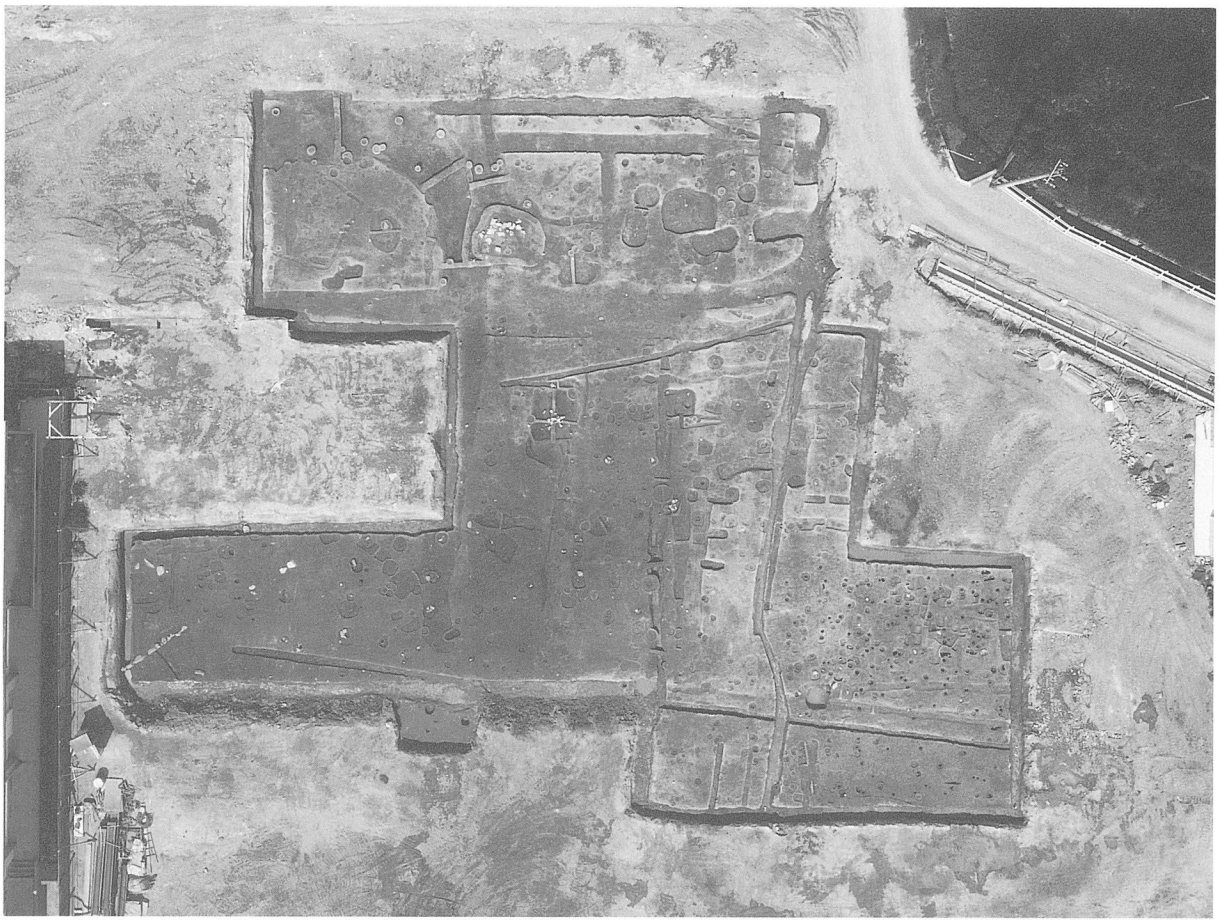


遺跡周辺空中写真

遺跡空中写真（南より）

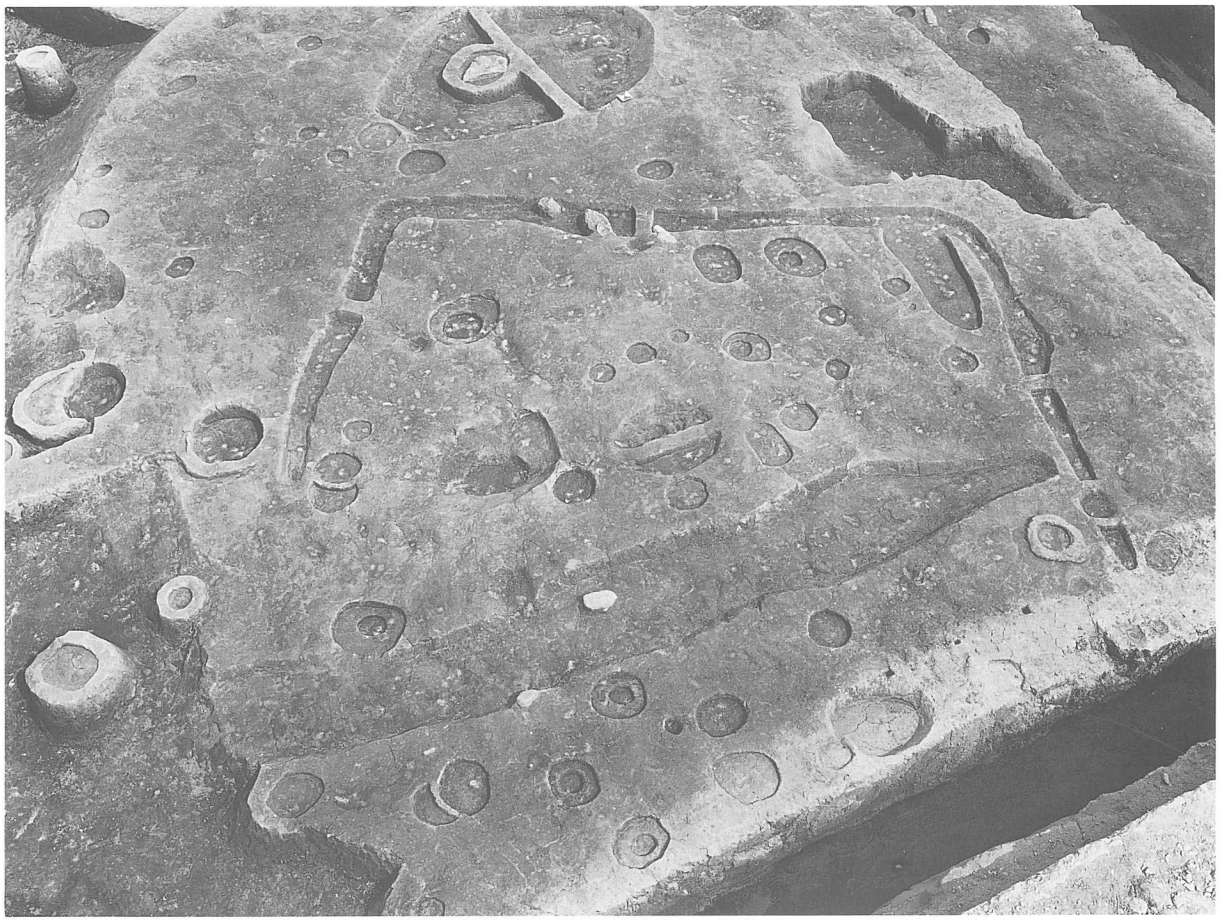


遺跡空中写真（北より）



第 2 遺構面空中写真（垂直）

第 3 遺構面空中写真（垂直）

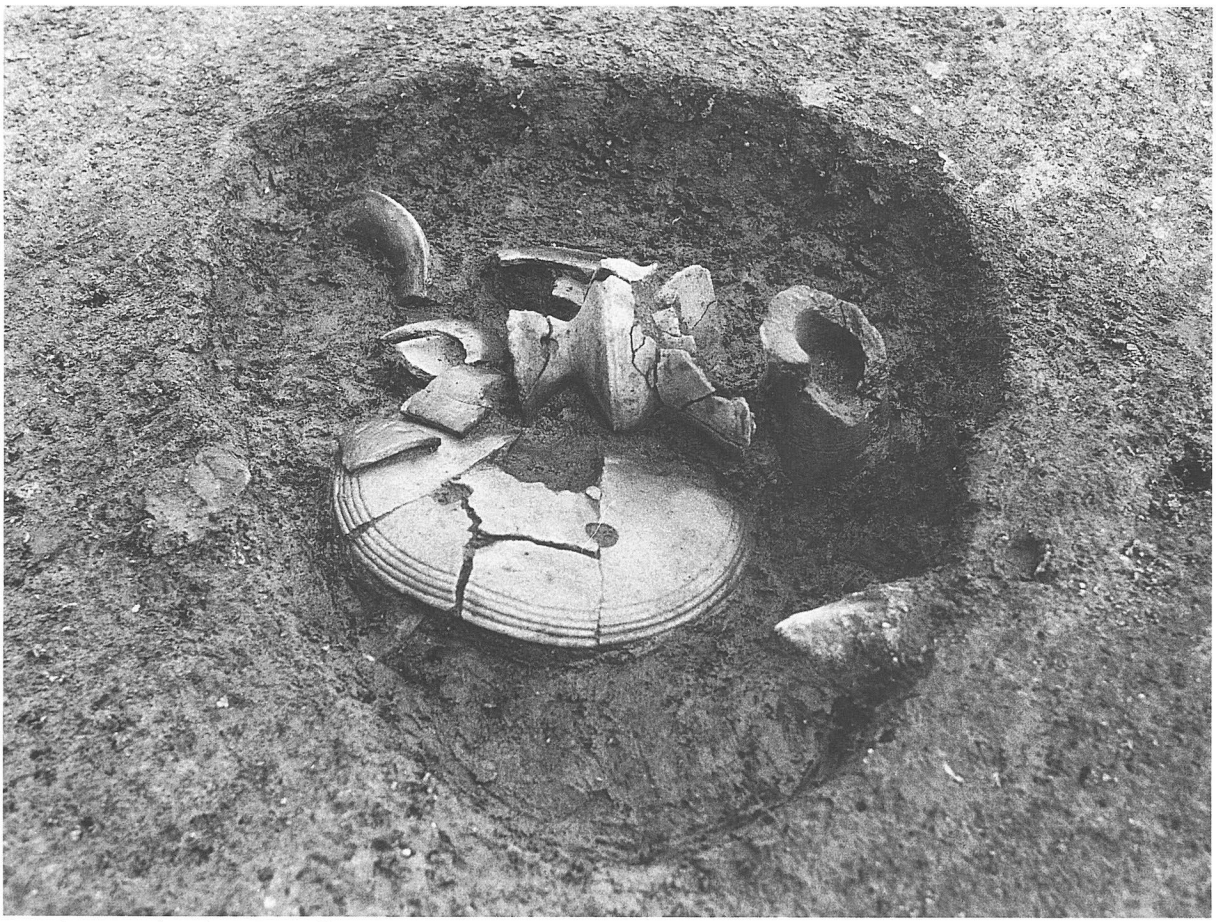


B－１区弥生時代後期遺構面（西より）

B－１区最終遺構面全景（西より）

図版30

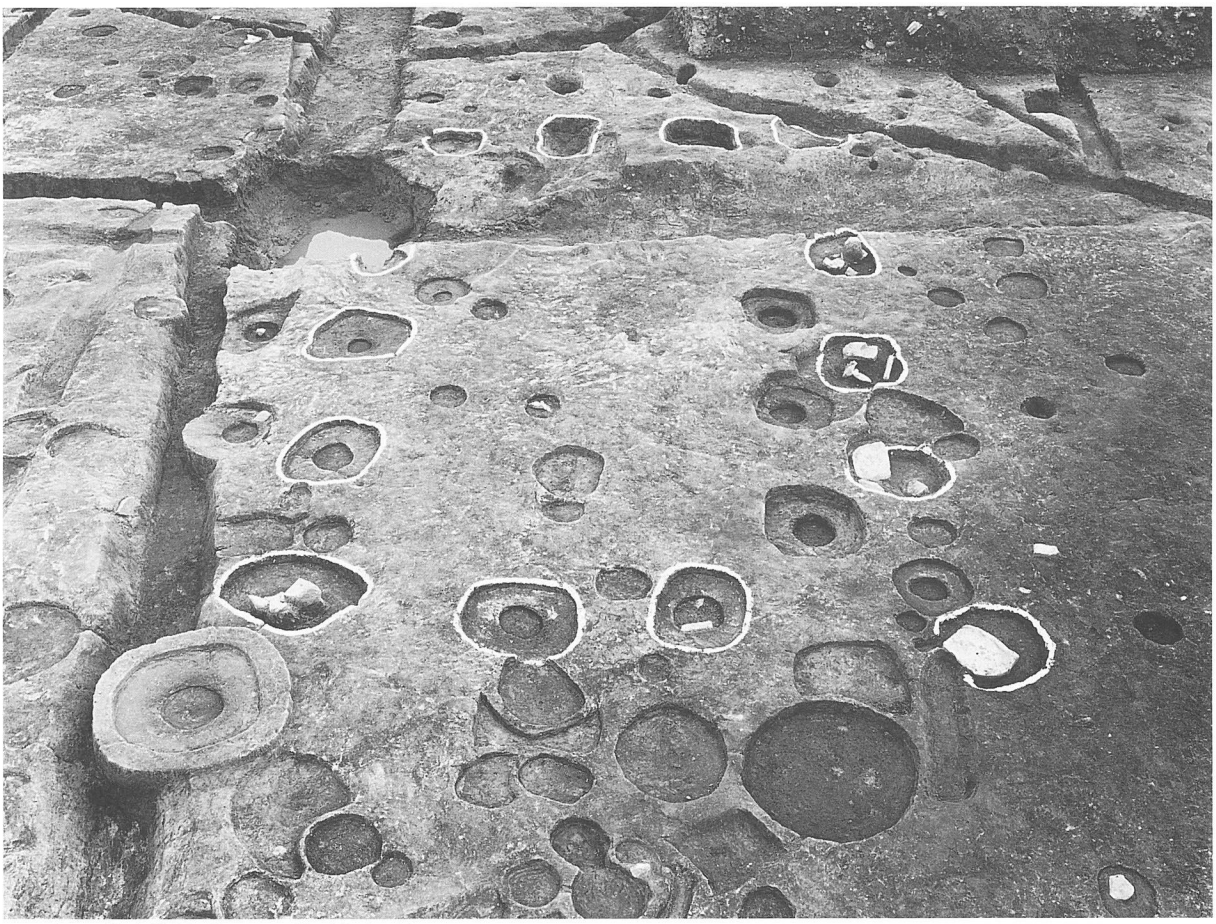
竪穴住居址［SB－１］と掘立柱建物址［SB－30］（南より）



土坑－２内弥生土器出土状況

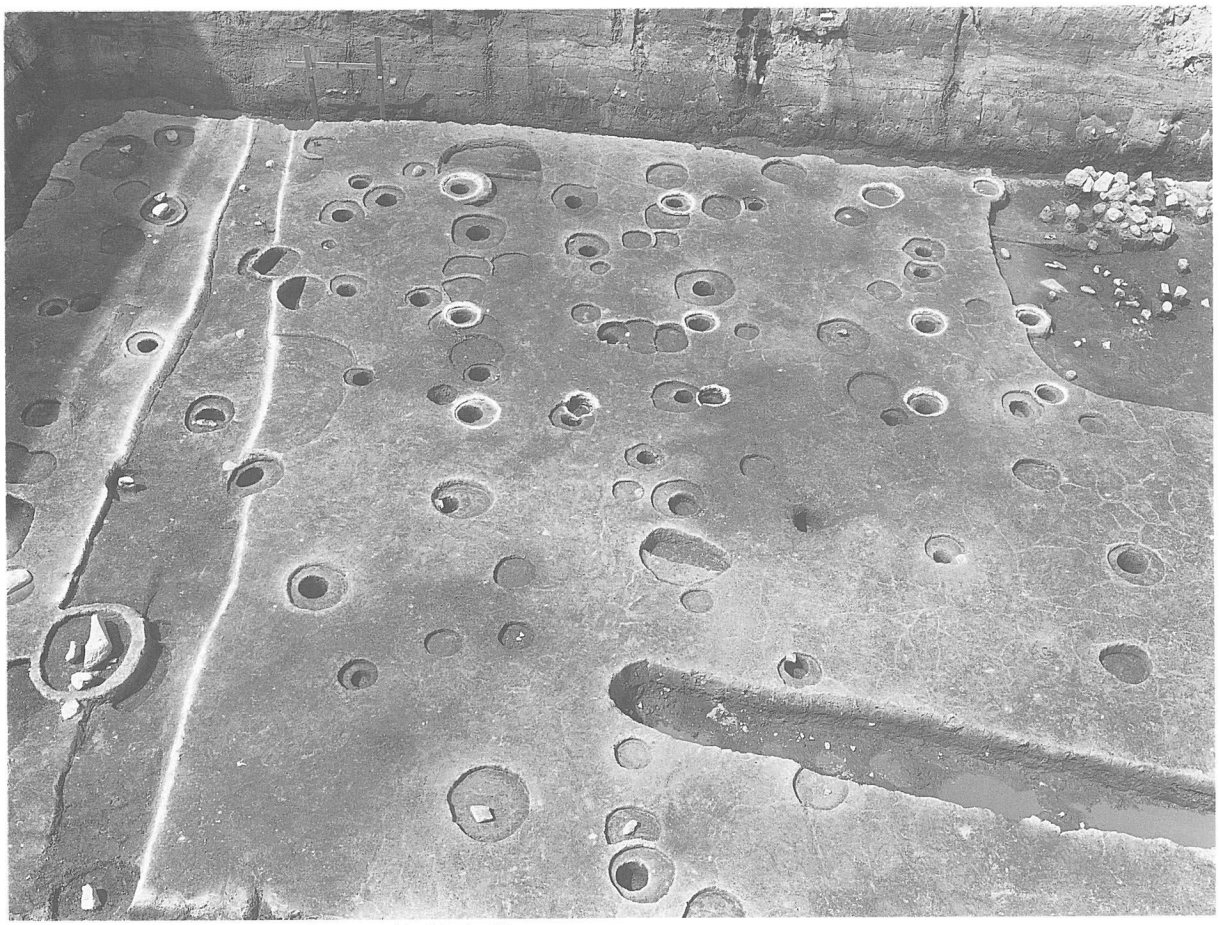
掘立柱建物址［SB－14］（南より）

掘立柱建物址［SB－18］（南より）



掘立柱建物址［SB－19］（北より）

掘立柱建物址［SB－20］（北より）

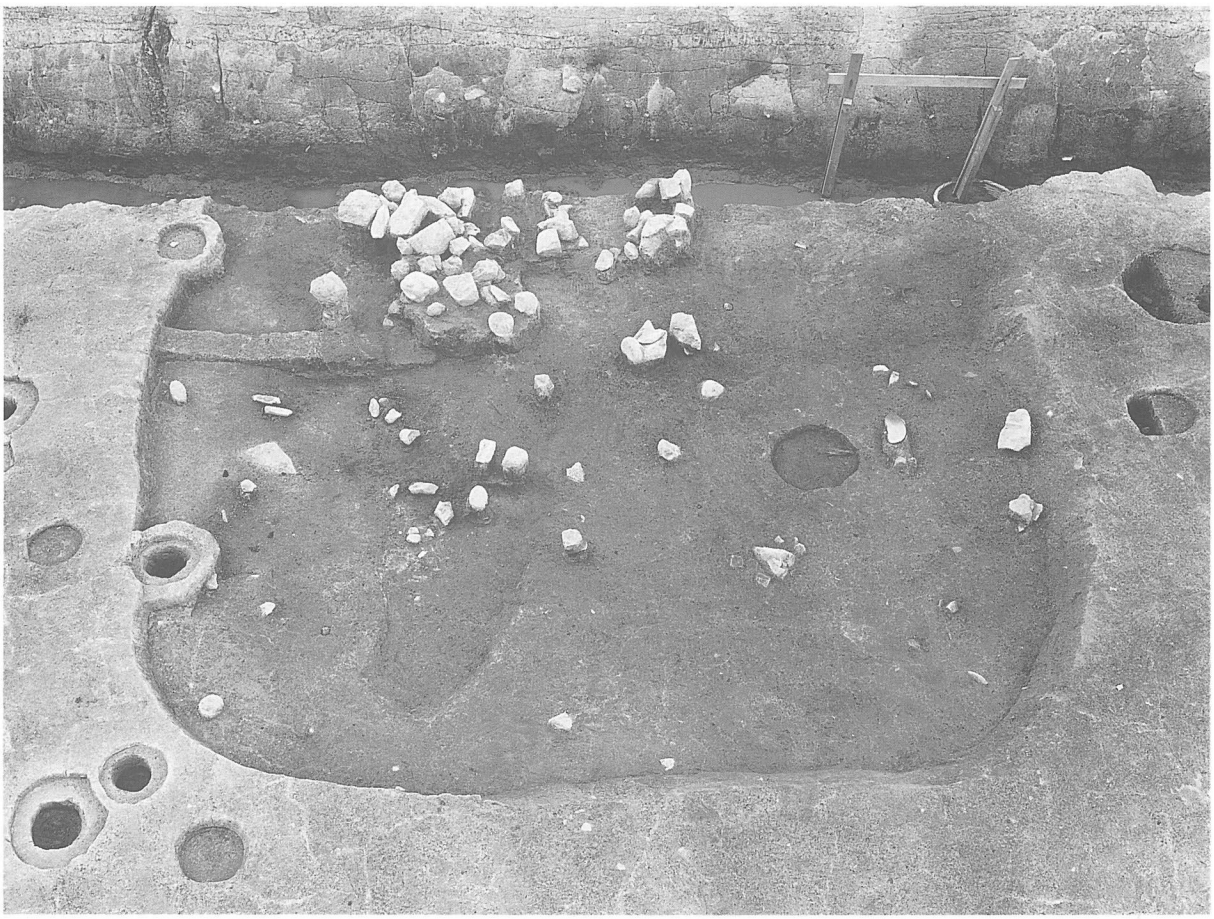


平安時代掘立柱建物址［SB－37］（南より）

中世掘立柱建物址［SB－39・40］（南より）

図版34

土壙－３全景（南より）

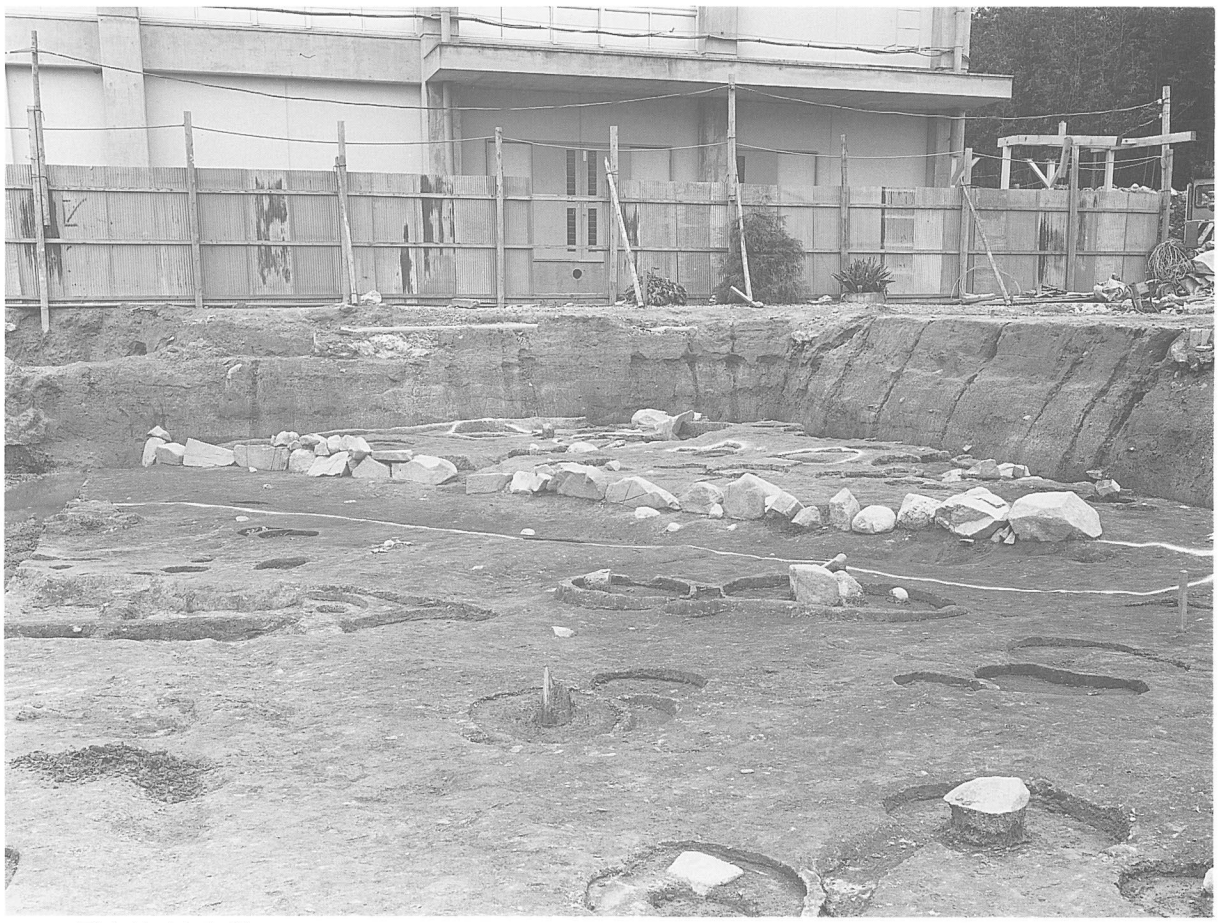


火葬墓全景（南より）

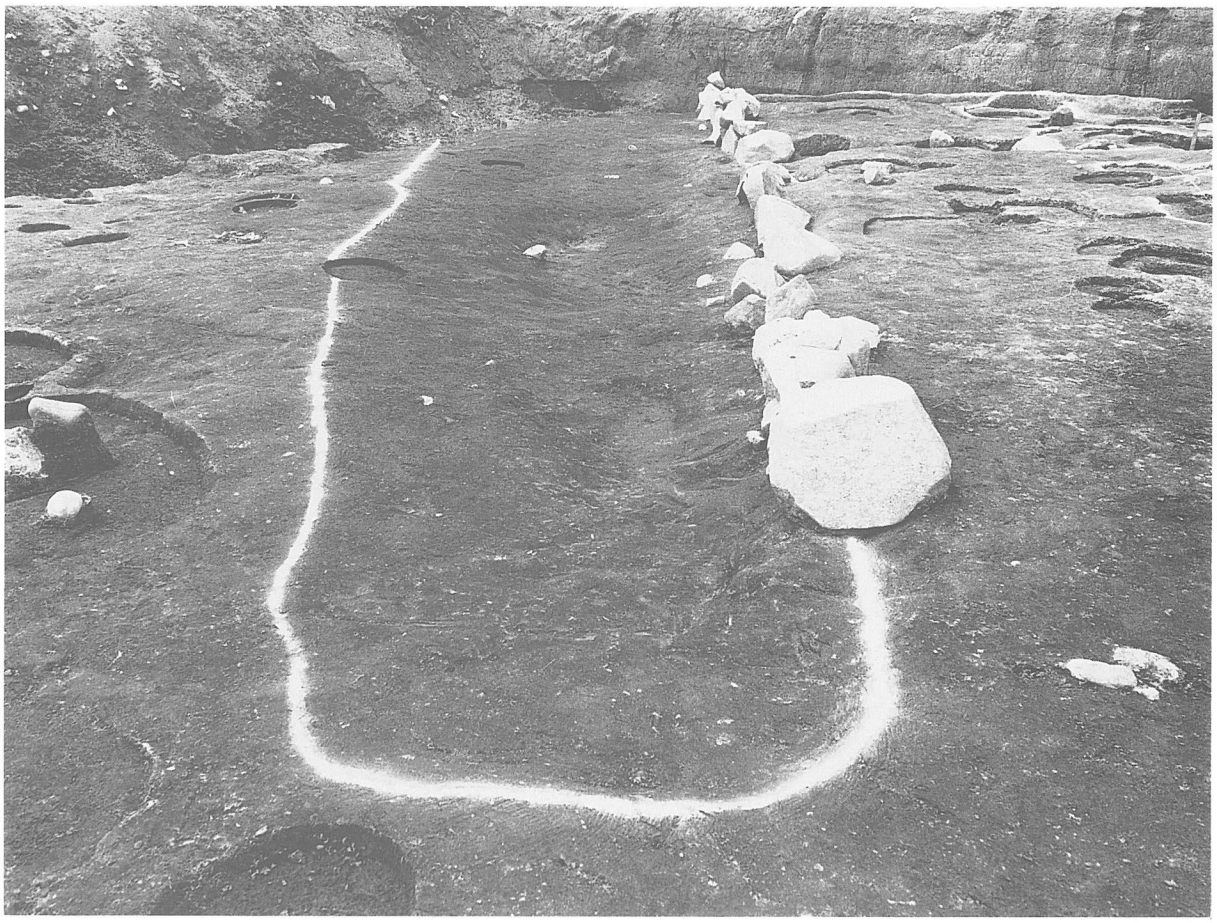
上層遺構面北半部分（西より）

上層遺構面南半部分（西より）

図版36

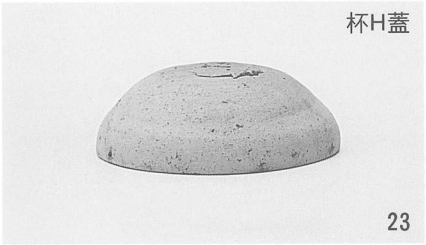


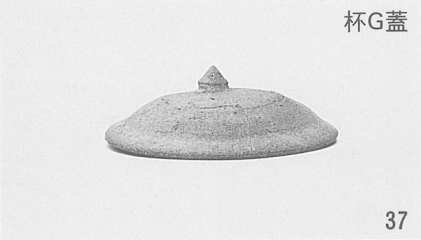
石列全景（南より）

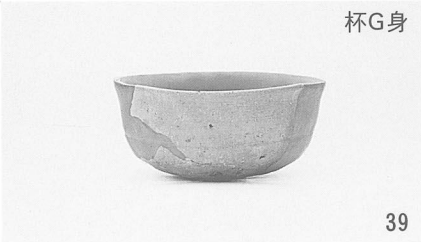


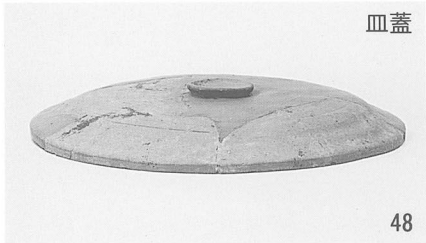
石列および南溝全景（東より）

溝－1出土土器（2：土師器）



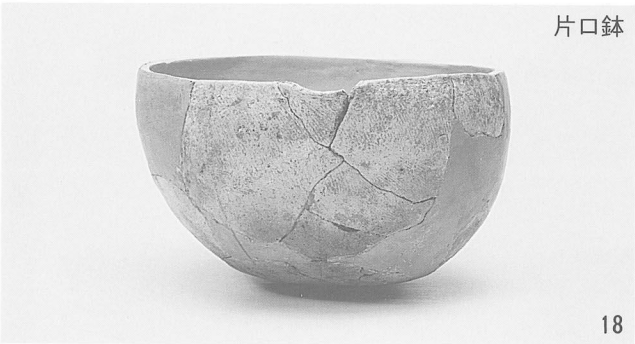


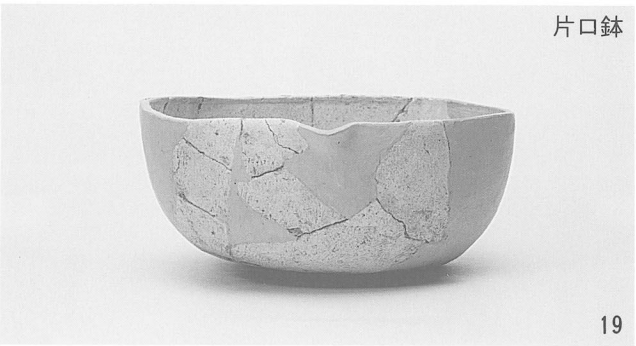




溝－2出土須恵器

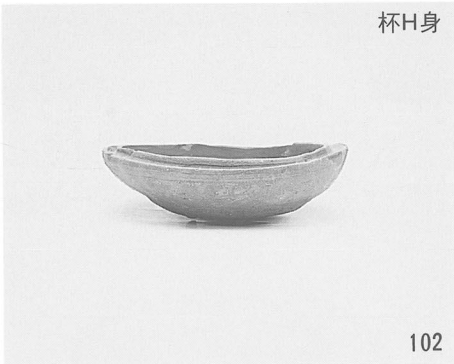
図版38

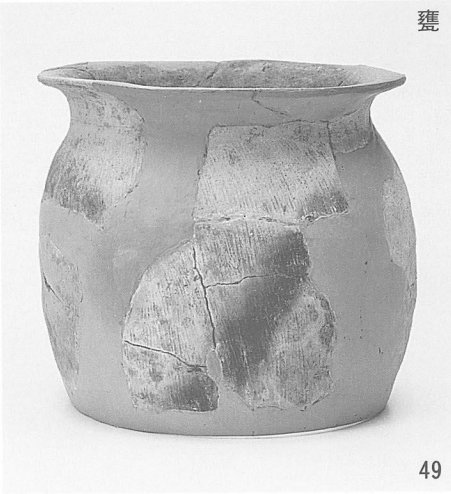




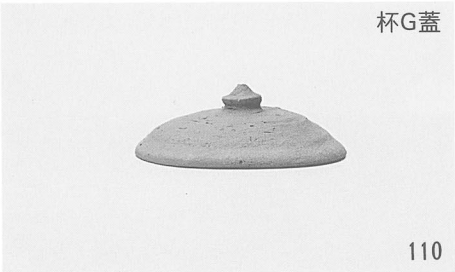
溝－2出土土師器

土壙－4出土土器(77．37：土師器)

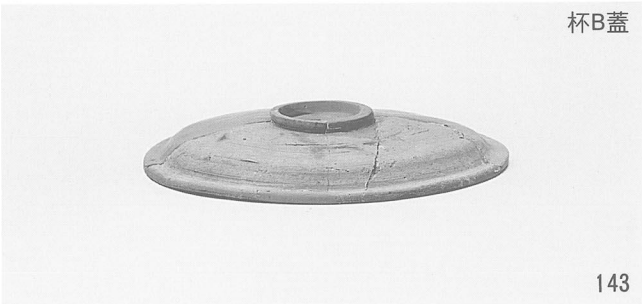




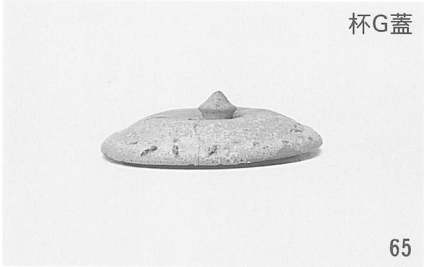
SB－14雨落溝内出土土器（49：土師器）

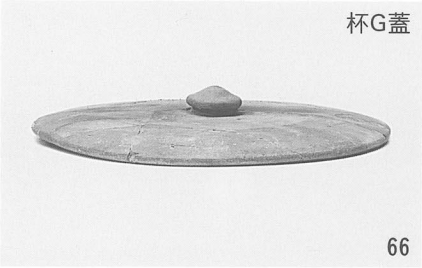


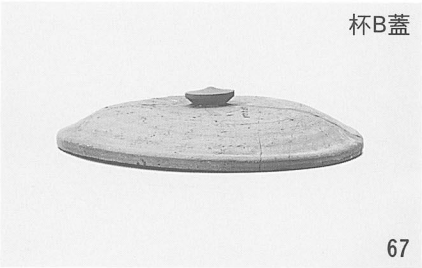
SB－21雨落溝内出土土器

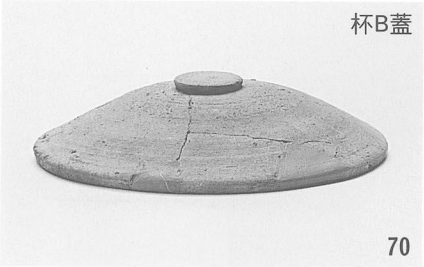


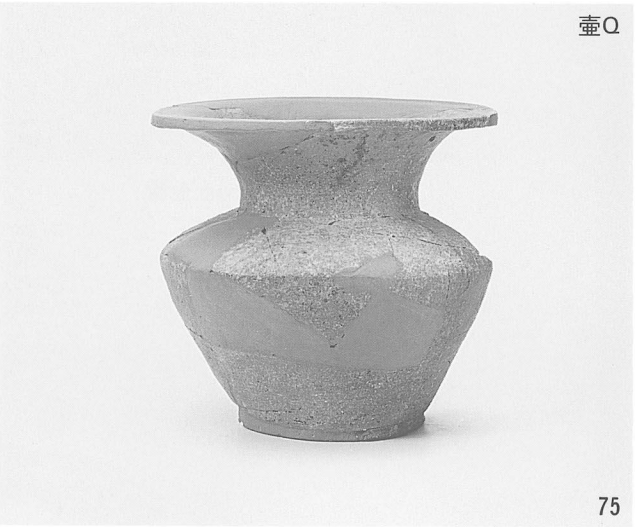
SB－18柱穴内出土土器



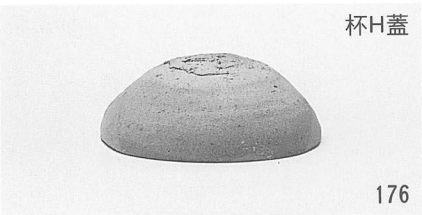


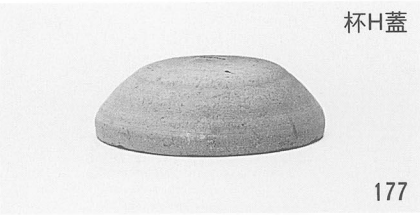


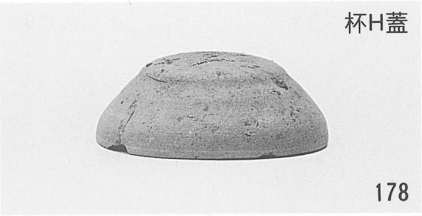


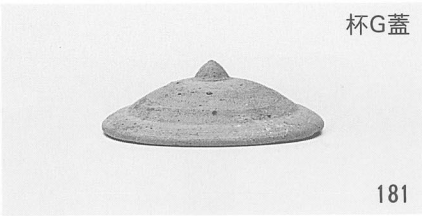


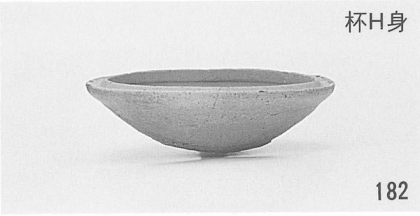
土壙－3出土土器（29：土師器）

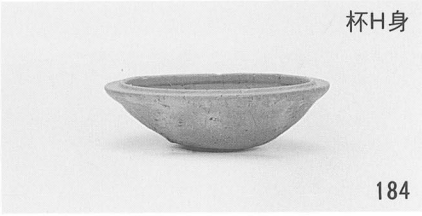


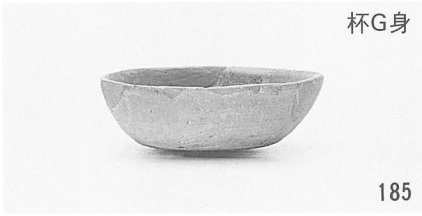


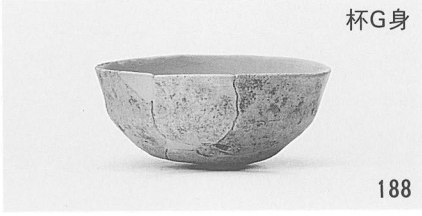




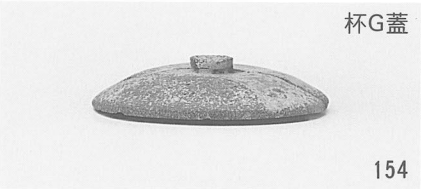


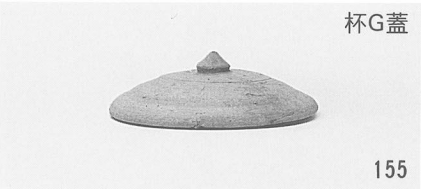


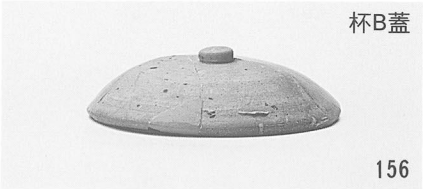


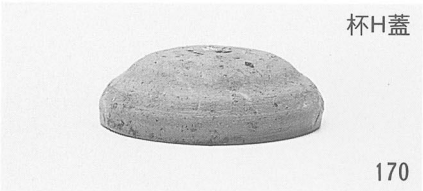


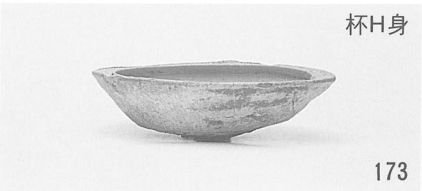
石列南溝内出土土器(67～76：土師器)



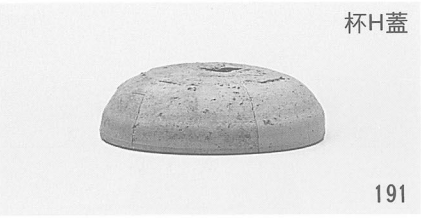


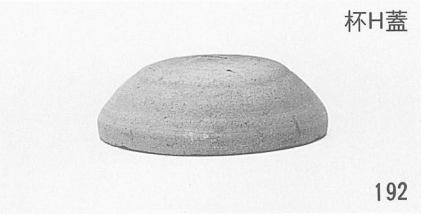


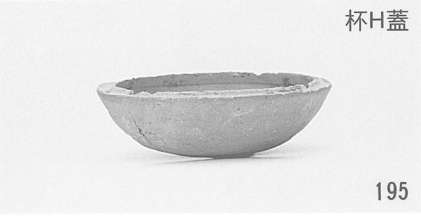


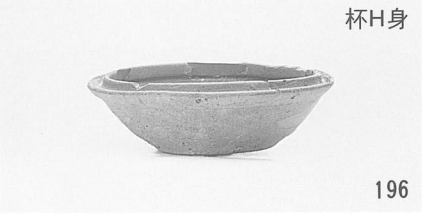


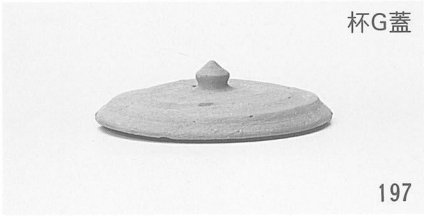
石列関連土器(62．63：土師器)

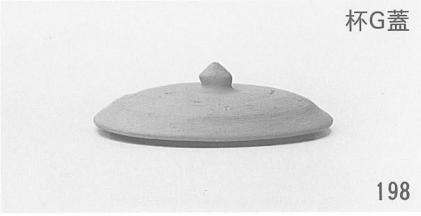


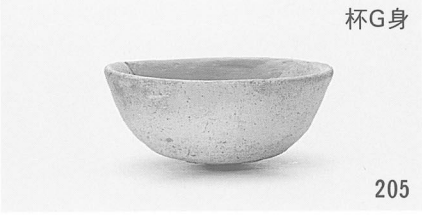


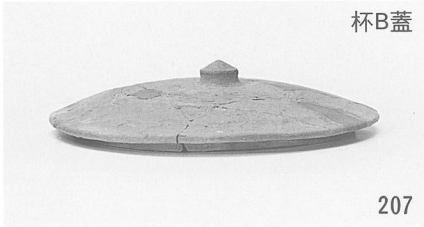


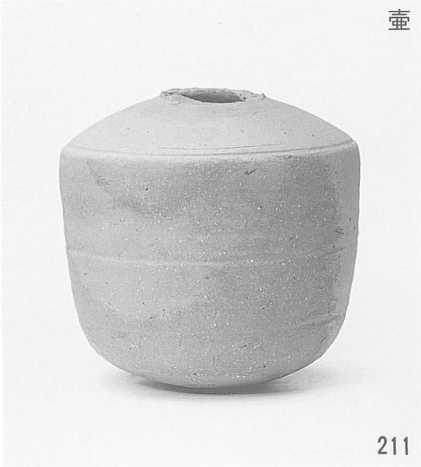




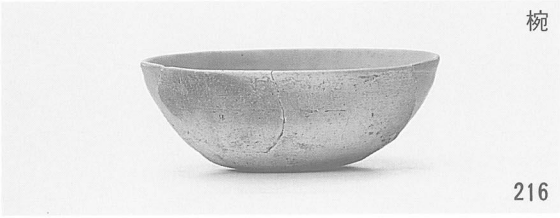






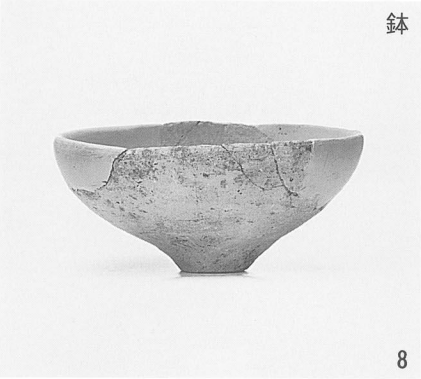


ピット内出土飛鳥・藤原時代土器(77．78：土師器)

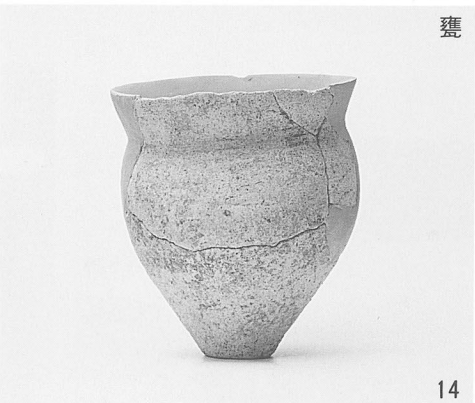


ピット内出土奈良時代土器

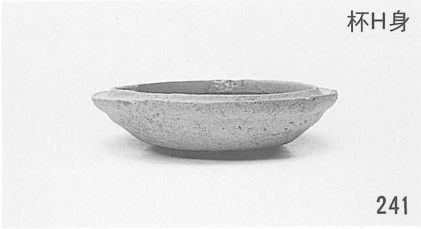
土壙－１出土土器

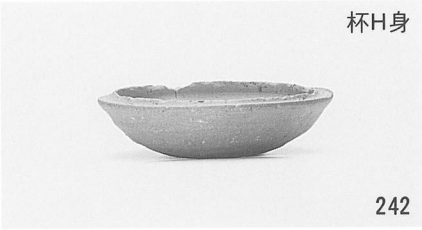


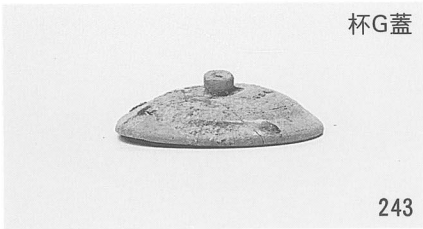
土壙－２出土土器

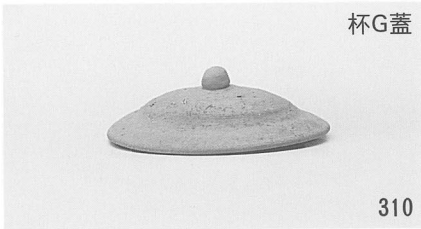


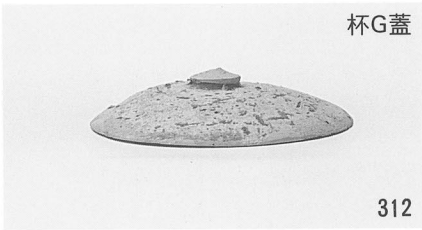
包含層出土弥生土器

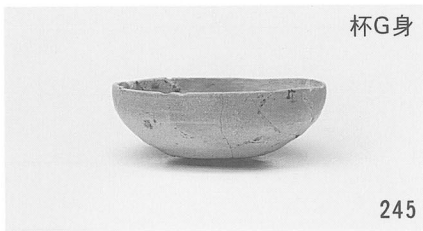


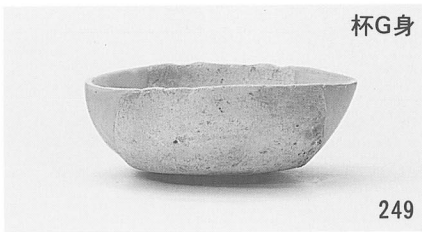






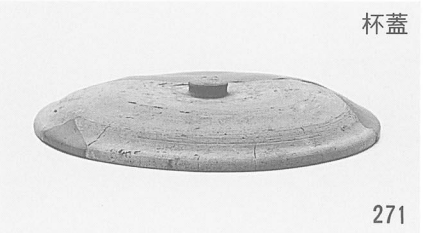


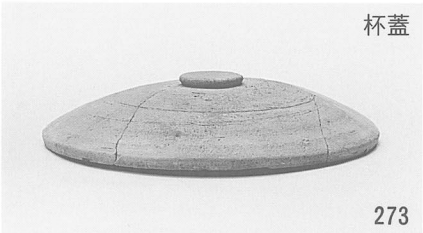


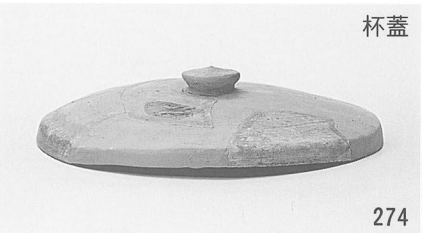


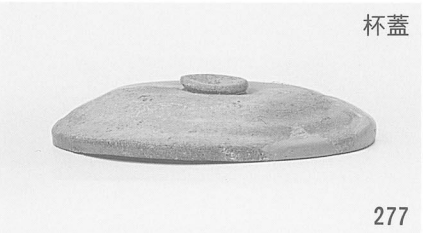
包含層出土飛鳥・藤原時代土器（88：土師器）

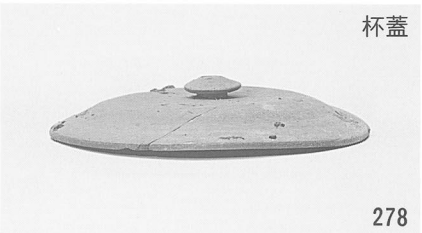
図版46

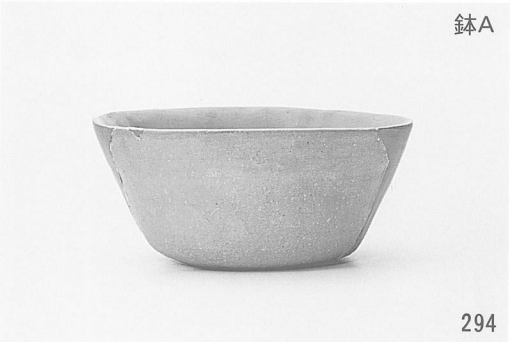








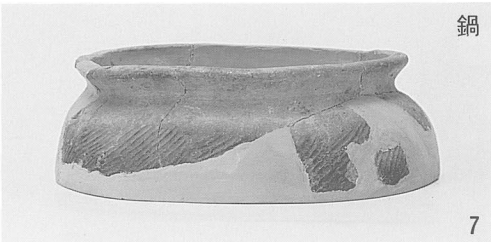




包含層出土奈良時代土器（92：土師器）

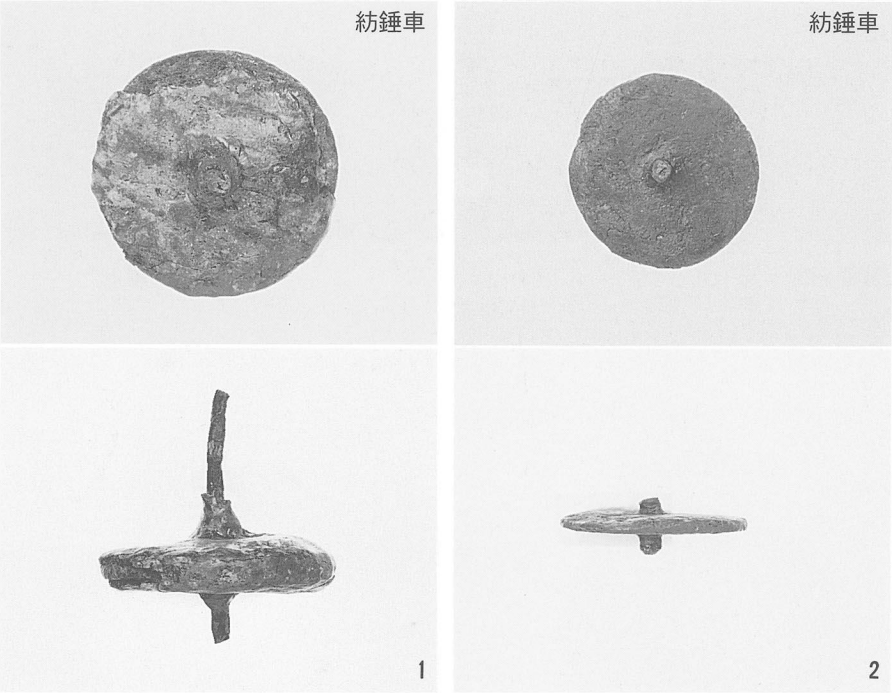
火葬墓出土土器

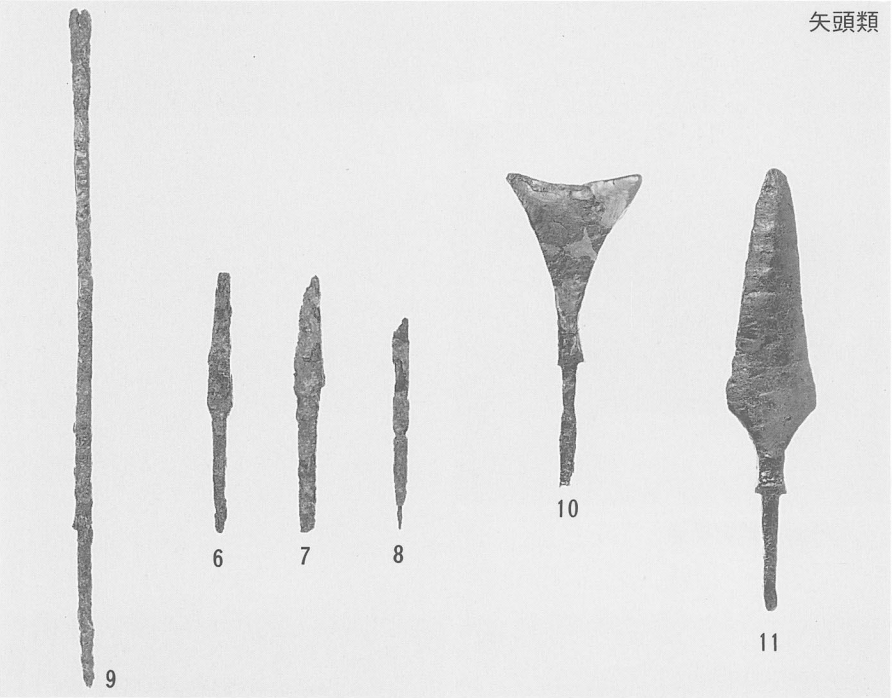
ピット内出土御歯黒壷

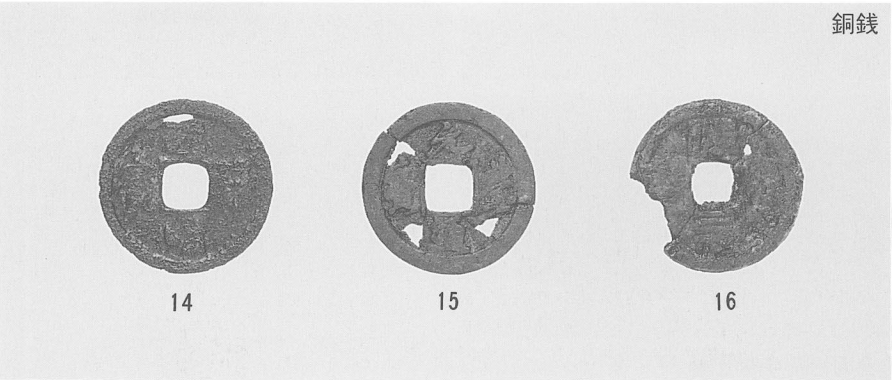


包含層出土中世土器

図版48







出土金属製品

兵庫県文化財調査報告書　第87冊

有年原・田中遺跡

平成３年２月28日　　発行

編　　集　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発　　行　　兵 庫 県 教 育 委 員 会
〒650 神戸市中央区下山手通1丁目10番1号

印　　刷　　福 田 印 刷 工 業 株 式 会 社
〒658 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6-3